

ジャン・クリストフ

JEAN-CHRISTOPHE

第七卷 家の中

青空文庫

序

ジャン・クリストフの友人らへ

私は数年来、既知あるいは未知の離れてる友人らと、いつも心のうちで話をしてきたが、今日では声高に話す必要を感じずる。それにまた、彼らに負うところを感謝しなければ、私は忘恩者となるかもしれない。ジャン・クリストフのこの長い物語を書き始めてより、私は彼らとともに、彼らのために、書いてきたのである。彼らは私を励まし、忍耐して私のあとについて来、その同情で私を元気づけてくれた。もし私が、彼らに多少の善をなし得たとしても、彼らはさらに多くの善を私になしてくれた。私のこの作品は、われわれの思想を結合した果実である。

私はこの作品に着手したとき、少数の友をしか期待し得なかった。私の望みはソクラテスの家の程度にとどまっていた。しかし年を経るに従って私はますます、同じものを愛し同じものを苦しむことにおいて、パリと地方とを問わず、フランスとフランス以外とを

問わず、いかに多くの同胞があるかを感じた。広場の市にたいする軽蔑けいべつを語ることによって、クリストフが自分の本心を——ならびに私の本心を——吐露するところの、この前の一巻が出たおりに、私はその証拠を得たのであった。私のいかなる著書も、これほど直接の反響を呼び起こしたものはなかった。実際のところ、それはただに私の声だったばかりではなく、また私の友人らの声だったからである。クリストフは私のものであると同様にまた彼らのものであることを、彼らはよく知っている。われわれはクリストフのうちに、われわれに共通な魂を多分に投げ込んでおいたのである。

クリストフは彼らのものであるがゆえに、私は今日提供するこの一巻について多少の説明を読者におこななければならぬ。広場の市におけると同じく、この一巻のうちにも彼らは小説的波乱を見出さないだろうし、あたかもここで主人公の生活は中止されたかの観がある。

私はここに、いかなる情況のうちに私がこの全部の著作に取りかかったかを、陳述しなければならぬ。

私は孤立していた。フランスにおける多くの人々と同様に、私は害悪な精神界に窒息し

かけていた。私は呼吸しなかった。不健全な文明にたいして、偽りの選良者らから腐敗されてる思想にたいして、反抗して起ちたかった。その選良者らに言つてやりたかった、

「君らは嘘うそを言つてる、君らはフランスを代表してはいない。」

それには、純潔な眼と心とをもち、発言の権利を得るだけの十分高い魂をもち、人に耳を傾けしむるに足りる十分強い声をもつてる、一つの主人公が、私に必要であつた。私は気長にそういう主人公を築き上げた。意を決してこの著述に筆を染むる前、私は主人公を十年間も自分のうちに担になつていた。クリストフがいよいよ発足したのは、私がすでに最後まで彼の道程を見きわめたときにあつた。そして、広場の市のある部分や、ジャン・クリストフの終わりのある部分（ことに燃ゆる荊の中のアンナの章）などは、曙よりも前に、あるいは同時に、書かれていた。クリストフやオリヴィエのうちに反映するフランスの映像は、最初よりして、本書のうちに一定の場所を占めていた。それゆえに、これをもって著作の脱線だと見なしてはいけない。これは道中予定の佇止ちよしであつて、過ぎ来し谷間をふり返り見、行く手の遠い地平線をうちながむべき、人生の大なる覽台テラスの一つである。

言うまでもなく私は、これら最近の巻（広場の市と家の中）において、もとよりその後の部分においても同様であるが、一つの小説を書くという志望は少しもなかつた。それで

はこの作品はいつたいなんであるか？ 詩であるのか？——いや名前の必要がどこにあるう。一人の間人を見て、それは小説か詩かと尋ねる者が世にあらうか。私が創造したのは一個の間人である。一個の間人の生活は、文学上のある形式の中にはめ込まれ得るものではない。その法則は生活自身のうちにある。そして各生活はそれぞれ自己の法則をそなえている。その掟は自然の力の掟と同じである。人間の生活には、静かな湖水のごときもあり、雲の流るる明るい大空のごときもあり、豊饒な平野のごときもあり、切り立った山嶺のごときもある。ジャン・クリストフは、いつも大河のごとくに私の眼には映った。私は最初よりそれを述べておいた。——大河の流れのうちには、周囲の野や空を映しながら広々として眠つてるように思える場所がある。それでもやはり流れ変化しつづけている。時としては、静まり返った外見のうちに急流を包んでいて、その猛然たる勢いはやがて、先に行つて第一の障害にぶつかつたとき、突然現われてくることがある。そういうのが、ジャン・クリストフのこの一巻の姿である。今は、おもむろに水を集め、兩岸の思想を吸い込みながら、ふたたびその流れをつづけんとしている、海の方へ——われわれが皆行くべき海の方へ。

一九〇九年一月

ロマン・ローラン

一

俺おれには一人の友がある!……苦しいときに寄りすぎるべき一つの魂を、あえぐ胸の動悸どうきが静まるのを待ちながら、やつと息がつけるやさしい安全な一つの避難所を、見出したという楽しさ! もはや一人ではない。疲れて敵に渡されるまで、常に眼を見開き不眠のためめに充血さしながら、たえず武装していることも、もはや必要ではない。自分の全身を向こうの手中に託し、向こうでもその全身をこちらの手中に託した、親愛なる伴はんりよ侶があるのだ。ついに休息を味わい、彼が見張ってくれてる間は眠り、彼が眠ってる間は見張つてやる。子供のようにこちらを信頼してるなつかしい者を、保護してやるという喜びを知る。向こうに身をうち任せ、あらゆる秘密をも知られてるのを感じ、勝手に自分を引き回されるのを感じるといふ、さらに大きな喜びを知る。多年の生活のために老い衰え疲れていたのが、友の身体のうちうちに若々しく澆はつらつ刺と生まれ返り、新しい世界を友の眼でながめ、この世の一時の美しいものを友の官能で抱きしめ、生きることの輝かしさを友の心で楽しむ

……苦しみをも友とともにする……。ああ、友といっしょにいさえすれば、苦悶くもんまでが喜びである！

俺には一人の友がある！ 自分の遠くに、自分の近くに、常に自分のうちに、友がある。俺は友を所有し、俺は友のものである。友は俺を愛している。友は俺を所有している。融とけ合つて一つの魂となつたわれわれの魂は、愛に所有されてるのだ。

ルーサン家の夜会の翌朝、クリストフが眼を覚さましながら第一に考えたのは、オリヴィエ・ジャンナンのことであつた。彼はすぐに会いたくてたまらなくなつた。起き上がつて出かけた。八時前だつた。なま温あたたかい多少重苦しい朝だつた。早くも四月時分の氣候が見舞つたようで、雷雨模様の雲がパリーの上にたなびいていた。

サント・ジュヌヴィエーヴ丘の麓ふもとの、植物園のそばの小さな通りに、オリヴィエは住んでいた。その家は通りのいちばん狭い場所にあつた。階段が薄暗い中庭の奥に開いていて、不潔な雑多な匂においを放つていた。急な曲がり角かどをなしてる段々は、鉛筆で楽書きさされてる壁のほうへ傾かたいていた。四階まで上ると、灰色の髪を乱し平常着をだらしなくつけた女が、足音を聞いて扉とびらを開いたが、クリストフの姿を見てまた荒々しく扉を閉しめた。どの階にも

たくさん住居があつて、建て付けの悪い扉の隙間から、子供らの押し合つたり泣き叫んだりするのが聞こえていた。天井の低い各階の中にたがいに積み重なり、胸悪くなるような中庭のまわりにぎっしりつまつてる、不潔な凡俗な生活のうごめきだった。クリストフは嫌悪の情に打たれた。これらの人々は、少なくとも万人のための空気をもつてる田舎を離れて、いかなる渴望のためにここへ引きつけられてるのか、そして、生涯涯墓の中みたいな生活をしなければならぬこのパリーから、いかなる利益を得ることができてるのか、と彼は不思議に考えた。

彼はオリヴィエが住んでる階に達した。呼鈴の代わりに結び綱がついていた。クリストフはそれをあまり強く引つ張つたので、その音にまた幾つかの扉が階段口に半ば開かれた。オリヴィエが扉を開いた。その服装の質素ではあるが気をつけた小ぎれいさにクリストフは注意をひかれた。その服装の心づかいは、他の場合だったら気にも止まらなかつたらうが、ここでは快い意外さを与えるのだった。よごれた雰囲気の中にあつて、それはある微笑ましい健全なものをもつていた。すぐに彼は、オリヴィエの清い眼にたいして前日と同じ感銘を得た。彼は手を差し出した。オリヴィエはおずおずして口ごもつた。

「あなたが、あなたがこんなところへ……」

クリストフは、相手の露あわな気兼ねのうちに、その愛すべき魂を捕えることばかり考えていて、返辞もせずただ微笑んだ。オリヴィエを押しやって中にはいった。寢室と書斎とをかねて一つきりの室だった。鉄の狭い寝台が、窓ぎわの壁に押し寄せてあった。枕まくら木の上に幾つも枕の重ねてあるのが、クリストフの眼に止まった。三つの椅子いす、黒塗りのテーブル、小さなピアノ、棚たなの上の書物、などが室を満たしていた。室はごく手狭で、天井が低く、薄暗かった。それでも、主人の眼の清澄な光を反映してるがようだった。すべてが小さいできちんと片付いていて、あたかも女の手がはいってるかのようだった。数輪の薔薇ばらの花が壇びんにさしてあって、古いフロレンス画家の写真で飾られる四方壁の室に、春の気を少しもたらしていた。

「それじゃあなたが、あなたが私に会いに来てくださったのですか。」とオリヴィエは心こめて繰り返していた。

「だって、来ざるを得なかったんです。」とクリストフは言った。「君のほうからは来てくれなかったでしょう。」

「そう思っているんですか。」とオリヴィエは言った。

それからほとんどすぐに彼はつづけた。

「まったく、そうかもしれないません。そう思われるのも無理はありません。」

「じゃあ、なぜ来られないんです？」

「あまり行きたいからです。」

「なるほどりっぱな理由だ！」

「ほんとうですよ、冗談じゃありません。あなたのほうはどうでもいいと思っ
ていられるのじゃないかと、心配していました。」

「僕もそんなふう^いに気をもんでみたんです。そして君に会いたくて来たんです。だが、それが君に厭^{いや}かどうか、僕にはすぐにわかるんだから。」

「もうそんな厭味は言わないことにしてください。」

二人は微笑^{ほほえ}みながら顔を見合った。

オリヴィエは言った。

「昨日は、私は馬鹿でした。あなたの気持を悪くしやすまいかと心配していました。私の臆^{おくびよう}病^{びょう}なのはまったく病的です。もう何にも言えなくなるんです。」

「そんなことは気にしないがいいです。君の国には饒^{おしゃべり}舌^{じつ}家^けがかなり多いから、ときどき黙^{もく}り込^こむ人に、たとい臆病^{おくびょう}さからでも、言い換えれば心ならずにも、黙^{もく}り込^こむ人に出会

うと、うれしいものです。」

クリストフは自分の皮肉を面白がって笑っていた。

「では、私が無口だから訪ねて来てくださったのですか。」

「ええ、君が無口だから、君が沈黙の徳をそなえてるからです。沈黙にもいろんな種類があるが、僕は君の沈黙がすきです。それだけのことです。」

「どうしてあなたは私に同情を寄せられるのですか。ろくにお会いしたこともないのに。」

「それは僕のやり口です。僕は人を選ぶのにぐずつてはしない。気に入った人にこの世で出会おうと、すぐに決心して追っかけて行って、いっしょにならなきや承知しないんです。」

「追っかけて行って思い違いだったことはありませんか。」

「幾度もありますよ。」

「こんども思い違いではありませんでしょうか。」

「それはじきにわかることです。」

「ああそうだったら、私はどうしましょう。ほんとに私はぞっとします。あなたから観察されてると思うだけで、私はもう何もできなくなります。」

クリストフはやさしい好奇心の念で、その感銘深い顔をながめた。それはたえず赤くなったり蒼あおくなったりしていた。種々の感情が水の上をかすめる雲のように去来していた。

「なんとという神経質なかわいい男だろう！」と彼は考えた。「まるで女のようにだ。」

彼はやさしくその膝ひざに手をやった。

「ねえ、」と彼は言った、「僕が警戒しながらやって来たのだと君は思ってるのですか。友人を相手に心理研究をやるような奴を、僕はだいきら大嫌いです。たがいに自由に誠実であつて、腹藏なく、うわべをつくろう恥じらいもなく、いつまでもうち解けないという懸念もなく、たがいに言い逆らうことを恐れもしないで、感じたことをすべてうち明け合うという権利——一瞬間後にはもう愛さなくなつても構わないが、ただ現在は愛してるという権利、それだけが僕の求めるものです。そうしたほうが、いつそう男らしくりっぱではないですか。」

オリヴィエは真実な様子で彼の顔をながめて答えた。

「それはそうに違いありません。そのほうが男らしいです。そしてあなたは強者です。しかし私は、なかなかそうはいきません。」

「いや僕は君を強者だと思つてるんです。」とクリストフは答えた。「ただ違った意味で

です。それにまた、もしよかつたら僕は君を助けて強者にしたいために、やって来たんです。というのは、先刻さつきあれまで言つたからつけ加えて言うんですが、そうでなければこれまで打ち解けて言えはしないが、僕は——将来はとにかく現在では——君を愛してるんです。」

オリヴィエは耳までも赤くなつた。きまり悪くてじつとしながら、なんと答えていいかわからなかつた。

クリストフは周囲を見回した。

「ひどい住居ですね。他に室はないんですか。」

「物置みたいなのが一つあるきりです。」

「ああ、息もできない。よくこんな所に住んでいられたものですね。」

「馴なれてくるんです。」

「僕ならどうしたつて馴れやしない。」

クリストフは胸チヨッキ衣の胸を開いて、強く息をした。

オリヴィエは窓のところへ行つて、すっかり開け放つた。

「クラフトさん、あなたは都会にいてはいつも不快に違いありません。が私には、自分の

元気を苦しむという憂いはありません。どこへ行っても生きられるほど息が小さいんです。それでもさすがに、夏の夜は苦しいことがあります。夏の夜が来るのを見るとびくびくします。いよいよその時になると、寝台の上にすわっています。まるで窒息でもしそうな気がするんです。」

クリストフは、寝台の上につき重なってる枕まくらや、オリヴィエの疲れた顔をながめた。暗く闇らやみの中でもがいてるその姿が眼の前に浮かんだ。

「こんな所は出ちまったがいいでしょう。」と彼は言った。「どうしていつまでもいるんです?」

オリヴィエは肩をそびやかして、平気な調子で答えた。

「どうせ、どこへ行つたつて同じです。」

重い靴くつおと音が天井の上を歩いていた。階下には金切声が言い争っていた。そしてたえず四方の壁は、街路を通る乗合馬車の響きに揺れていた。

「そしてこれはまたひどい家だ!」とクリストフは言いつづけた。「きたなくて、むれ返って、ひどく貧乏くさい。どうして毎晩こんな家へ帰って来られるんです? がっかりしやしないですか。僕だったらとても生きちやいられない。橋の下にでも寝たほうがましだ

「私も初めのうちは苦しかつたんです。あなたと同じように厭いやな気がしました。子供の時には、散歩に連れ出されて、人がうようよしてきてたない町を通つたばかりでも、胸がつまるような気がしました。口に言えない変な恐ろしさに襲われました。今もし地震でもあつたら、死んだままここにいつまでも放つておかれるだろう、などと考えました。そして、それが世にもつとも恐ろしい不幸のように思えたものです。そんな所へみずから好んで住まうとは、そしてたぶんそんな所で死ぬだろうとは、当時夢にも思つてはいませんでした。しかしそう気むずかしいことばかりも言つていられなくなつたのです。やはり今でも厭ではありませんが、もうそんなことは考えないようにしています。階段を上がつてくるときには、眼も耳も鼻も、あらゆる官能をふさいでしまつて、自分のうちに潜み込んでしまふんです。それから向こうに、御覧なさい、あの屋根の上に、アカシアの木の枝が見えています。そのほかのものは何にも眼にはいらぬように、私はこの隅すみにすわり込みます。夕方、風があつた枝を揺るときには、パリーから遠く離れてる気がします。ときおりあの歯形かたちの木の葉がさらさらとそよいでるのを見ると、大きな森が波打つてる景色にもまして、私には楽しく思えます。」

「そうだ、僕の思ったとおりだ、」とクリストフは言った、「君はいつも夢ばかりみてるんですね。しかし悲しいことには、生活の意地悪さと闘たたかってるうちに、他の生活を創造するのに役だつはずの幻想の力は、しだいに磨すり減らされてゆくでしょう。」

「それがたいいていの人の運命ではないでしょうか。あなた自身でも、憤りや闘いのうちに自分を無駄に費やしてはいませんか。」

「僕のは違う。僕はそのために生まれた人間だ。この腕や手を見たらわかるでしょう。奮闘するのが僕の健全な生活です。しかし君は、十分の力をもっていない。そんなことはよくわかってる。」

オリヴィエは自分の瘦やせた拳こぶしを悲しげにながめて言った。

「ええ、私は弱いんです。いつもこんなでした。しかししかたありません。生活しなければならぬんです。」

「どうして生活してるんです？」

「出稽古でげいこをしています。」

「なんの？」

「なんでもです。ラテン語やギリシヤ語や歴史の復習をしてやり、大学入学受験者の準備

をしてやり、また市立のある学校で道徳の講義をしています。」

「なんの講義？」

「道徳です。」

「なんて馬鹿なことだろう。君たちの学校じゃ道徳を教えるんですか。」

オリヴィエは微笑ほほえんだ。

「もちろんです。」

「そして十分間以上も話すだけの種がありますか。」

「一週に十二時間の講義を受け持っています。」

「では悪を行なうことでも教えるんですか。」

「なぜです？」

「善とはなんであるかを知らせるためには、そんなにしゃべる必要はない。」

「というより、知らせないためには、でしょう。」

「なるほど、知らせないためには。そして、知らなくとも善を行なうに少しもさしつかえはない。善は学問ではなくて、行為だ。道徳を喋ちやうちやう々するのは、神経衰弱者ばかりだ。

そして道徳のあらゆる条件中第一のものは、神経衰弱でないということだ。世間の術学げんがく

者どもは、言わば自分は足がたたなくせに人に歩くことを教えようとしている。」

「その連中は何もあなたのために語ってるのではありません。あなたは道徳を御存じですが、世には知らない者がたくさんあります。」

「そんなら、子供のように、自分で覚えるまで四足で匍はわせとけばいいんだ。しかし、二本の足でやろうと四足でやろうと、とにかく第一のことは、歩くということだ。」

彼はその四、五歩にも足らない狭い室を隅すみから隅すみへ大股おおまたに歩いた。そしてピアノの前に立ち止まり、蓋ふたを開き、楽譜を繰り広げ、鍵盤けんばんに手を触れて、言った。

「何かひいてくれませんか。」

オリヴィエは飛び上がった。

「私が！」と彼は言った。「とんでもないことです！」

「ルーサン夫人の言葉によると、君はりっぱな音楽家だそうです。ねえ、ひいてくれたまえ。」

「あなたの前で？」と彼は言った。「それこそ寿命が縮まってしまいます。」

その心から出た率直な叫び声に、クリストフは笑い出し、オリヴィエ自身も多少当惑しながら笑った。

「いったいそんなことが、」とクリストフは言った、「フランス人にとつちや口実となるんですか。」

オリヴィエはなお拒みつつけた。

「でもなぜです？　なぜ私にひかせようとなさるんです？」

「それはあとで言うから、ひいてくれたまえ。」

「何をひくんですか。」

「なんでも君の好きなものを。」

オリヴィエは溜息ためいきをもらし、ピアノのところへ行つてすわり、自分を選んで一徹な友の意志に服従して、しばらくぐずついたあとに、モーツアルトの美しい口短調アダジオをひき始めた。初めのうちは、指が震えて鍵キを打つ力もなかった。それからしだいに元氣が出て来た。モーツアルトの言葉を繰り返してるだけだと思いつつながら、知らず知らず自分の心を吐露していた。音楽は慎みのない腹心者である。もつともひそかな思想をも吐露してしまう。モーツアルトの緩徐曲の靈妙な作意の下から、クリストフはモーツアルトののではなく、それをひいてる新しい友の、眼に見えぬ特質を見てとつた、神経質な純潔な情け深い恥ずかしがりのこの青年の、憂鬱ゆううつな静穩さを、内気なやさしい微笑を。しかし、その

曲の終わりに近づいて、切ない恋の楽句が高まって碎ける頂点に達すると、オリヴィエは堪えがたい羞恥しゆうちを感じてひきつづけられなくなった。指がきかず音が不足した。彼はピアノから手を離して言った。

「もうひけません……。」

後ろに立っていたクリストフは、彼のほうへかがみ込んで両腕を貸してやり、中断した楽句をひき終えた。それから言った。

「これで君の魂の音色がわかった。」

彼はオリヴィエの両手を取り、その顔をまともにはばらくながめた。そしてやがて言った。

「不思議だなあ……君には以前会ったことがある……僕はずっと前から君をよく知っていた！」

オリヴィエの唇は震えた。彼はまさに話し出そうとした。しかし口をつぐんだ。

クリストフはなおちよつと彼を見守った。それから黙って微笑ほほえみかけた。そして帰っていった。

彼は輝かしい心で階段を降りていった。二人のごくきたない小僧が、一人はパンをもち一人は油壘びんをもつて上がってくるのにすれ違った。彼はその二人の頬ほっぺた辺なを馴なれ馴なれしくつねつてやった。顔赤めてる門番に微笑みかけた。街路に出ると、小声で歌いながら歩いた。リュクサンブールの園へはいった。木陰のベンチに身を横たえて眼をつむった。空気は静まり返っていた。散歩の人もあまりなかった。噴水の不同な響きや、ときどき砂の上の足音などが、ごく弱く聞こえていた。クリストフは堪えがたい懶ものうさを感じて、日向ひなたの蜥と蜴かげみたいにうつとりとしていた。木影はもうとくに彼の顔から離れていた。しかし彼は思い切つて身を動かしかねた。種々の考えがぐるぐる回っていた。が彼はそれを一つ所に定めようとしなかつた。どの考えも皆楽しい光のうちに浸っていた。リュクサンブールの大時計が鳴った。彼はそれに耳を貸さなかつた。がすぐそのあとで、十二時を打つたのだという気がした。彼は飛び上がった。二時間もぶらぶらしたのであって、ヘヒトの家での面会時間をも忘れ、朝じゆう無駄にしてみました。みずから笑い出して、口笛を吹きながら帰りかけた。商人の呼び売りの声に基づいてカノンの Rond を吹いた。悲しい旋メロデー律イーも彼のうちでは喜びの調子となった。同じ町内の洗濯屋せんたくの前を通りかかると、いつものとおり、店の中をじろりと横目で見やった。色艶つやのない火にほてった赤毛

の小娘が、その痩せ細った両腕を肩の近くまで裸にし、胸衣をくつろげて、火熨斗ひのしをかけた。彼女はいつものとおり厚かましい色目を使ってみせた。その眼つきが彼の眼に出会っても、彼は初めていらだたなかつた。彼はなお笑った。自分の室にもどつたが、今まで気がかりだつた事柄も何一つ眼に留まらなかつた。帽子や上衣や胸衣チヨッキを左右に投げ出して、世界を征服するような元気で仕事にかかつた。あちらこちらに散らかつてる音楽の草稿を取り上げた。が心はそこになかつた。ただ眼で読んでるばかりだつた。数分間たつと、頭がぼんやりして、リユクサンブールの園にいたときと同じく、楽しい夢心地に陥つていった。彼は二、三度それにもずから気づいて、はつきり我に返ろうとした。しかし無駄だつた。快活に叫び散らし、立ち上がつて、冷水の盥たらいに頭をつき込んだ。それで少し酔い心地からさめた。黙つてぼんやり微笑を浮かべながら、テーブルのところにもどつてすわつた。彼は考えた。

「これと恋愛との間に違いがあるかしら？」

本能的に彼は、あたかも恥ずかしがつてるかのようにそつと考えていた。彼は肩をそびやかした。

「愛するのに二つの仕方はない……いやむしろ二つある。自分の全部を挙げて愛する仕方

と自分の皮相な部分のわずかだけをささげて愛する仕方とだ。俺おれは後者のような吝しみつたれた心をもちたくないものだ！」

それから先は一種の羞恥しゆうちを覚えて、考えるのをやめた。そして長い間じつと、内心の夢想到ほほえみかけていた。彼の心は沈黙のなかに歌っていた。

——君は私のもの。そして今や初めて、私はまったく私のもの……。

彼は紙をとつて、心が歌つてることを静かに書きつけた。

二人はいつしよの部室へやに住もうときめた。クリストフは半期分の部室代へやだいを無駄にするのも構わず、すぐに移り住もうとした。オリヴィエはいつそう細心であつて、愛情が少ないのではなかったが、今の部室代の期限がすぎるまで待とうと勧めた。クリストフにはそういう計算がわからなかった。金をもたない連中の多くと同じく、彼は金を失うことをなんとも思わなかった。そしてオリヴィエが自分よりなおいつそう困窮してるのだろうと想像した。ある日彼は、友の窮乏に驚いて、ふいとそのものを去り、二時間後に、ヘヒトから前借りしてきた五フランの貨幣を数個、得意げに並べだした。オリヴィエは顔を赤らめて断わった。クリストフは不満に思つて、中庭で音楽をやつてたイタリー人へ、その金を投

げ与えようとした。オリヴィエはそれを引き止めた。クリストフは立ち去った。表面は氣持を悪くした様子をしていたが、実際では、オリヴィエから断わられたのも自分のへまなせいだとして、自分自身に腹がたっていた。ところが友の手紙で、その不機嫌きげんは慰められた。オリヴィエは、彼と知り合いになった喜びや彼が自分のためしてくれようとした事柄にたいする感激など、すべて声高に言い得なかつたことを書いてよこした。クリストフは感情のあふれた狂気じみた返事を出した。十五歳のおり、友のオットーに書いた手紙と似たものだった。情熱と支離滅裂な言葉とに満ちていた。フランス語やドイツ語の駄洒落だしゃれを交えていた。その駄洒落に楽譜をつけてまでいた。

二人はついに住居を定めた。モンパルナス町のうちで、ダンフェール広場の近くに、古い家の六階に、台所付三室の住居を見出していた。室は皆狭かつたが、四方を大きな壁で囲まれた小さな庭に臨んでいた。二人が住んでる六階からは、他よりも少し低い正面の壁越しに、パリーになお多く見受けるような、人に知られないで隠れてる修道院の大きな庭を、ずっと見渡すことができた。そのひっそりした庭の小径こみちには人影もなかつた。リュクサンブールのそれよりもいっそう高くいっそう茂つてる老木が、日の光を受けてそよいでいた。小鳥の群れがさえずっていた。夜明けごろから笛のような鶉つくみの鳴き声がし、つぎに

は騒々しいリズムの雀すずめの合唱となった。そして夕方になると、夏には、輝かしい空気をつき切つて空に滑走する燕つばめの、狂気じみた鋭い叫びが聞こえた。夜は、月光の下で、池の水面に立ちのぼる泡あわに似た、蝦蟇がまのすがすがしい声が出た。もしその古い建物が、あたかも大地が熱に震えてるかのようになり、重い馬車の響きにたえず揺られることがなかったら、パリーの町であることを忘れてしまえるほどだった。

一つの室が、他の室より広くて美しかった。二人の友は争つてそれをたがいに譲り合つた。籤くじを引かなければならなかった。籤くじにすることを考えついたクリストフは、悪い知恵を出して、われながら意外だったほど巧妙に、その室が自分の手に落ちないようにしてしまつた。

このときから、二人にとつてまったく幸福な時期が始まつた。その幸福は、ある一定の事柄のうちにあるのではなくて、すべての事柄のうちに同時に存在していた。二人のあらゆる行為と思想とを浸し、一瞬も二人から離れなかった。

二人の友情の新婚期とも言うべき時期の間、

世界の中に一つの魂を自分のものと呼び得る人……

のみが知っている、無言の深い喜悦に満ちた最初の時期の間、二人はほとんど口をきかなかつた。ほとんど口をきき得なかつた。たがいにそばに居ることを感じたり、長い沈黙のあとに二人の考えが同じ方向をたどつてることを示すような、一つの眼つきや言葉を交えたりするだけで、彼らには十分だつた。たがいに何一つ尋ねかけもせず、たがいに顔を見合わすこともしないで、二人はたえずたがいに見守つていた。愛する者は知らず知らずに、愛の相手の魂に則るもの^{のつと}である。相手の氣持を害せず相手の全部でありたいという、ごく強い欲望をもつてるので、不思議な急速な直覺力によつて、相手の奥底のきわめてかすかな動きをも、すべて読みとつてしまう。おたがいに透き通つて見える。彼らはたがいにその存在を取り換え合う。顔だちはたがいに真似し合い、魂はたがいに真似し合う——奥深い力が、種属という悪魔が、突然躍り出^{おと}してきて、自分を縛^{いまし}めている愛情の外皮を引き裂いてしまう、その日までは。

クリストフは小声で話し、静かに歩き、沈黙がちなオリヴィエの室の隣室で、音をたてまいと用心していた。彼は友情のために様子が変わつていた。かつて見られなかつたほど

の、幸福と信頼と若さとの表情をしていた。彼はオリヴィエを敬愛していた。オリヴィエは、それを身に余る幸福だとして恥ずかしく思わなかったら、自分の力を濫用して勝手な真似をするのは容易だったろう。が彼はクリストフよりずっと劣つてると自分を見なしていた。クリストフも同様にみずから卑下していた。そしてこの相互の謙譲は、彼らの大きな愛情から来たものであつて、さらに一つの楽しみだった。友の心のうちに多大の場所を占めてると感ずることは——それが身に余ることだと意識してもなお——非常にうれしいことだった。そして二人はたがいに、しみじみとした感謝の念を覚えていた。

オリヴィエは自分の書物をクリストフのといつしよにしておいた。もうその間の区別をたてなかつた。ある本のことを話すときには、「僕の本」と言わないで、「僕たちの本」と言つた。そして彼が共同の財産中に交えないで別にしておいた品物は、ごくわずかな数しかなかった。それは皆、姉の所持品だったものか、あるいは姉の思い出を帯びてるものだった。クリストフは愛情から来る敏感さで、間もなくそれに気がついた。しかしその理由は知らなかつた。彼はかつてオリヴィエにその両親のことなどを尋ねなかつた。もう両親がないことだけを知っていた。そして、愛情の上での多少高ぶつた控え目から、友の秘密を探り出すことを避けたうえに、過去の悲しみを友の心に呼び覚さますことを恐れる懸念

もあつた。友の身の上を非常に知りたくはあつたけれど、ある妙な氣遅れから、オリヴィエのテーブルの上にある写真を目近く見調べることさえ、なし得ないでいた。写真に現われてるのは、威儀を正した紳士と貴婦人と、それから、足元にスパニエル種の大きな犬を置いた十二、三歳の少女とであつた。

いっしよに住んでから二、三か月後に、オリヴィエは悪寒おかんを覚えた。床にたかなければならなかつた。クリストフは慈母めいた心持を起こして、氣づかわしい情愛で看護をした。医者いしやはオリヴィエを聴診して、肺はい尖せんに少し炎症を発見し、患者の背中にヨードチンキの塗布をクリストフへ頼んだ。クリストフはその役目を真面目まじめくさつてやつてのけたが、そのとき、オリヴィエの首に聖牌せいはいがかかつてるのを見出した。彼は今ではもうオリヴィエを十分理解していて、オリヴィエが彼よりもいっそう宗教心から離脱してることを、よく知つていた。それで聖牌を見出した驚きを隠しきれなかつた。オリヴィエは顔を赤めた。そして言つた。

「これは記念の品なんだ。憐あわれなアントアネットが、死ぬときにつけてたものだよ。」
クリストフははつとした。アントアネットという名前は彼にとって電光に等しかつた。
「アントアネットだつて？」と彼は言つた。

「僕の姉だよ。」とオリヴィエは言った。

クリストフは繰り返した。

「アントアネット……アントアネット・ジャンナン……それが君の姉ねえさんなのか？……だが、」

彼はテーブルの上の写真をながめながら言った、「子供のときに亡くなったんじゃないのか？」

オリヴィエは悲しげに微笑ほほえんだ。

「それは子供のときの写真だよ。」と彼は言った。「ほかに写真がないものだから……。亡くなったのは二十五のときだった。」

「ええ！」とクリストフは感動して言った。「そしてドイツにいたことがあるんだろう？」

オリヴィエはそうだと頭でうなずいた。

クリストフはオリヴィエの両手をとった。

「僕は君の姉さんを知ってたんだ！」と彼は言った。

「僕もそのことは知ってる。」とオリヴィエは言った。

彼はクリストフの首に飛びついた。

「かわいそうに、かわいそうに！」とクリストフは繰り返した。

彼らは二人とも涙を流した。

クリストフはオリヴィエが病気であることを思い出した。その心を落ち着かせようと、無理に腕を蒲団ふとんの中に入れさせ、肩の上に毛布をかけてやり、そしてやさしく眼をふいてやり、その枕頭ちんとうにすわった。それからじつと顔をながめた。

「だから、」と彼は言った、「僕は君を知ってたのだ。初めて会った晩から君に見覚えがあつた。」

（彼が話しかけてるのは、そこにいる友へかあるいはもう世にない彼女へか、どちらともわからなかつた。）

「だが君は、」と彼はやがてつぶけた、「それを知ってたんじゃないか。……なぜそう言わなかつたんだい？」

オリヴィエの眼をかりてアントアネットが答えた。

「私には言えませんでした。あなたのほうで察してくださいなさるはずでした。」

二人はしばらく黙っていた。それから夜の静けさのなかで、オリヴィエはじつと床に横たわりながら低い声で、手をとつてくれるクリストフへ、アントアネットの話をした。

しかし、言つてならないこと、彼女が包み隠していた秘密——彼が告げるまでもなくクリストフはたぶんそれを知つていたろうが——それだけは、口に出さなかつた。

それ以来、アントアネットの魂が二人を包み込んでしまった。二人いつしよにいるときには、彼女もともにいた。二人は彼女のことを考える必要がなかつた。二人いつしよに考えることはみな、彼女のなかで考えていた。彼女の恋は、二人の心が一つに結ばれ合う場所であつた。

オリヴィエはしばしば彼女の面影を描き出した。切れ切れの思い出や短い逸話などを思い起こした。すると、彼女の内気らしいしやかな身振りや、落ち着いた若々しい微笑や、衰えた身体つきの物思わしげな優雅さなどが、ぱっと明るくなって現われた。クリストフのほうは、耳を傾け口をつぐんで、眼に見えないなつかしい彼女の映光に浸つた。だれよりもよく生命の気をむさぼり飲む天性に従つて、彼は時とするとオリヴィエの言葉のうちに、オリヴィエにも聞こえない深い共鳴音を聞きとつた。そして彼はオリヴィエ自身よりもなおよく、亡き若人の存在を自分に同化していた。

本能的に彼は、オリヴィエのそばで彼女の代わりを務めた。無器用なドイツ人たる彼が、

アントアネットと同じ微細な注意や世話を、みずから知らずにやってのけることは、見るも心ひかるる光景だった。彼はときどき、アントアネットのうちにオリヴィエを愛しているのか、オリヴィエのうちにアントアネットを愛しているのか、もはや自分でもわからないことがあった。愛情の発作に駆られては、黙ってアントアネットの墓参りに出かけた。そして花をもつていった。オリヴィエはそれに長く気づかなかった。ある日墓の上にごく新しい花を見出して、ようやくそれと知った。しかしクリストフが来たのだという証拠を得るには、容易なことではなかった。おずおず言い出してみると、クリストフは不機嫌きげんな乱暴さで話をそらした。彼はオリヴィエに知られなくなかった。そして執拗しつように隠しぬいた。がある日ついに、イヴリーの墓地で二人出会ってしまった。

オリヴィエのほうではまた、クリストフに内密で彼の母へ手紙を書いていた。ルイザへ息子の消息を伝えてやった。自分がいかほど彼を愛し敬服しているかを、書き贈った。ルイザもオリヴィエへ、下手へたなつましい返事を書いて、感謝の念にくれていた。彼女はまたやはり息子むすこのことを小さな子供のように語っていた。

愛に満ちた半ば沈黙の時期——「なぜともなく歓よろこばしい楽しい静安」——のあとに、二

人の舌はほどけてきた。友の魂の中に発見の航海をすることで幾時間も過ぎた。

二人はたがいにならずいぶん異なつてはいたが、どちらも純粹な地金ででき上がつていた。そして同じものでありながらも異なつてゐるゆえに、なお愛し合つた。

オリヴィエは弱々しくて、困難と戦うことができなかつた。一つの障害にぶつかると、すぐに辟易へきえきした。それも恐ろしいからではなくて、多少は臆おくびよう病びょうなからであり、多くは、征服のために取らなければならぬ荒々しい粗暴な方法を忌みきらうからであつた。彼の生活の方便は、出稽でげいこ古こをしたり、例によつて恥ちずかしいほどの報酬で、芸術の著書をしたり、またまれには雑誌の原稿を書いたりすることだつた。その原稿もけつして自由なものではなく、ごく興味の薄い題目に関するものだつた。——彼が興味をもつてゐる事柄は喜ばれなかつた。彼のもつとも得意なものはかつて求められなかつた。詩人であるのに評論を求められた、音楽に通じてるのに絵画論を喜ばれた。そんなことについてはくだらないことときり言えないのは、自分でもよくわかつていた。しかしそれがちょうど人に好かれる事柄だつた。かくて彼はわかりやすい言葉で凡俗を相手に書いた。ついにはみずから厭いや気がさして執筆を断やつた。彼が喜んで働やき得るのは、原稿料を出さない小雑誌にばかりだつた。そこではまつたく自由だつたので、他の多くの青年らと同様に、彼も懸命になつ

ていた。ただそこでだけ彼は、世に出す価値があるとみずから思えるものをすべて発表することができた。

彼は外観上温和で丁寧で忍耐強かったが、過敏な感受性をそなえていた。少し鋭い言葉を聞くと、血が湧き返るほど気にさわった。不正に出会うと心が転倒した。それを自分のためにまた他人のために苦しんだ。数世紀前に行なわれた卑劣な行為を見てもなお、自分がその被害者であるかのように口惜しがった。その被害をこうむった者はいかにつらかつたろうかと考え、いかに多くの年月がその男と自分の同情とを隔ててるかを考えては、蒼くなり身を震わし悲しがった。そういう不正の一つを目撃するときには、過度の憤怒に駆られて、身体じゆうをうち震わし、時には病的になって眠れなかった。彼はそういう自分の弱さを知っていたから、いつも無理に落ち着こうとつとめた。というのは、腹をたてると見境がなくなつて、人から許されそうもないことを口走るようになることを、みずから知つてたからである。そして彼は、いつも乱暴なクリストフよりなおいっそう、人から恨まれた。彼が腹をたてたさいには、クリストフよりもさらによく、自分の心底を見せつけるように見えたからである。そして実際そのとおりだった。彼はクリストフのように盲目的な誇張なしに、錯誤なしに明快に、他人を批判していた。それこそ人のもっとも許しか

ねることだった。で彼は口をつぐみ、議論の無益さを知ってそれを避けた。彼はそういう抑制を長く苦しんできた。そして自分の臆病おくびょう病びょうさを、さらに多く苦しんできた。臆病のあまりに時とすると、自分の考えを裏切ることがあり、あるいは自分の考えを最後まで弁護し得ないことがあり、なおその上に、クリストフのことについてリュシアン・レヴィー・クールと議論したときのように、詫わびを言うはめになることさえあった。世間に見切りをつけ自分自身に見切りをつけるまでには、幾度も絶望の危機を通り越してきた。神経の支配をいつそう受ける青春時代には、激昂げつこうの時期と銷沈しょうちんの時期とが、急激な勢いで交互にいつも襲つてきた。もつとも幸福な気持のときにも、苦悩に待ち伏せられること
 がはつきりわかつていた。そして実際、苦悩がやってくるのを見ないでも、不意にそのために圧倒せられた。すると不幸だというばかりでは済まなかった。自分の不幸をみずから責め、自分の言葉や行為や正直さなどを批判し、他人をよしとし自分を不正とせざるを得なかつた。心臓が胸の中でどきどきし、痛ましいほどもがき苦しみ、息がつけなかつた。

——アントアネットが死んでからは、おそらくその死のおかげで、病人の眼や魂をさわやかにする曙あけぼのの光に似た、なつかしい故人から射さす和なごやかな光明のおかげで、オリヴィエは、それらの悩みから脱することはできなかつたとしても、少なくともそれをあきらめそれを

押えることができるようになった。彼のそういう内心の鬨たたかいに気づく者はあまりなかった。彼はその恥ずかしい秘密を、虚弱な不均衡な身体の狂的な懊お惱のうを、自分のうちに秘めていた。その懊惱を統御することはできないが、しかしそれから害せられはしないで、ただじつと見守っていた、自由な朗らかな知力が——「際限なく擾じょうらん乱する心に残存する中心の平穩」が。

クリストフが心ひかれたのはその平穩だった。彼がオリヴィエの眼の中に認めたのはそれだった。オリヴィエは人の魂を見てとる直覺力をそなえていた。すべてのものに開かれ、何物も否定せず、何物も憎まず、寛大な同情で世界を觀照する、広い精緻せいちな精神的好奇心をそなえていた。貴重な天稟てんびんであつて、常に新しい心で永遠の新味を味わわせる、清新な眼をそなえていた。自由で広大で崇高な心地がするその内的世界のうちにあると、彼は自分の弱さや肉体の苦惱を忘れはてた。今にも消滅せんとしてる惱ましい身体を、一種皮肉な憐あわれみをもつて遠くからながめるのは、多少の楽しみでさえあつた。かくして、自分の生に執着するの恐れがなく、一般の生にますます熱く執着していた。彼は自分の力を行為のうちに用いないで、愛と知能とのうちに注いでいた。彼は自分の実質で生きるだけの養液をもつていなかった。彼は葛かすちであつて他物にすがらなければならなかった。自分を投

げ出してるときがもつとも充実していた。常に愛し愛されたがってる女性的な魂だった。彼はクリストフのために生まれた者であった。大芸術家の伴はんにりよ侶であつて、その力強い魂から咲き出したように見える、貴族的ないじらしい友とも言えるのだつた。レオナルドにおけるベルトラファイオ、ミケランジェロにおけるカヴァリエレ、若いラファエロがもつていたウンブリアの友だち、困窮な老年のレンブランドにながく忠実だつたアールト・デ・ヘルデル、それにも等しかつた。彼らはその師ほどの偉大さをもつてはいないが、師のうちにある崇高純潔なものはみな、いっそう精神化されて彼らのうちにあるがように見える。彼らは実に天才の理想的な道づれである。

二人の友情は二人のためによかつた。友があれば生き甲斐がいが出てくる。友のために生きるようになり、時の磨滅まめつ力にたいして自分の保全をつとめるようになる。

二人はたがいに充実し合つていた。オリヴィエは清朗な精神と病弱な身体とをもつていた。クリストフは強力と落ち着きのない魂とをもつていた。二人は盲者と中風患者とであつた。そして今二人いっしょにいると豊饒ほうじょうな気がした。クリストフの影に身を置いて、オリヴィエは光にたいする趣味を見出した。クリストフは、悲しみの中や不正や憎悪の中

にあつてさえ樂天的になりがちな、あふれるほどの活力と心身の頑健がんけんさとを、多少オリヴィエのうちに注ぎ込んだ。そしてさらに多くのものをオリヴィエから取り出した。それが天才の法則である。天才はいかに多く与えても、それよりさらに多くのものを常に愛のうちから奪い取る。なぜなら、われは獅子ししなればなりだからであり、天才だからである。天才ということは半ばは、自分の周囲の偉大なものを吸い取りそれをさらに偉大になす、ということにある。富は富者に集まると下世話げせわに言われている。力は強者に集まるものである。クリストフはオリヴィエの思想で自分を養つた。その落ち着いた知力、超然たる精神、暗黙のうちに理解し見きわめる遠大な見解、などを吸収した。しかし友のそういう長所は、彼のうちに、豊饒な土地に、移植されると、まったく異なつた力で生長していった。二人はたがいにも相手のうちに見出されるものに驚嘆していた。彼らはおのおの、これまでも自分でも気づかなかつた巨大な財宝をもち寄つた。それはたがいの民衆の精神的な宝だつた。オリヴィエのほうは、フランスの広範な教養と心理的才能とであつた。クリストフのほうは、ドイツの内的音楽と自然にたいする直覚力とであつた。

クリストフには、オリヴィエがフランス人であることを理解できなかつた。オリヴィエは彼が見たどのフランス人にもあまり似寄つていなかつた。彼はオリヴィエに会う前には、

リュシアン・レヴィー・クールをフランス近代精神の典型だと見なしがちだった。が実は、レヴィー・クールはその漫画にすぎないのだった。そして今、レヴィー・クールよりもいっそう思想的に自由であり、しかもなお純潔であり堅忍である者らが、パリーにもいるということを、彼はオリヴィエの実例によって教えられた。けれど、オリヴィエやその姉はどうもまったくのフランス人ではないと、彼はオリヴィエに証拠だててやりたかった。

「お気の毒だが、」とオリヴィエは言った、「君はフランスについて何を知ってるんだい？」

クリストフは抗弁して、フランスを知るためにいかに骨折ったかを述べた。ストウヴァン家やルーサン家などの集まりで出会ったフランス人を列挙した。ユダヤ、ベルギー、リクサンブル、アメリカ、ロシア、近東、などの生まれのフランス人や、また間々には、きつすい生粋のフランス人などだった。

「その生粋のフランス人のことを僕は言ってるんだ。」とオリヴィエは言い返した。「君はまだその一人も見えてはいない。遊蕩ゆうとう社会、快樂の獣ども、フランス人でもない奴ら、道楽者や政治家ややくざ者、国民に触れはしなくてその上を飛び過ぐる騒々しい連中ばかりだ。秋の日和ひよりと豊かな果樹園とに寄ってくる蠅はえの群れしか君は見えていない。勤勉な蜜みつば

蜂ちの巣、働きの都、研鑽けんざんの熱、それを君は眼に留めたことがないんだ。」

「いや、」とクリストフは言った、「選りぬきの知識階級も見たんだよ。」

「なんだって、二、三十人の文学者どものことなんだろう？ 結構なことさ！ 科学と実行とが大なる地位を占めた現今では、文学は民衆思想のもつとも浅薄な一層となつてしまつてゐる。しかもその文学においても、君は芝居をしか、贅ぜいたく沢な芝居をしか、ほとんど見てはいない。それは万国の旅館の富裕な客のためにできてゐる国際料理にすぎないのだ。なにパリーの芝居だつて？ 芝居でおよそどんなことが行なわれてゐるかを勉強家が知つてゐるとでも、君は思つてゐるのか。パストゥールは生しょう涯がいに十遍とは芝居へ行かなかつたんだ。君はたいいていの外国人と同様に、僕の国の小説を、大通りの芝居を、政治家らの策略を、馬鹿げて重大に考へてゐる……。がもし君が望むなら、いつでも僕は君に見せてあげよう、けつして小説を読まない婦人を、かつて芝居へ行つたことのないパリーの若い娘を、かつて政治に関係したことのない男子を——そしてそれが、知識階級のうちにあるのだ。君はまだ、僕の国の学者をも詩人をも見たことがないのだ。黙然として努力してゐる孤独な芸術家をも、革命家の燃えたつた熱をも、見たことがないのだ。一人の偉大な信仰家をも、一人の偉大な無信仰家をも、見たことがないのだ。また民衆のことについては、云々うんぬんす

るのをよしたがいい。君を世話してくれたあの憐れな女あわ以外に、君は民衆について何を知
 ってるのか？　どこで民衆を見たと言うのか。三階四階の上に住んでるパリー人を、君は
 幾人知ってるのか。そういう人々を知らなければ、フランスを知らないと同じだ。君は知
 るまいが、憐れな住居の中で、パリーの屋根裏で、黙々たる田舎いなかで、善良な誠実な心の人
 々が、その平凡な一生の間、りっぱな思想を胸にいだき、日々の克己こっきをつとめてる——そ
 れこそ、フランスに常に存在していた小さな教会——数の上では小さいが魂から言えば偉
 大な教会であつて、ほとんど世にも知られず表面に現われる働きもしないけれど、しかも
 フランスのすべての力なのだ。優秀者と自称してゐる者どもがたえず腐敗し更新してゆくに
 引き換え、その力のみは黙々として永続してゐるのだ……。幸福ならんがために、いかにも
 して幸福ならんがために、生きてゐるのではなくて、自分の信念を果たさんがために、もし
 くは信念に奉仕せんがために生きてゐる、一人のフランス人を見出したら、君は定めて驚く
 だろう。ところが実際、僕のような、そしてもつと価値があり、もつと敬虔けいけんであり、も
 つと謙譲である、たくさんの人々がいて、一つの理想に、応こたえもしない神に、死ぬるまで
 撓たわむことなく奉仕してゐるのだ。儉約けんやくで几帳面きちょうめんで勤勉で平静で、心の底には炎が眠つてゐる、
 細民階級——貴族の利己心に対抗しておのが「国土」を守護した犠牲的な民衆、眼玉の青

い老ヴオーヴァン、それを君は知らないのだ。君は民衆を知らず、真の優秀者を知らないのだ。われわれの忠実な友となりわれわれを支持する伴はんりよ侶となる書物を、君は一冊でも読んだことがあるのか。献身と信念とが豊かに注ぎ込まれてるわれわれの若い諸雑誌を、君はその存在だけでも知ってるのか。われわれの太陽となつて、その無言の光は偽善者どもの軍勢を恐れさしてる、精神的偉人らを、君は少しでも知ってるのか。偽善者どもは正面から戦うことをなし得ないで、彼らの前に出ると、よりよく欺かんがために腰をかかめている。偽善者こそ奴隷であり、奴隷こそ主人である。君は奴隷だけを知っていて、主人を知らない……。君はわれわれの戦いを見ても、その意味を理解しないために、無茶な混乱だと思つてしまつたのだ。君は影と光の反映とだけを見て、内部の光を、古来引きつづいてるわれわれの魂を、見てとつていないのだ。君はかつてわれわれの魂を知ろうとつとめたことがあるのか。十字軍から革命政府コンミューンにいたるまでのフランス人の勇敢な行為べつげを瞥見けんしたことがあるのか。フランス精神の悲劇を洞見どうけんしたことがあるのか。パスカルの深淵しんえんをのぞき込んだことがあるか。十世紀以上の間活動し創造しつづけてきた民衆、ゴチック芸術や十七世紀文化や革命によつて世界を風靡ふうびした民衆、それをどうして誹謗ひぼうし得られよう！ 幾度も熱火の試練を受け、鍛えに鍛えられ、かつて死滅せず、そのたびごと

によみがえつた民衆だ……。——君たちは皆そうなんだ。フランスに来る君の国の人たち
 が見るものは、われわれをかじつて寄生虫、文学政治財政の投機師、およびその用達
 人や顧客や情婦などばかりだ。そしては、フランスを蚕食してそれらの下賤な奴
 らによつて、フランスを批判している。迫害されてる眞のフランス、フランスの田舎にた
 くわえられてる活力、一時の主長者どもの喧騒には無関係で、ひたすら働いてる民衆、
 それに思いをはする者は君たちのうちに一人もない……。そうだ、君たちがそれを知らな
 いのは当然すぎることだ。僕は君たちをとがめはしない。君たちにどうしてそれが知られ
 よう？ フランス人でさえフランスをよく知つてはいない。われわれのうちの優良な人々
 は、自分の国土において封鎖されとられてるのだ……。われわれがいかにかに苦しんだかは、
 だれもついに知り得ないだろう。われわれは民族的才能に執着して、それから受けた光明
 を、神聖な委託物として自分のうちに納め、それを消そうと努める害悪な息吹きに反抗し
 て、必死に守つているのだ——異人種どもの腐爛した雰囲気を感じながら、常に孤
 独であつて、彼らから蠅の群れのように思想によりたかられ、その忌まわしい蛆虫から
 理性をかじられ心を汚されているのだ——われわれを保護すべき役目をもつてる人々から、
 指導者たる立場の人々から、下劣卑屈な批評家たちから、われわれはいつも裏切られてお

り、彼らはわれわれと同人種であることを許されんために、敵に諛へつらつてばかりいるのだ――民衆からわれわれは見捨てられていて、民衆はわれわれのことを気にも留めず、われわれのことを知りさえもしないのだ……。民衆から知られるいかなる方法をわれわれはもつていよう？ われわれは民衆まで達することができないのだ……。ああ、これがもつともつらいことなんだ！ われわれと同じ考えをもつてる者がフランスには無数にいることもわかつているし、われわれは彼らの代弁をしてるのだということもわかつているけれども、しかもわれわれは自分の言を人に聞かせることができないのだ！ 新聞も雑誌も芝居も皆ことごとく敵の手中にある……。印刷機関はすべて思想物を避け、快楽の道具か党派の武器としてしか思想を認めない。いかなる団体も倶楽部クラブも、われわれが墮落しなければ通してはくれない。困窮と極度の勉勵とのためにわれわれは圧倒されてるのだ。政治家らは富むことばかりを考えていて、買収し得る無産階級にしか興味を寄せない。有産階級の者らは冷淡で利己主義であつて、われわれが死ぬるのを傍観している。わが民衆はわれわれのことを知っていない。われわれと同じく戦いわれわれと同じく沈黙に包まれてる人々でさえ、われわれの存在を知らないでいるし、われわれもまた彼らの存在を知らない……。災いなるパリーパリなるかなだ！ もちろんパリーは、フランス思想のあらゆる力を集合しながら

ら役にもたつた。しかしパリがなした悪は少なくともその善に匹敵し得る。そして現在の
 のような時代にあつては、善でさえも悪に変化してゆく。似而非優秀者らが、一度パリ
 を奪つて言論のらつぱの口をふさいただけで、フランスの残りの声もみな抑圧されてしま
 う。のみならず、フランス自身もそのために身を誤っている。フランスは恐れて口をつぐ
 み、自分のうちにその思想を恐る恐る引つ込めてしまつて……。僕は昔それらのこと
 をひどく苦しんだ。しかしクリストフ、僕はもう今では落ち着いている。僕は自分の力を
 悟り、わが民衆の力を悟つた。洪水が通り過ぎるのを待ちさえすればよい。洪水もフラン
 スの美しい花崗岩を浸食しはしないだろう。流されてきた泥をかきわけて、僕は君に
 その花崗岩をさわらしてあげよう。そしてもうすでにここかしこに、その高い岩の頭がの
 ぞき出している……。」

クリストフは、彼と同時代のフランスの詩人や音楽家や学者などを活氣だたせてる、理
 想主義の巨大な力を見出した。一時的大家らが、露骨な肉感主義の騒々しさで、フランス
 思想の声を押つかぶせてる一方に、あまりに貴族的なフランス思想は、そういう下賤な徒
 輩の傲岸な叫び声と暴力的な戦いをなすのを好まないで、ただその熱烈な専心的な歌を、

自分のためと自分の神のためとに歌いつづけていた。そして外界の厭な喧騒を避けたが
つて、もつとも奥深い隠れ場所の中に、自分の城楼の中心に、引っ込んでるかの観さえあ
った。

詩人たち——この美しい名称は、新聞雑誌やもろもろの学芸院などによつて、虚名と金
銭とに飢えた饒舌家どもにやたらに与えられているが、それに真に価する唯一の人た
ち——その詩人たちは、事物の外皮を切り裂くことができずにただかじつてばかりいる、
破廉恥な修辞法と賤しい写実主義とを軽蔑して、魂の中心に立てこもり、形態と思想と
の世界が、あたかも湖水に落ちる急湍のように吸い込まれて、内的生活の色に染めら
れる、神秘的な幻像のうちに立てこもつていた。世界を改造せんために自己のうちに閉じこ
もるそういう理想主義は、あまりに固執的だったので、一般の者には近づきにくかった。
クリストフでさえ初めはそれを理解しなかった。「広場の市」のあとで、あまりにその接
触が唐突だった。猛烈な争闘と生々しい光とから出て、沈黙と暗夜との中にはいった
ようなものだった。耳が鳴り響いていた。もう何にも見えなかった。彼は生を熱愛してい
たので、初めのうちはその対照が不快だった。フランスをくつがえし人類をゆるがす熱情
の急流が、外部には怒号していた。そしてちよつと見たただけでは、芸術の中にはそういう

ものが少しも現われていなかった。クリストフはオリヴィエに尋ねた。

「君の国の人たちは、ドレフユース事件によって、星の世界までもち上げられ、また深淵しんえんの中に投げ込まれたじゃないか。そういう暴風が心中を吹き過ぎたような詩人は、どこにいるのか。目下宗教的な人々の魂の中には、教会の権力と良心の権利との間に、数世紀来のもっとも激しい戦いが行なわれてるじゃないか。その神聖な苦悩が心中に反映して、幾多の国民は復活し、アルメニア人は虐殺され、アジアは千年の眠りから覚めて、ヨーロッパの鍵けんやく鑰やくたる巨大なるロシアを倒し、トルコはアダムのように白日の光に眼を開き、空中は人間から征服され、古い大地はわれわれの足下に割れて口を開き、一民衆をことごとく呑噬どんぜいしている……。それらの異変はすべて二十年間のうちに行なわれ、幾多のイーリアスをこしらえ出すだけの材料がある。ところがそのイーリアスはどこにあるのか、君の国の詩人らの書物の中にイーリアスのごとき熱火の跡がどこにあるのか。詩人らにだけは世界の詩が見えないのか。」

「まあ急せくなよ、君、急せくなよ！」とオリヴィエは彼に答えた。「黙って、口をきかないで、耳を傾けてみたまえ……。」

しだいに、世界の心棒のきしる音が消え、舗石の上に響く実行の重い車のとどろきが、遠くに消え去っていった。そして、静寂の崇高な歌が起こってきた。

蜜蜂の羽音、菩提樹の香り……。

黄金の唇もて野面を掠むる

風……。

薔薇の香こめしやさしき雨音。

詩人らの槌の音が聞こえてきた。それは花瓶の側面に種々のものを彫りつけていた。

いとも素朴なるもの的高き品位。

または、

黄金の笛と黒檀の笛とを持てる

真面目まじめな快活な生活。または、

如何いかなる影をも明るしとなす……

という魂たちから湧わき出る信仰の泉、敬けいけん虔けんな喜び。または、

世の常ならぬ光を放てる

気高き顔もて……

人をなだめ微笑ほほえみかける、よき悲しみ。または、

やさしき眼をば見開ける静けき死。

それは清浄な声々の交響シンフォニー曲であった。コルネイユやユーゴーなどのような民衆的らつ

ばほどの響きをもつてゐる声は一つもなかった。しかしその演奏はそれよりもいかに探さと色合いとに富んでいたことだろう！ それこそ現在のヨーロッパじゆうでのもつとも豊かな音楽だった。

オリヴィエは黙然としてゐるクリストフに言った。

「もうわかつたらうね？」

こんどはクリストフのほうから黙つていてくれとの様子をした。彼はもつと男々おおしい音楽のほうを好んではいたけれども、聞こえてくるその魂の森と泉とのささやきに恍惚こうこつとなつていた。その森と泉とは、諸民衆の一時的な争闘の間で、世界の永遠の若さを、

美の温良さ

を歌つていた。そして人類が、

憎おびえ吠ほえつつ悲しげに訴えつつ

不毛の暗き畑中を回りに回る

その一方に、また、幾百万の人々が、血にまみれた自由の破片を、懸命に争って奪い合っている、その一方に、泉と森とはくり返し歌っていた。

「自由よ！……自由よ！……聖なるかな、聖なるかな……。」

けれどもそれらは、利己的な平安の夢に眠っているのではなかった。詩人らの心の中には、悲壮な声が欠けてはいなかった。自負の声、愛の声、苦悶くもんの声、などが交じっていた。

それは

猛たけき力か深き柔和かを持てる

酔い狂ひょうふうう 風ふうであった。騒然たる武力であった。群集の熱を歌う人々の幻惑せる叙

事詩であった。未来の都市を鍛え出す、

大なる火炉おおいと巨なる鉄かなしき敷との周囲
闇やみもや霧の中に浮かべる漆しつこく黒に光る顔、
つと伸び縮みする筋肉にくま逞しき背……

などの人間神ら、息を切らしてゐる労働者ら、彼らの間における争闘であつた。

それは、「知性の氷塊」の上に落ちかかる黒光りの明るみの中における、絶望的な狂喜をもつてみずからおのれをさいなんでる、孤独な魂たちの悲壮な苦悶であつた。

そういう理想主義者らの多くの特質は、一ドイツ人にとっては、フランス的というよりもいつそうドイツ的であるように思われた。しかしながら、だれも皆「フランスの微妙な説話」を愛してゐたし、ギリシャ神話の養液が彼らの詩のうちに流れてゐた。フランスの風景と日常の生活とは、ある人知れぬ魔力によつて、彼らの瞳ひとみの中ではアツチカの幻影となつてゐた。あたかもそれら二十世紀のフランス人らのうちに、古代の魂が残存してゐるかのようであり、その魂は美しい裸体にふたたびもどるため、近代の破れ衣を脱ぎ捨てたが、つてゐるかのようだつた。

かかる詩の全体からは、ヨーロッパ以外ではどこにも見出し得られない、数世紀間に成熟した豊富な文明の香りかおが発散していた。一度嗅かげばもはや忘れることのできない香りだった。世界各国の芸術家らがそれにひきつけられていた。そして彼らはフランスの詩人に、徹頭徹尾フランスの詩人になっていた。それらのアングロ・サクソン人、フラマン人、ギリシャ人などこそ、フランスの古典芸術が有するもつとも熱烈な徒弟であった。

クリストフはオリヴィエに案内されて、フランス詩神の沈思的な美をしみじみと感じさせられた。それでも心の底では、彼の趣味にとつてはやや理知的すぎるその貴族的な人柄よりも、単純で健全で頑がん丈じょうで、それほど理屈りくつほくなくてただ愛してくれる、美しい平民の娘のほうが、やはり好ましいのだった。

同様な美の香りは、熟した苺いちじの香りが日に暖まった秋の森から立ちのぼるように、フランスのあらゆる芸術から立ちのぼっていた。草の中に隠れてるそれらの小さな苺いちじの木のひとつとしては、音楽があった。クリストフは自国において、まったく別な茂り方をしてる音楽の草むらに、いつも慣れていたので、最初はこの苺いちじの木に気づかずに通り過ぎた。しかし今や彼は、その美妙的な香りに振り向かせられた。音楽の名を僭せんしていばりる茨いばらや枯れ葉の中に、

少数の音楽家らの素朴なしかも精練された芸術を、彼はオリヴィエに助けられて見出した。民主主義の野菜畑や工場の煙の間に、サン・ドニーの野の中央に、神聖な小さな森の中に、あたりはばかりぬ牧神たちが踊っていた。クリストフは驚いて、その諷刺的ふうしな朗らかな笛の歌に耳傾けた。彼がこれまで聞いた歌とは似てもつかぬものだった。

細い小川で事足りぬ、

高い草、広い牧場、

またはやさしい柳の並木、

同じく歌う川の流れ、

それらを戦そよがせんために。

蘆あしの小笛で事足りぬ、

森をも歌わせんために……。

それらのピアノの小曲や小唄こうたに、フランスの室内音楽に、ドイツの芸術は一瞥べっも注つごうとしなかったし、クリストフ自身もその詩的妙技をこれまで閑却していたのであるが、そ

の懶惰らんたな優美さと表面の享樂主義との下に、クリストフはフランスの音楽家らが自己の芸術の未墾地の中に、未來を豊富ならしむるべき萌芽ほうがを捜し求めてる、革新の熱と焦慮とを、見出し始めたのだった。それはラインの彼方かなたには見られないことだった。ドイツの音楽家が父祖の陣營にうづくまり、過去の勝利を墻しよう壁へきとして世界の進化をとどめんとする間に、世界は常に進みつづけていた。フランス人らは先頭に立って発見の道に突進していた。彼らは芸術の遠い領土を、消滅した太陽や輝き出した太陽を、探究していた。幾世紀もの長い眠りの後に、広大な夢に満ちてる大きなつぶらな眼を、ふたたび光明に向かつて見開いてる極東や、または消え失うせてるギリシヤなどを、探究していた。古典的な秩序と理性との才能によつて開通されてる西欧の音楽のうちに、古い流行の水門を引き開けていた。そして、通俗的な旋メロデー律リズムや律動、異国的な古い音階、あるいは新しいあるいは改新された種々の音程など、世界のあらゆる水を、ヴェルサイユの池に引き入れていた。それより以前に印象派の画家たち——光におけるクリストファー・コロンブスら——が新しい世界を人の眼に開いてやったのと同じように、今やこの音楽家たちは、音の世界を征服しようとしていた。聴覚の神秘的な深みはかなり奥まではいり込んでいた。その内海の中に新しい陸地を発見していた。だがなかなか彼らは、それらの征服を何かの役にたて得そ

うにもなかつた。彼らは例によつて世界の給養者にすぎなかつた。

クリストフはこのフランス音楽の進取の氣に感嘆した。昨日再生したばかりなのに、今日はすでに芸術の前衛として進んでいた。その華美な細そりした身体のうちにいかに大なる勇氣があつたことだろう！ クリストフはその音楽のうちに先ごろ見てとつていた愚昧ぐまいさにたいしても、寛大とならざるを得なかつた。けつして誤ることのないのは何事もなさない者ばかりである。生きてる真理のほうへ邁まい進する誤ご謬びゅうは、死んだ真理よりもいっそう豊饒ほうじょうである。

その結果はいかがであらうとも、実に驚くべき努力であつた。最近三十五年間になされた仕事を、一八七〇年以前のむなし眠りからフランス音楽を脱せしめんために費やされた精力の量を、オリヴィエはクリストフに示してやった。音楽の学校も、深い教養も、伝統も、大家も、聴衆も、何もなかつたのだ。ただベルリオーズ一人のみだったがそれさえ呼吸困難と倦怠けんたいとに死にかかつていたのだ。そして今やクリストフは、国民を向上させるために働いた人々にたいして、尊敬の念を感じた。彼らの審美眼の狭小なことやまたは天才の欠乏をさえも、後はもはやとがめようとは思わなかつた。彼らは一つの作品よりもさらに大きなものを、音楽的民衆を、創つくり出したのであつた。新しいフランス音楽を鍛え

上げた、それらの偉大なる労働者らのうちでも、ことにある一人の姿が彼にはなつかしかった。それはセザール・フランクの姿だった。育て上げた勝利を見ずに死んだフランクは、あたかも老シユルツのように、フランス芸術のもつとも暗澹^{あんたん}たる時代の中に、自分の信仰の宝と民族の天才とを、おのれのうちに完全に保有していたのである。困窮と軽蔑^{けいべつ}された労働との生活のうちに、忍耐強い魂の不変の清朗さを失わず、その諦め^{あきら}の微笑で温良に満ちた作品を照らしていた、この天使のごとき楽匠が、音楽の聖者が、享樂的なパリーのまん中にいたことは、心打たるる光景だった。

フランスの深い生活を知らないクリストフにとっては、無信仰な民衆のさなかにこの信仰ある大芸術家がいたことは、ほとんど奇跡に近い現象と思われた。

しかしオリヴィエは静かに肩をそびやかした。清教徒たりしフランソア・ミレーに匹敵するほど、聖書^{バイブル}の息吹き^{いぶ}に満たされていた画家が、また明快なパストゥールほど、熱烈な謙讓な信仰に貫かれていた学者が、ヨーロッパのいかなる国にいたかと反問した。——パストゥールこそは、無窮という觀念の前には平伏し、その思想を奪われるときには、彼自身で言つてるとおり、「將^{まさ}にパスカルの崇高な狂暴にとらわれんとしかかつて、理性に宥^ゆ

うじよ
恕を求めながら、痛切な苦悩に陥った」のだった。確実な歩行で、一足も他にそれずに、「第一歩の自然界、極微なるものの大なる暗夜、生命の生まれ出てくるもつとも深い生物の深淵、」その中を彷徨ほうこうして彼の、熱烈な理性にとつては、ミレーの雄々しい写実主義にとつてと同じく、カトリック教もはや邪魔物とはならなかった。そしてこのミレーやパストゥールは実に、田舎いなかの民衆の間から現われてきて、田舎の民衆の中から信仰を汲みとつたのだった。そういう信仰は常にフランスの土地に潜んでいて、煽動せんどう政治家らの弁舌によつてもけつして打ち消されないものだった。オリヴィエはその信仰をよく知っていた。彼は胸の中にそれをになつてるのであった。

二十五年前から行なわれてるカトリック教改新の盛大な運動、理性と自由と生命とを取り入れたためになされてる、フランスにおけるキリスト教的思想の熱烈な努力、それをオリヴィエはクリストフに示してやった。りっぱな牧師たちがいて、その一人が言ったように、「人間たるべき洗礼を受ける」だけの勇気をもつていて、すべてを理解しあらゆる誠実な思想をいだけだけの権利をカトリック教のために要求していた。なぜなら、「あらゆる誠実な思想は、たといそれが間違ふことはあつても、常に神聖で崇高である」からだった。また数千の若いカトリック教徒らがいて、善良な意志をもつてる者にはだれにでもう

ち開かれてる、自由な純粋な博愛なキリスト教の共和国をうち建てんと、勇ましい願望をいだいていた。そして、忌まわしい攻撃や、邪教だとの誹謗ひぼうや、右翼左翼両派の――

(ことに右翼の)――不実な裏切りなどを、それらの偉大なキリスト教徒らはたえず受けるにもかかわらず、近代主義の小団をなしてる人々は、永続的なものを築くには涙と血とで固むるのほかはないと知って、苦難を忍従し晴れやかな額ひたいをし、未来に通ずる険峻なる隘路あいろを進んで行きつつあった。

生氣ある理想主義と熱烈なる自由主義との同様な息吹いぶきが、フランスにおける他の宗教をもふたたび活気だたせていた。新しい生命のおののきが、新教やユダヤ教の大きな麻痺まひした身体に流れていた。理性の力をも感激の力をも犠牲にしない自由な人類の宗教を創つくり出さんと、すべての人々が雄々しい競争をなして努力していた。

かかる宗教的熱意は、宗教のみが有してるものではなかった。それはまた革命運動の魂であった。そしてこの方面においては悲壮な性質を帯びていた。クリストフがこれまでに見たものは、下等な社会主義――政治屋連中の社会主義にすぎなかった。その政治屋連中は、幸福という幼稚粗雑な夢を、なお忌憚きたんなく言えば、権力の手に帰した科学が得さしてくれると彼らが自称してる、一般の快樂という幼稚粗雑な夢を、飢えたる顧客らの眼に見

せつけてるのであった。その嫌悪けんおすべき楽天主義に対抗して、労働組合を戦いに導いてる優秀者らの深奥熱烈な反動が起こつてゐるのを、クリストフは見てとつた。それは、「壮大なるものを生み出す戦闘、瀕死ひんしの世界に意義と目的と理想とをふたたび与える戦闘」への召集の叫びであつた。それらの偉大なる革命家らは、「市井的で商人的で平和的でイギリス的な」社会主義を唾棄だきして、世界は「拮抗きつこうをもつて法則とし、「犠牲に、たえず繰り返される常住の犠牲に生きてるといふ、悲壮な観念をそれに対立せしめていた。——それらの首領らから旧世界の襲撃に突進させられてる軍隊が、過激行為にカントとニーチエとを同時に通用してゐるその神秘的戦意を、果たして理解してゐるかどうかは疑問であるとしても、それでもやはり、革命的貴族の一派は痛烈な光景を呈していた。彼らの熱狂的な悲観主義、勇壮な生活の熱望、戦いと犠牲とにたいする熱烈な信念は、ドイツ騎士団や日本のサムライなどの軍隊的宗教的理想と同じであるかの観かんがあつた。

それでも、それはもつともフランス的なものだった。数世紀来牢固ろうこくたる特性を保有してゐるフランス民族だった。オリヴィエの眼を通してクリストフは、コンヴァンション 国約議会の論客や為政家のうちにも、旧政体時代のある思想家や実行家や改革家のうちにも、その特性を見出した。カルヴァン派、ジャンセニスト、ジャコバン黨員、産業革命家、その他各方面にお

いて、空望も落胆もなしに自然と戦つてゐる、悲観的理想主義の同じ精神が——往々国民を粉砕しながらも、なお国民を支持する鉄骨が——現われていた。

クリストフはそういう神秘的信念の息吹いぶきを呼吸した。そして、フランスが強硬な誠実さをうち込んでその熱狂的信念の偉大さを、了解し始めた。統一により多く慣れてゐる他の国民は、それについてなんらの観念ももつてはいなかつた。クリストフも初めはすべての外国人と同じく、フランス人の専制的精神とフランス共和政が真正面にふりかざしてゐる魔法文字との間の、あまりに明らかな矛盾にたいして、駄洒落だじゃれを並べて喜んでゐた。しかるに初めて彼は、フランス人が尊重してゐる尚武的な自由の意味を、おぼろに理解し始めた。それこそ理性の恐るべき刃やいばであつた。クリストフが考えていたのとは違って、それは彼らにとつては、響きのよい美辞でもなく漠然ぼくぜんたる想念でもなかつた。理性の要求が何よりも第一となる民衆にあつては、理性のための戦いがいかなる他の戦いをも支配してゐた。実際的だと自称してゐる民衆らにはその戦いがいかに馬鹿げて見えようとも、それは取るに足らぬことだつた。深い眼から見れば、世界の征服、大帝国、金銭、などのためにする戦いも、やはり徒いたずらなるものとしか見えぬのだ。千年万年とたつうちには、それらの戦いから残るものは何一つないだろう。しかしながら、生にその価値を与えるところのものは、

存在のあらゆる力が昂進^{こうしん}してより高き存在へおのれを犠牲にするほどの戦いの強度にあるとしたならば、理性のためにもしくは理性に反してフランスでなされてる永遠の戦いほど、生を光榮あらしむる戦いは世にあまりない。そして、そういう戦いの辛辣^{しんらつ}な味を味わった人々にとつては、アングロ・サクソン人のあれほど慢^{ぼこ}りとしてる無感情的な信仰の自由も、男らしからぬ無味乾燥なものだと思われるのだった。アングロ・サクソン人は精力の用途を他に見出してその補いをつけていた。彼らの精力はその信仰の自由の中には存在しなかつた。信仰の自由が偉大となるのはただ、敵対中においてそれが一つの勇武となる場合のみである。現今のヨーロッパにおいては、信仰の自由は多く、無関心、信仰の欠乏、生命の欠乏、にすぎないのである。イギリス人は、ヴォルテールの言葉を勝手にもちつて、革命がフランスにもたらしたよりも、「より大なる信仰の自由を、多様な信教がイギリスにこしらえ出した、」と好んで自慢している。——しかしそれは、イギリスの種々の信教のうちによりも、革命のフランスのうちに、より多くの信仰があるからである。

勇敢な理想主義の、理性の戦いの、その戦場から、あたかもウエルギリウスがダンテを導いたように、オリヴィエはクリストフの手をとつて、山の頂へ連れて行った。そこには、

真に自由なるフランス人中の少数の優秀者らが、黙々たる朗らかな様子で立っていた。

それは世にもっとも自由な人々であった。静穩な空を翔ける鳥の朗らかさに似ていた：
 …。その高い頂では、空気がいかにも純潔で希薄であつて、クリストフは息ができにくい
 ほどだった。そこには芸術家や思想家や学者などがいた。芸術家は幻想の無際限な自由を
 主張していた。フローベルのように、「事物の現実性を信ずる馬鹿者ども」を軽蔑する、
 熱狂的な主観論者であつた。——思想家らの変転的な多様な思想は、動体の無窮の波動に
 順応して、「たえず流動し、」どこにも定着せず、どこにも堅固な地面や岩を見出すこと
 なくして、モンテーニュが言つたように、「存在をではなく推移を、時々刻々に移りゆく
 永遠の推移を描き出していた。」——学者らは、人間が思想や神や芸術や学問を作り出し
 てる世界の空虚と虚無とを知らながら、なお世界とその法則とを、一時の力強い夢を、創
 造しつづけていた。彼らは学問に向かつて、安息や幸福やまたは真理をも求めてはいなかつた。
 彼らは真理に到着できるかを疑つていたのである。そして、真理は美しいものであり、唯一の
 美しいものであり、唯一の現実であるがゆえに、ただ真理のために真理を愛していた。思想界の
 絶頂には、熱烈な懷疑家である学者らがいた。彼らは苦しみにも、蹉跌さつてつにも、ほとんど現
 実にも、無関心であつて、ただ魂の無声の音楽に、数と形との微妙雄大

な和^{ハーモニー}声^ニに、眼を閉じて聴^きき入^りっていた。それらの偉大な数学者ら、自由な哲学者ら——世にもっとも厳正確実な精神の人々——は、神秘的な歡喜の極端にあつた。彼らは自分の周囲に空虚な淵^{ぶち}をうがち、深^{しんえん}淵^んの上にぶらさがつて、その眩暈^{めまい}に酔^いつていた。際限なき暗夜のうちに彼らは、崇高な喜びの念をもつて、思想の電光をひらめかしていた。

クリストフも彼らのそばに身をかがめて、のぞいてみようとした。しかし眼がくらんで見られなかつた。自己の本心の法則以外のあらゆる法則を脱したので、もう自由の身だと思^ひじていた彼も、それらのフランス人に比べてはいかに自由の度が狭小^がだかを、駭^{がいぜん}然^{ぜん}として感じたのである。彼らは、精神のあらゆる絶対的な法則から、あらゆる無上命令から、あらゆる生存の理由から、脱^{だつ}してしまつていた。しからばなんのために彼らは生きてるのか？

「自由であることの喜びのためにだ。」とオリヴィエは答えた。

しかしクリストフは、そういう自由の中では途方にくれたので、かえつて力強い規律的精神が、ドイツ式な専横^{せんごう}が、残り惜しくなつてきた。彼は言つた。

「君たちのその喜びは、誘惑の餌^{えさ}であり、阿片喫煙者^{あへん}の夢だ。君たちは自由のために酔^いわされて、生を忘れている。絶対的な自由、それは精神にとっては狂気であり、国家にとつ

ては無政府だ……。自由だと！この世でだれが自由な者がいるか？君の共和国でだれが自由な者がいるか？——いるとすれば無頼漢どもばかりだ。君たちは、りっぱな人間は、皆息がつけないでいるのだ。もう夢みることにしかできないのだ。やがては夢みることもできなくなるだろう。」

「なに構うものか！」とオリヴィエは言った。「クリストフ、気の毒だが君には、自由であることの楽しみがわからないのだ。危険や苦痛や死をさえも冒すに足るだけの、価値ある楽しみなのだ。自由であること、自分の周囲のすべての精神が——そうだ、無頼漢どもまでが、自由であると感ずること、それは言い知れぬ愉快事なんだ。無限の空間に魂が浮遊ゆうしてようなものだ。その魂はもう他の所では生き得ないだろう。君が説く安全というもの、帝国主義の兵營の四壁中にあるりっぱな秩序や完全な規律などは、僕になんの役にたとう？そんな所では窒息して死ぬのほかはないだろう。空気が必要なのだ。常により多くの空気が！常により多くの自由が！」

「世界には法則がいる。」とクリストフは言った。「おそかれ早かれ、主人が現われてくる。」

しかしオリヴィエは嘲笑あざわらって、ピエール・ド・レトアール老人の言葉をクリストフに

思い起こさした。

フランス人の言論の自由を拘束することは、

地上のあらゆる能力の力にては、

なしがたきところなり。

太陽を地中に埋めんとし、

もしくは穴に閉じ込めんとするに、

さも似たり。

クリストフはしだいに、無制限な自由の空気に慣れてきた。全身光のみなる精神の人々が夢想しながら身を置いてる、フランス思想界の絶頂から、彼はその山の斜面を足下に見おろした。そこには、なんらかの生きたる信仰のために戦ってる勇ましい優秀者らが、頂に達せんものと永遠の努力をつづけていた。——無知や疾しづべい病や悲惨にたいして神聖な戦いをしてる人々。光を征服し空中の道を開いてる、近代のプロメテウスやイカロスとも言うべき人々の、発明の熱望、正気な熱狂。自然を統御せんとする学問の偉大な戦い。——

その下方には、黙々たる一団、誠意ある男女、勇敢謙讓な心の人々。彼らはあらゆる努力をもつて、ようやく山の中腹には達したが、凡庸な生活に阻はばめられて、もはやそれより上へは登ることができず、人知れぬ献身のうちにひそかに焦慮している。——さらに下方、山の麓ふもとには、断崖だんがいの間の狭い隘路あいろに、際限なき戦い、抽象的な觀念や盲目的な本能などの狂信者たち。彼らはたがいに猛然と取っ組み合っていて、両方より迫つて岩壁の彼方に、上方に、何があるかを夢にも気づかないでいる。——さらに下方には、沼沢ねわらと寝藁ねわらの中にころがつてる家畜ども。——そして至る所に、あちらこちらに、山腹に沿つて、芸術の新鮮な花、音楽の香り高い苺いちご、泉や小鳥の詩歌。

クリストフはオリヴィエに尋ねた。

「君の国の民衆はどこにいるのか。僕の眼に見えるのは、善良なあるいは害悪な優秀者どもばかりだ。」

オリヴィエは答えた。

「民衆か？ 民衆は自分の庭を耕しているのだ。彼らはわれわれのことを気にかけてはしない。優秀者どもの各団体は、彼らを占有しようと試みるが、彼らはそのいずれにも気を止めはしない。近ごろまで彼らは、少なくとも気晴らしのために、いかさま政治家の口上に

なお耳を貸していた。しかし今ではもう構いつけはしない。選挙権を行使しない者が幾百万あるかわからない。各政党がいかほどたがいに頭をなぐり合っても、彼らの畑を踏み荒らしに来さえしなければ、彼らはその結果のいかに気をかけはしない。ただ畑を踏み荒らされる場合にだけ、彼らは腹をたてて、いずれの党派をも構わずにいじめつける。彼らはみずから動き出しはしない。ただ彼らの仕事と安静とを邪魔する放埒ほうちやうつにたいしてだけ、いかなる方面をも問わず反発する。国王、皇帝、共和党、司祭、結社党、社会党、またその首領がだれであろうと、彼らがそれに向かつて求めるところのものは、一般の大危難、戦争や騒動や疫病、などから彼らを守ってくれることだけだ——それ以外にはただ、平和に庭を耕さしてもらうことだけだ。彼らは心の底ではこう考えている、『あの畜生どもは俺おれたちの邪魔をしやすまいか』と。ところがその畜生どもはいかにも愚かで、この朴訥ぼくどつな民衆をじらしぬき、鋤くわを取って追い出されるまではやめようとしないので——ちやうどそういうことが、現代の勢力者らにもいつか起こるだろう。昔は民衆も大事業に熱中したものだ。そしてもう長い前に若氣あやまの過ちをしつくしてきながら、おそらくはまだそれをふたたびすることもあるだろう。しかしとにかく、その熱中も長つづきはしない。すぐに彼らは古来の伴侶はんりよのもとに、土地に、もどつてゆく。フランス人をフランスに執着させる

ものは、フランス人よりもむしろ、その土地なのだ。その善良な土地の上に相並んで数世紀来働いてきたフランス人は、多くの異なつた民衆から成つてはいるが、彼らを結合させてるのはその土地であり、彼らがもつとも愛してるのはその土地である。幸福のうちにも不幸のうちにも、彼らはたえずその土地を耕しつづけている。そして何物でも、たとい尺寸の地面でも、彼らにとつては親愛なのだ。」

クリストフはうちながめた。道路の傍ら、沼沢の周囲、岩の斜面の上、実行の戦場や廢墟の間、フランスの山も野もすべては、見渡す限り遠くまで、耕耘されていた。それはヨーロッパ文明の大庭園であつた。その比類なき魅力は、豊饒なりつぱな土地にかかつてるとともにまた、不屈不撓な民衆の努力にかかつてるのだつた。彼らは数世紀来かつて絶え間もなく、その土地を耕し種まきますます美しくなしていった。

不思議な民衆である！ だれでもこの民衆を移り気だと言っているが、しかもその内部にはなんらの変化もない。オリヴィエの敏い眼は、現在の各方面の類型を、ゴチック彫刻中にも見出していた。たとえば、クルーエ一家やデュモンステイエ一家の鉛筆画には、社交界や知識階級の人々の疲れた皮肉な顔つきを、あるいは、ルナン兄弟の絵には、イールド・フランスやピカルデーの労働者や農夫などの、機才と輝いた眼とを見出した。ま

た現代人の本心の中に流れてるものも、やはり昔の思想であつた。パスカルの精神は、ただに理論好きな宗教的な優秀者らのうちにばかりではなく、名もない市民らのうちや、あるいは過激な産業革命主義者らのうちにも、生きてるのであつた。コルネイユやラシーヌの芸術は、民衆にとつて生きていた。パリーの下級の勤め人は、トルストイの小説やイプセンの劇によりも、ルイ十四世時代の悲劇により近い気持をもっていた。中世の歌は、フランスの古いトリスタンは、ワグナーのトリスタンよりも、近代フランス人とより多くの親しみをもっていた。十二世紀以来たえずフランスの花園に咲きつづけてきた思想の花は、いかにも種々雑多ではあつたけれども、皆たがいに近親の間柄であつて、周囲のものとはまったく異なっていた。

クリストフはフランスについてあまりに無知だったので、その特質の不変さをよく見てとることができなかつた。この豊かな景色のうちで彼がことに驚いたものは、土地の極端に細かい区分だつた。オリヴィエが言ったように、各人が自分の庭をもっていた。そして各地面は、壁や生籬いけがきやあらゆる種類の仕切りで、たがいに分かたれていた。たかだか、共通の牧場や森が散在してるきりであり、あるいは、川の一方に住む人々が、対岸の人々よりも、たがいに接近させられてるくらいのものであつた。そして各人が自分の家に閉じこ

もつていた。そういう嫉視しっし的な個人主義は、たがいに隣り合つて数世紀間暮らしてきたあとも、衰えるどころかかえつて強くなつてゐるかのようだった。クリストフは考えた。

「彼らはなんと一人ぼつちのことだろう！」

クリストフとオリヴィエとが住んでゐる家は、そういう意味でもっとも特長あるものだった。それは小世界の縮図であつた。種々の要素をたがいに結合する何物もない、正直勤勉な小フランスであつた。六階建ての古いぐらぐらした家で、一方に傾いており、床ゆかいた板はきしり、天井は虫に食われていた。屋根裏に住んでゐるクリストフとオリヴィエとの部屋には、雨漏りがしてゐた。どうにか屋根を繕うために、職人を呼ばなければならなくなつてゐた。職人らが頭の上で仕事したり話したりするのが、クリストフの耳に響いた。ことにその一人は、クリストフを面白がらせまた煩うるさがらせた。その男はたえず休みなしに、一人で口をきき、笑い、歌い、駄洒落だじゃれを並べ、つまらぬ口笛を吹き、独ひとりごと語を言い、始終働いてゐた。何かすることにならずそれを口に出した。

「も一本釘くぎを打つてやれ。道具はどこにあるんだ？ 釘を一本打つたぞ。二本打つたぞ。も一つ金槌かなづちでとんと！ そら、これでよし……。」

クリストフが演奏するとき、彼はちよつと黙つて耳を傾け、それからまたますます口笛を吹きたてた。面白い楽節になると、金槌でたたきながら屋根の上で調子をとった。クリストフは向かつ腹をたてて、しまいには椅子いすの上にあがり、その屋根裏の風窓から顔を出して、怒鳴りつけてやろうとした。しかし、その男が屋根にまたがり、善良な快活な顔つきをし、頬ほおをふくらまして釘くぎを頬張ほおばつてる様子を見ると、彼はすぐに笑い出した。向こうでも笑い出した。クリストフは苦情を忘れて話しだした。ようやくあとになって、なんのために窓から顔を出してるかを思い出した。

「時にちよつと聞きたいことがあるんだが。」と彼は言った。「僕のピアノが邪魔になりはしないかい。」

邪魔にはならないと男は答えた。けれども、もつと早い調子の節ふしをひいてくれと頼んだ。なぜなら、おそいのに調子を合わしていると仕事が遅れるからだだった。二人は仲よしになつて別れた。その十五分ばかりの間に二人がかわした言葉よりも、半年の間にクリストフが同じ建物に住んでるすべての人々へ言った言葉は、さらに少なかつたほどである。

各階に二軒分の住居があつて、一方は三室、他方は二室きりだった。女中部屋はなかつ

た。各家族が自分で炊事をやっていた。ただ、一階と二階との人たちだけは、二軒分の住居をいっしょに借りていた。

六階には、クリストフとオリヴィエの隣に、コルネイユという牧師が住んでいた。四十格好の人で、教養も深く、自由な精神と広い知力とをそなえていた。昔はある大きな神学校の聖書解釈の教師をしていたが、最近になって、その近代的な精神のためにローマ法王から懲戒された。その懲戒を彼は甘受した。心の底では承服しなかつたのであるが、しかし口をつぐんで、抗争しようともせず、その信条を公表する手段を申し込まれたのも断わり、騒がしい世評をのがれ、とくしん流神の名を取るよりも自分の思想の滅亡を好んだのだった。そういうあきらめた反抗者の人柄が、クリストフには理解できなかつた。彼はその牧師と話をしようと試みた。しかし牧師はたいへん丁寧で、冷淡な様子で、自分の身にもっとも関係深いことは少しも語らず、厳としておのれを生き埋めにしていた。

下の階には、クリストフとオリヴィエの住居と同じ間取りの部屋に、エリー・エルスベルゼという家族が住んでいた。技師とその細君と七歳から十歳ほどの二人の娘とであった。同情の念に富んだ上品な人たちで、ことにその困窮な身分についての誤った恥じらいから、

家に引つ込んでばかり暮らしていた。若い細君は甲斐かいがいしく家事をつかさどっていたが、困窮をひどく苦にやんでいた。その困窮を人に隠すことができぬなら、二倍の労をもいとわなかつたであろう。それもまたクリストフにはわからない感情だつた。この一家は新教徒であつて、フランスの東部の出であつた。夫妻とも数年前に、ドレフューズ事件の暴風のため吹きまくられたのだつた。二人ともその件案に熱中して、この神聖なヒステリーの烈風に七年間吹かれた数千のフランス人と同じく、狂気の沙汰さたにまでなつてしまつた。安樂も地位も縁故をも、そのために犠牲にしてしまつた。親愛な友誼ゆうぎをも破り、自分の健康をも失わんとした。数か月の間、もはや眠りもせず、食をもとらず、病的な熱心さで同じ議論を際限もなく繰り返した。たがいに刺激し興奮し合つた。臆おくびよう病びようであり世の物笑いを恐れていたにもかかわらず、示威運動に加わつたり集会で演説したりした。そしては幻想に駆られ異常な心地になつてもどつてきた。夜はいつしよに涙を流した。かくてその戦いに、感激と熱中との力を多分に費やしてしまつたので、勝利が到来したときには、それを享樂するだけの力がもはや残つていなかった。一生しやうが涯がい元氣は失せう疲れはててしまつたのである。その希望があまりに高く、その犠牲の熱があまりに純潔だつたので、初め夢想していたところのものに比ぶれば、勝利もつまらなく思われた。ただ一つの真理をし

いれないそれらの一途な魂にとつては、政治上の処置や主要人物らの妥協は、苦々しい幻滅の種となるのだった。自分の戦友らが、正理にたいする同じ唯一の情熱で鼓舞されると思われる人々が、一度敵を征服すると、利にはしり権力を奪い、名誉や地位をかすめ取り、正理を蹂躪するようになるのを、彼らは見て来たのだった。が世の中のことは回り持ちだ……。ただ一群の人々のみが、おのれの信仰を忠実に守り、貧しい孤立の生活をし、あらゆる党派から見捨てられ、またあらゆる党派を見捨ててしまい、離れ離れに闇の中にたたずみ、悲哀と神経衰弱とに悩み、人間をいとい人生に飽いて、もはやなんらの希望もいだいてはいなかった。技師とその細君とは、かかる敗北者らに属していた。

彼らは家の中で少しも音をたてなかった。隣人たちから邪魔されるのを苦にしていただけに、また高慢の念から不平をこぼしもしなかっただけに、かえってこちらが隣人たちの邪魔になりはすまいかと病的な恐れをいだいていた。二人の娘たちが、快活の発作や叫び跳ね笑いたい欲求を、たえず押えつけられてるのに、クリストフは憐れみの念を覚えた。彼はいったい子供が大好きだった。その隣の娘たちに階段で出会うと、いろんなやさしい素振りを見せた。娘たちは初め恥ずかしがっていたが、クリストフからいつも面白いことを言われたり菓子をもらったりしたので、やがて馴れてきた。そして両親にも彼の噂をし

た。両親は初め、彼のそういう好意をかなり悪意の眼でながめていたが、ついにはその騒々しい隣人の磊落らいらくな様子に気が折れてしまった。それまでに彼らは一度ならず、頭の上のピアノの音や忌ま忌ましい騒ぎ——（というのは、クリストフは室の中が息苦しくて、檻おりの中の熊くまみたいに動き回っていた）——などを呪のろったものだった。両方で口をきき合うようになるには容易なことではなかった。クリストフのやや田舎者いなかじみた乱暴な様子に、ユリー・エルスベルゼはびつくりすることがあった。そして、このドイツ人と自分との間に遠慮かきの垣をいつまでも築いていて、その後ろに隠れようとしたけれど、そうはゆかなかつた。善良なやさしい眼で人をながめる彼の強い快活な気分には、逆らうことができなかつたのである。クリストフは時たま、その隣人から多少の打ち明け話を引き出し得た。いたいエルスベルゼは奇妙な精神の男で、勇敢であるとともに冷然たるところがあり、いらいだちやすいとともに忍従的なところがあった。困難な生活をりっぱに切りぬけてゆく元気はあったが、生活を更新するだけの元気はなかつた。あたかも自分の悲観主義を正当視して喜んでるかのようだった。最近、ブラジルにおけるある有利な地位を、ある事業を監督することを、申し込まれたが、彼は、家族どもの健康にその気候が悪くはないかを恐れ、断わってしまった。

「では家族を残しておいたらいいでしょう。」とクリストフは言った。「一人で行って皆のために財産を作っていらつしやい。」

「家族を残すんですって！」と技師は叫んだ。「なるほどあなたには子供がないから無理はありません。」

「たとい子供があつたつて、私はそうしか考えませんよ。」

「いやそんなことはけつして、けつして！……それにまた、国を去るんです。厭なことだ。ここで苦しんでるほうがましです。」

いっしょにつまらなく暮らすというだけのそういう国や家族の愛し方を、クリストフは奇異に思った。しかしオリヴィエはそれを理解した。

「まあ考えてみたまえ、」と彼は言った、「馴染なじみのない土地で、愛する者たちから遠く離れて、そのまま死ぬかもしれないのだ！ どんな厭なことでもそれよりはましだ。それにまた、これから幾年生きるかshれないが、それほど齷齪あくせくするにも及ぶまいじやないか……」

「いつでも死ぬことばかりを考えてるでも言うのか！」とクリストフは肩をそびやかしながら言った。「それにもし死ぬことがあつても、愛する者たちの幸福のために奮闘しな

がら死ぬのは、無為無能のうちに消えてしまふよりはましじやないか。」

同じ五階の小さいほうの部屋には、オーベルという電気職工が住んでいた。——この男は他の借家人たちから孤立して暮らしていたが、それはけつして彼のせいではなかった。彼は平民の出であつて、もうけつして平民の間にもどるまいと熱望していた。病身らしい小男で、いかめしい顔をし、眼の上に筋があつて、錐きりのように人を刺し通す鋭い直線的な眼つきをしていた。金きん褐色かつしよくの口髭ひげ、嘲ちやうろう弄ろう的な口、口笛を吹くような話し方、曇つた声、首にまきつけてる絹ハンケチ、いつも加減が悪い上へのべつの喫煙癖のためさらに痛められてる喉のど、微弱な活動力、結核患者めいた氣質。空威からい張りばりと皮肉と悲痛との交じり合つてる様子だったが、激しやすすい大袈裟おおげさな率直なしかもたえず人生に欺かれてる精神が、その下に隠れていた。ある中流人の私生児だったが、彼はその父親の名も知らず、とうてい尊敬できない母親に育てられ、悲しい汚らわしい多くのことを幼年時代から見えてきた。各種の職業をやつてみ、フランス内を方々旅した。学問をしたいという感心な心がけで、非常な努力をして独修した。歴史、哲学、頽たいはい廢はい的な詩など、あらゆるものを読んでいた。芝居、美術展覧会、音楽など、あらゆるものに通じていた。中流人的な文学や思想を心か

ら尊重していて、それに蠱惑こわくされていた。大革命の初めのころの中流人士らを逆上させた空漠くうばく熱烈な観念論に、心からしみ込んでいた。理性の無む謬びゅうさを、無際限の進歩——われいずこまでか登り得ざることあらん——を、地上へ幸福の到来を、全能なる学問を、人類神を、人類の長子たるフランスを、確信していた。熱烈な軽率な反僧侶はんそうりよ主義をいだいていて、そのために、宗教を——ことにカトリック教を——蒙昧もうまい主義とみなし、牧師を明知の生来の敵と考えていた。社会主義、個人主義、過激主義などが、頭の中でぶつかり合っていた。精神上では人道主義者であり、気質の上では専制主義者であり、行為の上では無政府主義者であった。傲慢ごうまんではあったが、教育の不足をみずから知っていて、会話においてたいへん用心深かった。人の言うことをすべて利用していたが、助言を求めようとはしなかった。助言を求めものを恥辱としていた。ところが、彼の知力や才気がいかにすぐれていようと、それだけで教育の不足をすっかり補うことはできなかった。彼は前から物を書こうと志していた。フランスには学問がなくて文章の巧みな者が多いとおり、彼もやはり文才があつて、それをよく自覚していた。しかし思索のまとまりがなかった。苦心さんたん澹たんの文を数ページ、信用して豪えいい新聞記者に見せたところが、嘲笑ちやうしやうされてしまった。深く屈辱を感じて、それ以来は、自分のしることをもうだれにも語らなかつた。

しかしなおつづけて書いていた。自分の考えを広く人に伝えることは、彼にとっては一つの欲求であり、矜ほこらかな喜びだった。その雄弁や文章や哲学的な思想は、実は一文の価値もないものだったが、彼は内心それにはなほ満足していた。そして実際非常にすぐれた実生活にたいする観察には、みずから少しも重きをおいていなかった。彼には妙な癖があつて、自分を哲学者だと信じており、社会劇や観念小説を作りたがつていた。解決したい問題をも容易に解決して、事ごとにアメリカ大陸を発見でもした気になつていた。そのアメリカの大陸がすでに発見されるものであることをあとで知ると、だまされた気になり、多少苦にが々しい心地になつた。陰謀であることがめだてしがちだった。名誉にあこがれぬき、献身の熱望に駆られていて、どういうふうに自分を使ってよいかわからないで苦しんでいた。彼の夢想するところは、大文学者になることだった。彼の眼には超自然的な威光を帯びてらしく映る文士仲間、その一員に加わることだった。けれどいくら自惚うぬぼれてみても、彼はかなりの良識と皮肉とをそなえていて、そういう機会が自分には到来しないことを知らないではなかつた。それでも、中流思想の世界は、遠くから見ると光被してるように思われ、少なくともその中に住んでみたかつた。そういう熱望はきわめて無邪気なものではあつたが、身分上いっしょに暮らさなければならぬ人々との交際を困難な

らしむるといふ、不都合さをきたした。そして、彼が接近しようとしてつとめてる中流社会からは門戸を閉ざされたので、その結果だれにも会えないこととなった。それでクリストフは、この男と交際するにはなんらの努力をも要しなかつた。むしろすぐに避けなければならなかつた。そうでないと、クリストフのほうから出かけてゆくよりもしばしばオーベルのほうからやつて来たに違いない。オーベルは音楽や芝居などの話相手になる芸術家を見出して非常に喜んでいた。しかしクリストフは、読者もそう想像するであらうが、そんなことには彼と同じ興味を見出さなかつた。民衆の一人を相手にしてはむしろ民衆のことを話したかつた。しかるにオーベルは、そんなことを話したくなかつたし、またそんなことを知つてもいなかつた。

下の階に降りてゆくに従つて、クリストフと他の借家人たちとの關係は、自然に遠くなつていつた。それにまた、四階の人たちのところへはいり込むには、何かある魔法的な秘訣ひけつを、開けよ胡麻ごまを、知つていなければならぬほどだつた。——一方には、二人の婦人が住んでいて、古い喪の悲しみのうちに浸り込んでいた。ジェルマン夫人という三十五歳になる女で、夫と小さな娘とに死なれてから、信心深い老年の姑しゅうとめとともに、家に閉じこも

つてばかり暮らしてゐるのだつた。——その向こう側には、五、六十歳ぐらゐの年齢不確かな謎なぞのような人物が、十歳ばかりの少女といつしよに住んでゐた。頭は禿はげてゐたが、ごく手入れの届いたりつばな髻ひげをもつてゐた。静かな口のきき方をし、上品な態度で、貴族的な手をもつてゐた。ヴァトレー氏と人から呼ばれてゐた。無政府主義者で革命家で外国人だそうだったが、ロシアかベルギーかどこの国の人もわからなかつた。ところが実際は、彼は北部フランスの人で、もう今ではほとんど革命家ではなかつた。ただ昔の名声だけで生きてゐた。一八七一年のパリ―自治政府に關係して、死刑の宣告を受けたのだつたが、自分でもどうしてだかわからないほど不思議にのがれた。それから十年ばかりの間は、ヨーロッパの各地に暮らしてきた。かくて、パリーの擾じょうらん乱の間にも、またその後、外国へ亡命の間にも、帰国してからは政府に加担してゐる昔の仲間のうちにも、あらゆる革命党の内部にも、多くの卑劣な行ないを目撃したので、どの革命派からも身を引いて、一つの汚点もないしかし無益な自信だけを安らかに保有したのである。彼は多く書を読み、なまぬるい煽せんどう動的な書物を少し書き、遠くインドや極東の無政府主義運動に——（人の噂うわさによれば）——關係をもち、世界の革命に従事し、また同時に、同じく世界的ではあるが外見上もつとやさしい研究に従事して、音楽の通俗教育のために、世界的言語と新しい方

法とを求めていた。彼はその建物に住んでるだれとも交際しなかった。出会った者と極度に丁寧な辞儀をかわすだけにとどめていた。それでもクリストフへだけは、自分の考えた音楽上の方式について数言語つた。ところがそれはクリストフにはもつとも興味の無いことだった。クリストフに言わすれば、思想の符号は別に重大なことではなくて、いかなる言語をもつてしても思想を表現し得るのだった。しかし向こうはそれでもなおやめずに、穏やかな執拗さしつようで自分の学説を説明しつづけた。それ以外の彼の生活については、クリストフは何にも知ることができなかった。それで、階段で彼とすれちがって立ち止まるのも、常に彼の供をしてる少女を見るためにすぎなかった。色の蒼い貧血的な金髪の少女で、青い眼、ややとげとげしい横顔、細長い身体、あまり表情のない病身らしい様子だった。クリストフも皆の者と同じく、それをヴァトレーの實の娘だと思っていた。ところが実際は、労働者の孤児であつて、流行病で両親が死んだ後、四、五歳のときに、ヴァトレーから養女にされたのだった。ヴァトレーは、貧しい子供たちにたいして、ほとんど無限の愛をいいていた。それは彼にあつては、ヴァンサン・ド・ポール風な不思議な愛情だった。彼はあらゆる公式の慈善について疑念をもつていたし、博愛団体についてはいかに考うべきかも知っていたので、一人で慈善をするように心がけていた。彼はそれを人に隠して、

ひそかな楽しみを味わっていた。社会に尽くすつもりで医学をも学んでいた。以前、彼は町内のある労働者の家にはいつて、病人がいるのを見、その手当を始めた。そのときすでに医学上の知識を多少そなえていたが、それをさらに完全にしようと思いつたのだった。彼は病に苦しんでる子供を見ると、断腸の思いがして堪えられなかった。しかしまた、憐れな小さき者の一人を病苦から救い出し得たときには、蒼ざめた微笑がその痩せこけた顔に初めて現われてきたときには、いかにえも言えぬ喜びだったろう！ ヴァートルーの心はとろけそうになった。天国的な瞬間だった……。そのために彼は、世話をしてやつた者らについてしばしば厭な思いをしたことを忘れるのだった。彼らのうちで彼に感謝の意を表わす者はめつたになかった。また一方では、きたない足をした多くの者が彼のところへ階段を上がつてゆくのを見て、門番の女は腹をたて、苦々しげに苦情を言った。また家主のほうでは、無政府主義者らの会合ではないかと気づかかって、いろいろ不平を言っていた。ヴァートルーは移転しようかと考えたが、それもめんどうだった。彼にはちよつとした癖があった。温和でもあり頑固でもあった。彼は人の言うことをそのまま放っておいた。

クリストフはいつも子供らに愛情を示すので、多少ヴァートルーの好感を得た。子供にたいする愛が二人をつなぐ糸だった。クリストフはヴァートルーの少女に出会うことに、なん

だか胸迫る思いがした。なぜなら、意識をまたずに本能がじかに見てとる神秘的な形体の類似によつて、その少女は彼にザビーネの娘を思い出させ、遠い最初の恋を、心からかつて消えなかつた無言のやさしみをもつてるあの儂い面影はかなを、彼に思い起こさしたのである。それで彼はその蒼白あおしろい少女に興味をもつた。彼女はかつて飛んだり駆けたりする姿を見せたことがなく、ほとんど人に聞こえる声をたてたことがなく、同年配の友だちを一人ももたず、いつも独りひとで黙つていて、人形や木片で一つ所にじつと音もたてず遊びながら、ぶつぶつ唇くちびるを動かして何か独ひとりごと言を言つていた。やさしげで無頓着むとんじやくだった。彼女のうちには何かよそよそしい落ち着かないものがあつた。しかし養父は彼女をあまり愛しすぎでそれに気づかないでいた。ああ、その落ち着かなさ、そのよそよそしさ、それはわれわれの血肉を分けた子供たちのうちにさえ常に存在しないであろうか？……——クリストフは、その小さな孤独者を技師の娘たちと近づきになしてやろうとした。しかしエルスベルゼのほうからもヴァトレーのほうからも丁寧なしかし明白な謝絶に接した。その人たちは、各自別々な箱の中に生き埋めになることを、名誉にかけても欲してゐるがようだった。厳密に言えば、彼らはたがいに助け合うことを承諾したはずである。しかしどちらも、自分のほうが助力を求めてるのだと思われはすまいかと恐れていた。そしてどちらも同じくらい

の自尊心を——また同じぐらいの不安定な境遇を——もっていたので、どちらか一方が思い切つて初めに手を差し出すということは、望まれないことだった。

三階の大きいほうの部屋は、たいていいつも空あいていた。家主がそれを自分の用に取りのけておいたのである。しかも家主はかつてそこに住んだことがなかった。彼は元商人だったが、前もつて定めておいた一定額の財産を儲もけるとただちに、きつぱりと仕事をよしとしまつたのだつた。冬は碧コト・ダジュール海の浜のある旅館、夏はノルマンディーの海岸というふうに、一年の大部分をパリー外で過ごし、他人の贅ぜいたく沢たくをながめ他人と同様に無駄むだな生活を送りながら、わずかな費用で贅沢ぜいたくをしてるという心地を得てる、けちな金利生活者だつた。

小さいほうの部屋は、アルノーという子供のない夫婦者に貸してあつた。夫は四十から四十五ぐらいの年で、中学校の教師だつた。講義や講義草稿や特別教授などの時間に疲れはてて、学位論文を書くことができず、ついにはまったく思い切つてしまつた。細君は十歳年下で、おとなしくて極度に内気だつた。二人とも頭がよく、教養があり、たがいに愛

し合っていたが、だれも知人がなく、家に閉じこもってばかりいた。夫のほうは出かける隙ひまがなかった。細君のほうは隙ひまがありすぎた。しかし彼女は感心な婦人で、気が鬱ふさいでもそれを押えつけ、ことに人へはそれを隠して、できるだけ仕事をし、読書をし、夫のためにノートをとってやったり、夫のノートを写し直したり、夫の衣服を繕ったり、自分の上衣や帽子を自分で仕立てたりした。彼女はときどき芝居へ行きたがった。しかしアルノーは別に行きたがらなかった。晩になると疲れきっていた。それで彼女もあきらめた。

彼らが非常な喜びとしてるのは音楽だった。二人とも音楽をたいへん好きだった。夫のほうは演奏ができなかった。細君のほうはできはしたがなかなかやれなかった。だれかの前で演奏するときには、夫の前で演奏するときでさえ、まるで子供のように恥ずかしかった。けれども彼らにはそれだけで満足だった。おずおずと口に上せるグルックやモーツァルトやベートーヴェンなどが、二人にとっては友となった。二人はそういう人々の生しょうが涯いを詳しく知っていて、彼らが受けた苦しみを思うと、しみじみと愛情を覚えさせられた。またりつぱな本や有益な本をいっしょに読むのも、二人にとっては楽しみだった。しかし現代の文学にはそういう本はほとんどない。作者らは、名声をも快樂をも金をももらし得ないような人々——ちようどこの二人の微賤びせんな読者のように、世の中に姿も見せず、

どこにも筆を執らず、ただ愛し黙ることしか知らないような人々、それを相手にしてはいないのである。アルノー夫妻は、正直な敬けいけん虔けんな人々の心のうちでほとんど超自然的な性質を帯びてくる、ひそやかな芸術の光と、おたがいの愛情とだけで、多少寂しく——（これは否定できないことである）——孤独でややつまらなくはあるが、それでも平和に十分幸福に生きてるのだった。彼らは二人とも現在の地位よりずっとすぐれた人たちだった。アルノー氏は多くの思想をもっていた。しかし今ではそれを書くだけの時間も勇気もなかった。論説や書物を世に発表するには、あまりに多くの奮発が必要だった。それほど努力が甲斐いのあることでもなかった。無益な虚栄心にすぎない。彼は愛する思想家らに比ぶれば取るに足らぬ者だと自分を思っていた。りっぱな芸術作品をあまりに愛していたので、自分自身で「芸術を作ろう」とは願わなかった。そういう志望は、横柄な滑稽こっけいなことだと考えられた。自分の役目はりっぱな作品を広めることのように思われた。それで彼は、自分の思想を生徒らに利用さしておいた。生徒らは後に彼の思想を利用して書物を作るだろう——もとより彼の名前を挙げはしないで。——書物の購買に彼ほど金を使う者はなかった。貧しい者こそ常にもっとも気前がよい。彼らはいつも書物を買う。富める者はただで書物を手に入れなければ不名誉なことと思ってるらしい。アルノーは書物のために金を使

い果たしていた。それが彼の弱点で、欠点だった。彼はそれを恥じて細君に隠していた。とは言え、細君はそれを彼にとがめようとはしなかったし、自分でも同様のことをやりかねなかった。——それでも彼らは、イタリーへ旅するつもりで——なかなか実現できないことは自分でもわかってはいたが、いつもりっぱな儉約の計画をたてていた。そして金を残し得ないことをみずから笑っていた。アルノーは自分で自分を慰めた。愛妻と、それから研究と内心の喜びとの生活だけで、彼には十分だった。細君もそれで十分ではなかったろうか？——十分だと彼女は言っていた。多少彼女の上にも及んできて生活を輝かし安樂をもたらすようなある名声を、もし夫がもち得たらうれしいだろうということ、彼女は言い得なかった。内心の喜びはりっぱなものではある。しかし外部の多少の栄光も、時にはきわめてうれしいものだ！……しかし彼女は内気だったので何にも言わなかった。そのうえ、彼がもし名声を得ようと欲しても果たして得られるかどうかかわからないことを、彼女はよく知っていた。今からではもう時期遅れだ！……彼らのもっとも残念なのは子供のないことだった。それを彼らはたがいに隠していた。そしてたがいにますます愛情深くなっていた。隣れあわにもたがいに相手の許しを求めているがようなものだった。アルノー夫人は親切で情愛に厚かった。エルスベルゼ夫人とも喜んで交際したに違いない。しかしまだな

し得ないでいた、向こうからその気を見せてくれなかったのだ。クリストフにたいしては、夫妻とも近づきになりたがっていた。遠くに聞こえる彼の音楽に魅せられていた。しかしこちらから進み出てゆくことはどうしてもできなかった。彼らにはそれがぶしつけのよう
に思われたのである。

二階は、フェリックス・ヴェール夫妻が全部占領していた。富裕なユダヤ人で、子供がなく、一年の半分はパリー付近の田舎いなかで過ごしていた。この家に二十年来住んでいた——（もつと財産相当の部屋を見つけるのは容易だったろうが、昔からの習慣でやはりそこにいたのである）——けれど、いつも通りがかりの他国者らしい様子をしていた。隣の人たちへかつて言葉をかけたことがなく、いつまでも最初やって来たときと同じようにあまり人から知られていなかった。しかしそのために、人からかれこれ言われぬという訳にはゆかなかつた。否その反対だった。彼らは人から好かれていなかった。そしてもちろん、人から好かれようとしなかつた。それでも彼らはもつとよく知られてよいだけの価値をもっていた。夫妻ともすぐれた人たちでりっぱな知力をそなえていた。夫は六十歳ばかりになっていた、中央アジアの名高い発掘で世に知られたアッシリア学者だった。同民族の

多数の者と同じく好奇心に富んだ広い精神をもっていて、その専門の研究だけに閉じこもっていずに、美術、社会問題、現代思想の各種の現われなど、無数のことに興味をもっていた。がそれでもなお彼の心を満たすに足りなかつた。というのは、彼はあらゆることを面白く思ったが、どれにも熱中することができなかつた。きわめて頭がよく、あまりに頭がよく、何物にもあまりにとらわれなくて、一方の手でこしらえ上げたものを他方の手でこわしがちだつた。実際彼は著作や理論などを多くこしらえ上げていた。非常な勉強家だつた。自分のしるることを別に有益だとは思わなかつたが、習慣によつてまた精神的攝生法によつて、自分の痕跡こんせきを学界に氣長に深く刻みつづけていた。いつも禍わざわいなことには富裕だつた。そのため生存競争の興味をかつて味わつたことがなかつた。東方諸国における努力にも数年の後に飽いてしまつて、それからはもうなんらの公職にもつかかなかつた。それでも自分独りの勉強以外に、時事問題、實際直接な社会改革、フランスにおける社会教育の改造、などに先見の明をもつて関係していた。種々の意見を發表して思潮をこしらえていた。思想界に活氣を与えながら、すぐにまたそれにも厭いやけ氣がさしていた。議論によつて多くの人を論争に巻き込み、もつとも痛烈なもつとも圧倒的な批評を加えて彼らを悲憤させたことも、一度ならずあつた。彼はことさらそんなことをしたのではなかつた。それ

が生来の欲求だった。きわめて神経質で皮肉だったので、他の迷惑となるほどの明敏さで事物人物の滑稽こっけいな点を見抜き、それを容赦することが困難だった。いかにりっぱな主張も人物も、それをある角度から見たりある拡大を施して見たりすれば、かならずならかの滑稽な方面を現わすものであり、したがって、皮肉な彼にはそれを長く尊敬してることができなかつた。それゆえ彼には友人ができよう訳はなかつた。しかし彼は他人のために計ってやるという善良な意志をもっていたし、実際それを行なっていた。けれどもあまりありがたいとは思われなかつた。彼の世話を受けた人たちでさえ、彼の眼から滑稽に見てとられたことを、ひそかに許しがたく思っていた。彼は人を愛せんためにはあまりによく人を見ないほうがよかつた。彼は人間ぎらいではなかつた。人間ぎらいの役目をなし得ようとは自分でも思つてはしなかつた。世間をあざけてはいるがその世間にたいしてむしろ臆病おくびょうだつた。内心では、自分より世間のほうが道理でないとは確信できなかつた。他人とあまり異なつたふうをするのを避けていたし、表面に現われてる他人のやり方や意見のつとに則ろうとつとめていた。しかしかにも無駄だつた。それらを批判せずにはいられなかつた。あらゆる誇張されたものや単純ではないものにたいして、鋭敏な知覚をそなえていた。そして自分のいらだちを少しも隠し得なかつた。ことにユダヤ人らの滑稽こっけい

稽^いな点には、彼らをよく知ってるだけになおさら敏感だった。そして、人種間の柵^{さく}を認めないほど自由な精神をもつてたにもかかわらず、他の人種の者らが彼にたいして設ける柵にしばしばぶつかったので、また、彼自身も本意ながら、キリスト教的思想の中では異境にある気がしたので、彼は威厳ある孤立を守って、自分の皮肉な批判癖と細君にたいする深い愛情とのうちに引つ込んでいた。

災^{わざわ}いなことには、細君もまた彼の皮肉な眼からのがれなかった。彼女は親切で、活動的で、自分を役だたせたいと願い、いつも慈善事業にたずさわっていた。夫よりはるかに複雑でない性質の彼女は、自分の道徳上の誠意のうちに、また、自分の義務としての多少頑^{かたくな}な理知的なしかしごく高尚な意見のうちに、うずくまり込んでいた。かなり憂鬱^{ゆううつ}で、子供もなく、大きな喜びもなく、大きな愛もない、彼女の全生活は、その道徳的信念の上に築かれていた。が信念というも実は信じたい意志にすぎなかった。夫の皮肉な眼は、彼女の信念のうちにある勝手な欺瞞^{ぎまん}の方面を見のがさなかったし、心ならずもからかわずにはいられなかった——（それは自分でも抑制し得ないことだった。）彼はまったく矛盾ででき上がっていた。義務については細君に劣らぬ高尚な感情をもっていたが、また同時に、解剖し批評し欺かれたくないという一閃な欲求をもっていて、自分の道徳上の命令を寸断

し粉碎していた。彼は細君の立脚地を覆^{くつが}えしてることには気づかなかつた。残酷なまでに細君を落胆させていた。それに感づく^くと彼女以上に苦しんだ。しかしもうやったことでしかたなかつた。それでも彼らはなおつづけて、忠実に愛し合い、働き、善を行なっていた。しかし細君の品位を保つた冷然さは、夫のほうの皮肉さと同様に、人からよく思われなかつた。そして彼らはあまりに高く止まつて、実際になして善や善をなしたいという願望などを高言しなかつたので、人々は彼らの控え目なのを冷淡だと見なし彼らの孤立を利己主義だと見なしていた。彼らは人からそういう意見をもたれると感ずれば感ずるほど、ますます用心してそれを打ち消そうとはつとめなかつた。同人種の多くの人たちの露骨な無遠慮さにたいする反動から、傲慢^{ごうまん}が多く宿つてゐる極端な遠慮さのために、彼らは犠牲となつていた。

小さな庭から数段高くなつてゐる第一階には、植民地砲兵の将校で今は退職の身となつてゐる、シャブラン少佐が住んでいた。まだ若々しい元氣な男だつた。スーダンやマダガスカルで花々しい戦いをしたこともあつたが、その後にはわかにはすべてをなげうつて、この住居に腰をすえ、もう軍隊のことは噂^{うわさ}を聞くのもいやがり、花壇を掘り返したり、いつまでも

物にならぬフルートの稽古けいこをしたり、政治のことを憤慨けいがいしたり、愛する娘をいじめたりしながら、日々を過ごしていた。その娘というのは三十歳の若い女で、ごくきれいではないが愛嬌あいきょうがあつて、父親に一身をささげ、父親のもとを離れたくないので結婚もしないでいた。クリストフは窓からのぞき出して、しばしば彼らをながめた。そして自然と、父親によりも娘のほうに多く注意を向けた。彼女は午後的一部分を庭で過ごしながら、年取つた不平等の父親といつしよにいつも上機嫌じょうきげんで、縫い物をしたり夢想したり庭をいじつたりしていた。少佐の口やかましい声に茶化した調子で答えてる、彼女の静かな澄んだ声が聞こえた。少佐は砂の小径こみちをいつまでもぶらついていたが、やがて家に引つ込んでいった。彼女はあとに残つて、庭のベンチに腰をかけ、身動きもせず口もきかずぼんやり微笑ほほえみながら、幾時間も裁縫さいほうしていた。一方では家の中で、退屈たいくつしきつてる少佐が、一生懸命せうけんめいにフルートの酸すっぱい音を吹きたてたり、または気を変えるために、途切れがちにハーモニウムをかき鳴らしたりしていた。それがクリストフには面白くもあればうるさくもあつた——（日によつてその気持は違つた）。

それらの人々は、四方閉ざされた庭のついでる家の中で、世間の風に吹かれもせず、お

たがい同士も嚴重に戸を閉ざして、隣り合つて暮らしていた。ただクリストフだけが、膨張したくてたまらず生氣にあふれていたの、向こう見ずなしかも洞察的な広い同情の念で、彼らから知られないまに彼らを皆包み込んでいた。彼は彼らを理解してはいなかった。理解する方法がなかった。彼にはオリヴィエのような心理的知力が欠けていた。しかし彼は彼らを愛していた。本能的に彼らの地位に身を置いていた。すると徐々にある神秘的な作用で、それらの近いしかも遠い生活がぼんやり彼の心に映つてきた。喪に沈んでる女の深く淀んでる悲しみ、牧師やユダヤ人や技師や革命家などの傲慢な思想の隠忍な沈黙、アルノー夫妻の心を音もなく焼きつくしてゐる愛情と信念との蒼白い静かな炎、民衆の一人が光明にたいしていだいてゐる率直な憧憬、将校が胸に秘めてゐる抑圧された反抗心と無益な行動、リラの花陰で夢想してゐる若い女のあきらめきつた静安。それらの魂の無言の音楽は、クリストフだけが見通すことができた。彼らにはその音楽が聞こえなかった。彼はそれぞれ自分の悲哀や夢想のうちにとらわれていた。

もとより彼らは、懷疑家の老学者も、悲觀家の技師も、牧師も、無政府主義者も、すべてそれらの傲慢な者も失意の者も、皆働いていた。そして屋根の上には、屋根職人が歌つていた。

クリストフは家の周囲にも、すぐれた人々のうちに——彼らが団結してるときでさえ——同じ精神的孤立を見出した。

オリヴィエは自分が筆を執つてあるある小雑誌に、クリストフを関係さしていた。それはエゾープという雑誌で、標語としてモンテーニユの文を引用していた。

エゾープは、他の二人の奴隷とともに売りに出されぬ。買い手は第一の奴隷に何をなし得るやを問えり。奴隷はおのれの価値を高めんがために、山のごとき大事業をもと答えぬ。第二の奴隷もそれに劣らぬ大言を払えり。エゾープの番となりて、何をなし得るやを尋ねられしとき、彼は言いけり。——「この二人にすべてを取られたれば、われのなすべきことなし。二人のみにてすべてをなし得べし。」

それは、すでにモンテーニユが言つてるとおり、「知識を鼻にかけてる人々の厚顔さや法外な不遜さ」にたいする、蔑視的な反動の純な態度だった。雑誌エゾープの自称懷疑家は、実はもつとも鍛錬された信念の所有者だった。しかし一般の眼から見れば、その皮

肉の仮面は、もとよりあまり魅力をもたなかった。むしろ人を閉口させるに適していた。単純な明快な剛健な確実な生活の言葉を与えられるときにのみ、民衆は味方してくる。民衆は貧血せる真理よりも強健なる虚偽のほうを好む。懷疑主義が民衆の気に入るのは、それがあつた愚鈍な自然主義かキリスト教的偶像崇拜かを隠し持つてるときのみである。エゾープ誌がまつてゐる蔑視的な懷疑説は、その隠れたる堅固さを知つてゐる少数の人々——蔑視的なる魂——からしか耳傾けられることはできなかつた。その力は行動にとつては無役なものだつた。

彼らはそれを意に介しなかつた。フランスが民主的になればなるほど、その思想、その芸術、その学問は、ますます貴族的になるかの觀があつた。学問は、その特別な言葉の後ろに隠れ、専門家しか払いのけることのできない三重の幕に覆おおわれて、聖殿の奥にこもつてゐるので、ブユフォンや百料全書派アンシクロペディストのころよりもさらに近づきにくくなつてゐた。芸術——少なくとも、おのれを尊敬し美を崇拜してゐる芸術は——やはり同じく閉鎖的だつた。それは民衆を軽蔑してゐた。美よりも行動のほうを多く頭に置いてゐる作家らの間にも、美的觀念よりも道德的觀念のほうを重んじてゐる作家らの間にも、しばしば一種妙な貴族的精神がみなぎつてゐた。彼らは内心の炎を他人に伝えることよりも、自分のうちにその純

潔を保つことのほうを、より多くつとめてるかのようだった。あたかも、おのれの観念に勝利を得させることよりも、それをただ肯定することばかりを欲してゐるかのようだった。

けれども多数のうちには、大衆的な芸術に關係してゐる者もないではなかつた。そのもつとも真面目まじめなある者らは、自分の作品のうちに、無政府主義的な破壊的な観念や、遠い未來の真理などを投げ込んでいた。その真理も、一世紀後には、あるいは二、三十年後には、おそらくは有益なものとなるかもしれないが、しかし現在では、人の魂を腐食し焼きつけてゐるのみだつた。またある者らは、幻をもたないごく寂しい、苦にがい作や皮肉な作を書いてゐた。クリストフはそういう作品を読むと、二、三日は意氣沮喪そそろうする心地がした。

「君たちはこんなものを民衆に与えるのか。」と彼は尋ねた。幾時間か自分の不幸を忘れようとやって来るのにそういう悲しい娯樂を与えられる、それらの憐あわれな人々を、彼は氣の毒に思つたのだつた。「まるで民衆を地中に埋めるようなものじゃないか。」

「なに安心したまえ。」とオリヴィエは笑いながら答えた。「民衆はやって来やしない。」「当たり前さ。君たちは正氣の沙汰さたじゃない。民衆から生きる勇氣を奪つてしまおうともいうんだね。」

「なぜだい？ 民衆だつてわれわれと同じように、事物の悲しさを見てとりしかも落胆せ

ずに義務を尽くすということ、学ばなければならないじゃないか。」

「落胆せずにはだつて？ そりや疑問だ。ただ確かなのは、喜びなしにということだけだ。そして、人間の生の喜びを滅ぼしてしまうときには、そのままゆけるものじゃない。」

「ではどうすればいいのか。だれにも真理を偽る権利はない。」

「しかし、万人に向かつて真理を全部言つてきかせる権利もないのだ。」

「君がそんなことを言うのか。君はたえず真理を要求し、何よりも真理を愛してると言つてたくせに！」

「そうだ、僕にとつては、また、真理をにない得るだけ丈夫な腰をもつてる者にとつては、真理がいいのだ。しかしその他の者にとつては、それは一種の残酷であり馬鹿げたことだ。そうだ僕は今わかつてきた。国にいたらこんなことは頭に浮かびもしなかつたろう。あちらでは、ドイツでは、人は君たちのように真理にとつつかれてはしない。彼らは生きることにあまりに執着してる。用心深く見たいことだけを見ている。ところが君たちはそうでない。だから僕は君たちが好きなんだ。君たちは勇敢で、まっすぐに進んでゆく。しかし君たちは人間的でない。一つの真理を発見したと考えるときには、ちょうど聖書にある尻尾つぽねに火のついた狐きつねのように、その真理が世界じゅうに火をつけるかどうかはお構いなしに、

それを世界に放つてしまふ。君たちが自分の幸福よりも真理を取るのには、僕も尊敬するよ。しかし他人の幸福よりもとなると……よしてもらいたいなね。君たちはあまりに勝手すぎる。自分自身よりも真理を愛さなけりやいけないけれど、真理よりも隣人をいつそう愛さなけりやいけない。」

「では隣人に嘘をつかなくちやいけないのか。」

クリストフはゲーテの言葉で答えた。

『われわれはもつとも高い真理のうちで、世のためになり得るものをしか明言してはいけない。他の真理はそれをわれわれのうちにしまつて置くべきである。隠れたる太陽の柔らかな光のように、それはわれわれのあらゆる行為の上に照り渡るだろう。』

しかしそういう配慮は、それらのフランスの作家たちの心にほとんど触れなかった。彼らは自分の手にしてる弓が、「思想もしくは死」のいずれを放つか、あるいは両者をいつしよに放つかを、少しも問題としなかった。彼らは愛に欠けていた。自分がある観念をもつてるときには、それを他人にも課そうとする。観念をもたないときには、他人にももたせまいとする。そして、そういうことができないのを見てとるときには、行動の興味を失つてしまふ。フランスの優秀者らが、政治にあまり関係しないのは、それがおもな理由だ

った。彼らはおのおの、自分の信念のうちに、あるいは信念の欠乏のうちに、閉じこもつてばかりいた。

そういう個人主義を撲滅して彼らの間に種々の集団を作るために、多くの試みがなされてきた。しかしそれらの群れの多くはすぐに、文学的な討論会や滑稽こっけいな暴徒などに墮してしまった。すぐれた者はたがいに滅ぼし合った。多くの弱い善良な意志を結合して導くために生まれてる、力と信念とに満ちた卓越せる人々も存在していた。しかし彼らは各自におのれの群れをもつていて、それを他人の群れと一つにすることを同意しなかった。かくていつも少数の小雑誌や集会や結社のみであった。そしてそれらはあらゆる精神上の徳操をそなえてはいたが、ただ自己脱却の徳のみはもたなかった。なぜなら、いずれも他にたいして自我を通そうとばかりしていたから。かくして、数も少なく幸運はさらに少ない善良な人々の集まりのパン屑くずを、それらはたがいに奪い合いながら、貧血し飢餓してしばしの生命をつないでいた。そしてついには倒れてふたたび起たてなかつた。それも敵の鞭むちの下にはなく——（もつとも嘆くべきことには）——自分自身の鞭の下にであつた。種々の職業——文学者、劇作家、詩人、散文家、教授、教員、新聞記者——は多くの小さな部族をこしらえていて、それがまたさらに小さな部族に分かたれ、そのおのおのは門戸を閉

ざし合っていた。たがいに入りを許すことなどはさらになかった。フランスにおいては、何事にも全員一致というものがなかった。もしあれば、それはごくまれな場合にだけであつて、しかもそのときには、全員一致の性質が流病的なものとなり、そしてたいは、病的であるがゆえに誤つたものとなつた。個人主義がフランス人の活動のあらゆる方面に君臨していた。学術的な仕事におけると同じく、商業においても個人主義は、大商人らが結合して主人側の協定を作ることを妨げていた。この個人主義は充実したあふれきつたものではなくて、執拗しつような蟄居ちつきよ的なものだった。一人でいること、他人から負い目を受けないこと、他人に関係しないこと、他人に交じつておのれの劣等さを感じるのを恐れること、自分の尊大な孤立の静安さを乱さないこと、そういうのが、局外的雑誌や局外的芝居や局外的集団を作つてる人々の、内心の考えだった。雑誌や芝居や集団の存在の理由は、多くはただ、他人といつしよにいたくないという願い、共通の行為や思想のうちに他人と結合することの不可能さ、または、党派てきが的敵愾てきが心でないとするれば、もつともたがいに理解していい人々をもたがいに武装さして猜疑さいぎ心、などにすぎなかつた。

たがいに尊敬し合つてる精神の人々が、たとえば雑誌イソップにおけるオリヴィエやその仲間たちのように、一つの仕事に集まつてるときでさえも、彼らはいつてもたがいに警戒

し合つてゐるがようだった。ドイツではだれももっていてかえつて邪魔となりやすい開放的な朴^{ぼくとつ}訥さを、彼らは少しももっていなかった。イソップの青年の群れのうちには、ことにクリストフの心をひく者が一人（シャル・ペギー）いた。その男に例外的な力があることを見てとつたからである。それは一人の作家で、不撓^{ふとう}な理論と執拗な意志とをそなえ、道徳的な観念に熱中し、頑固^{がんこ}にその観念に奉仕し、そのためには全世界をも自分自身をも犠牲にするだけの覚悟をもっていた。その観念を擁護せんがために、ほとんど自分一人での一つの雑誌を設けて編集していた。純粹な勇壯な自由なフランスという観念を、ヨーロッパにまたフランス自身にいだかせようとみずから誓っていた。自分がフランス思想史中のもつとも勇敢なページの一つを書いてるのだということは、他日世界から認められると確信していた——そしてそれは彼の自惚^{うぬぼ}れでもなかった。クリストフはもつとよく彼を知りたがり、彼と交際をしたがった。しかしその方法がなかった。オリヴィエと彼とは、しばしば用があつたけれど、たがいに会うのはごくまれであつて、それもただ用件のためばかりだった。彼らは心のうちを少しも語り合なかつた。抽象的な意見を少しばかりかわすのがようやくだった。と言うよりもむしろ——（なぜなら、正確に言えば、意見の交換をすることはなくて、各自に自分の考えを胸中にしまつていたから）——彼らはいっしょに

なつて勝手に独白ばかりしていた。それでも彼らこそ、たがいの価値を知り合つてゐる戦友どもであつた。

そういう控え目なやり方には、彼ら自身でも見分けがたい多くの理由が存していた。第一には、各精神間のいかんともできない差異をあまりにはつきりと見てとる、過度の批評癖であり、それらの差異をあまりに重要視する、過度の理知主義であつた。生きんがために愛したがり満腔まんこうの愛を消費したがる力強い率直な同情心、その欠けることだつた。つぎにはまたおそらく、仕事の疲労、あまりに困難な生活、思想の熱烈さ、などであつた。そのために彼らは、晩になるともはや、親しい会談を楽しむだけの力がなかつた。最後には、フランス人としては告白するのが恐ろしい、しかも心の底にしばしば唸うなっている、同民族の者でない、という恐ろしい感情であつた。われわれは異なつた民族の者であり、異なつた時代にフランスの土地に居を定めた者であつて、一つに結合しながら、共通の思想をもつこと少なく、しかも共同の利益のためにそのことをあまり考へてはいけな、という恐ろしい感情であつた。そしてまた何よりも、自由にたいする熱狂的な危険な情熱であつた。人はそれを一度味わうと、何物をも犠牲にして顧みなくなる。そしてその自由な孤独境は、多年の困難によつて購あがなわれたものだけに、いつそう貴重なものとなつてゐる。優

秀な人々は、凡人らから奉仕されるのをのがれんがために、その中に逃げ込んでゐる。それは実に、宗教や政治上の集團の重圧、フランスにおいて個人を押しつぶしてゐる巨大な重み、すなわち、家庭、世論、国家、秘密結社、党派、徒党、流派、などの暴虐にたいする反動である。たとえば、脱獄せんがためには十重二十重の壁を飛び越えなければならぬ囚人を、想像してみるがよい。その囚人が、首の骨も折らず、最後までやりとおすとすんならば、彼はきわめて強者だと言わなければならぬ。それは自由な意志にたいする手荒い鍛錬である。しかし一度それを通り越した人々は、そのきびしい氣質を、独立の性癖を、他人の魂と融け合うことの不可能性を、生涯失うものではない。

傲慢ごうまんによる孤立のほかになお、断念による孤立があつた。フランスにおいてはいかに多くの善良な人々が、その温情と矜持きやうぢと愛情とのあまり、人生から隠退するにいたつてることだろう。あるいは良きあるいは悪き多くの理由が、彼らの活動を妨げていた。ある人々にあつては、それは服従や臆病おくびょうや習慣の力などであつた。またある人々にあつては、それは、世間体、人に笑われる恐れ、人の眼をひき人に批判され、公平な行為を私心ある動機に帰せられる恐れ、などであつた。ある者は政治的社会的な戦いに加わることを欲せず、ある者は博愛事業から顔をそむけていた。なぜなら彼らは、良心と良識をもた

ずにそういうことに従事してゐる者があまりに多いのを見るからであり、自分もそれらの偽ぎ
 瞞まん者や馬鹿者どもと同視されはすまいかを恐れるからであつた。厭いや気、疲労、行動や苦痛
 や醜悪や愚劣や危険や責任にたいする恐れ、また、現今多くのフランス人の誠意を滅ぼし
 てる、なんの役にたつものかという恐ろしい觀念、などがほとんどすべての者のうちにあ
 つた。彼らはあまりに知的——（広い羽ばたきをもたない知力の者）——であり、賛成と
 不賛成とのあらゆる理由を見てとつてゐる。力に乏しく、生氣に乏しい。人はきわめてよ
 く生きてるときには、なにゆえに生きてるかを問わないものである。生きるがために生き
 てるのである——生きることは素敵なことであるがゆえに！

終わりに、同情すべき普通のあらゆる性質がいつしよになつて、すぐれたる人々のうち
 に宿つていた。穏和な哲学、欲望の節度、家庭や土地や道徳的習慣などへのやさしい執着、
 慎がみ、我を通し他人を邪魔することの恐れ、感情の貞節さ、常住不断の控え目、などがあ
 つた。すべてそれらの愛すべき美うわしい特質は、ある場合においては、清明な心境に、勇
 氣に、内心の喜悦に、よく調和することができていた。しかしそれらはまた、フランス人
 の貧血に、活力の漸ぜん減げんに、關係がないではなかつた。

クリストフとオリヴィエとが住んでる家の下のほう、四方壁に取り巻かれた底にある、優雅な庭は、かかるかわいいフランスの象徴であった。それは外部の世界に戸を閉ざして緑のいちくわう一隅だった。ただときどき、外部の大きな風が、渦巻うずきながら吹きおろしてきて、夢想してる若い娘に遠い畑地と広い土地との息吹いぶきをもたらしてくるのだった。

今やクリストフは、フランスの隠れたる源泉を瞥べっけん見し始めたので、フランスが下劣な者どものために圧迫されるままになつてのを、憤慨せずにはいられなかつた。その黙々たる優秀者らが潜み込んでる薄明の境は、彼には息苦しかつた。堅忍主義は、もう齒し牙がを失つてる人々にはよいことである。しかし彼は、戸外の空気を、大なる公衆を、栄光の太陽を、幾多の魂の愛を、おのが愛する者をすべて抱きしめることを、敵を粉碎しつくすことを、戦いそして征服することを、必要としていたのであつた。

「君にはそれができる。」とオリヴィエは言った。「君は強い。君は征服するようになっている。それは君の長所から来るとともに——（失礼だが）——欠点からも来ている。君は仕合わせにもあまりに貴族的な民衆に属してはいない。活動を君は厭いやがりはしない。君は必要によつては、政治家となることさえできるだろう……。それにまた、君は作曲と

いうこの上もない仕合わせな能力をもっている。人にはわからないから、君はなんでも言うことができる。君の音楽のうちにある世人にたいする軽蔑けいべつや、世人が否定してものなたいする信仰や、世人が滅ぼさんとつとめてるものなたいする絶えざる賛歌などを、もし世人が知り得たら、世人はけつして君を許してはおかないだろう。君は彼らから邪魔されつきまとわれいらだたせられて、彼らと戦うことに最善の力を費やしてしまうだろう。彼らに打ち克かつときには息が切れて、もう自分の仕事を完成することができないだろう。君の生命はそこに終わってしまうだろう。偉人が勝利を得るのは、世人から誤解されるおかげによってである。人は偉人をその真相と反対の点から賞賛するのだ。」

「ふふん！」とクリストフは空うそぶいた。「君たちは自国の大人物どもの怯懦きようだを知らないのだ。僕は初め君一人が知らないのだと思っていた。君が行動しないのを許していた。しかし実際では、君たちは皆同じ考えをもってる連中なのだ。君たちは君たちを圧迫してゐる者どもより、百倍も強く、千倍も価値があるのに、彼らの厚顔さから圧迫されてばかりゐる。僕には君たちの心がわからない。君たちはもつとも美うるわしい国に住み、もつともみごとな知力をそなえ、もつとも人間的な官能をそなえながら、その用途を知らず、一群の下劣な者どものために、支配され侮辱され蹂躪じゅうりんされ躪うされるままになっている。ああどうか、

君たち本来の面目に返つてもらいたい。天に助けられることを、あるいはナポレオンの出現を、待つていてはいけない。起ちたまえ、団結したまえ。皆仕事にかかるんだ。家を掃除するんだ。」

しかしオリヴィエは、肩をそびやかしながら、皮肉な倦^{けんたい}怠^{たい}の様子で言った。

「あんな奴^{やつ}らとつかみ合えと言うのか？ いや、それはわれわれの役目じゃない。われわれにはもつとよい務めがあるのだ。暴力を僕はきらいだ。僕は暴力の結果をあまりによく知りすぎてる。酸敗^{そうまい}し老^{ろう}耄^{もう}した落伍^{らくご}者^{しや}ども、王党の若小な痴人^{ちじん}ども、残忍と憎悪^{ぞうお}とに満ちた忌むべき宣伝者ども、すべてそういう奴らが僕の行為を奪つて、それを汚してしまおうだろう。君は僕に、古い憎悪の標語を、出て行け野蛮人ども！ あるいはフランスをフランス人に！ という標語を、ふたたび奉ぜさせたいのか。」

「なぜそれがいけないんだ？」とクリストフは言った。

「いけない。それはフランス人の言葉ではない。それに愛国心の色をつけてわれわれのうちに広めようとするのは、無駄^{むだ}な努力だ。野蠻な国にはいいだろう。だがわれわれの祖国は、憎悪のためにできてはしない。われわれの天稟^{てんびん}の精神が自己を肯定するのは、他を否定したり破壊したりすることによつてではなく、他を吸収することによつてである。何

物でももつて来るがいい、混濁せる北方でも饒舌な南方でも……。」

「そして有毒な東方もか？」

「有毒な東方もだ。われわれはそれをも他のものと同様に吸収してみせる。われわれはすでに多くのものを吸収してきたのだ。東方の勝利顔な様子を、またわが同種族のあるもの意気地なさを、僕は笑ってやりたい。東方はわれわれを征服したことと思ひ、われわれの大通りで、われわれの新聞雑誌の中で、われわれの演劇舞台や政治舞台の上で、威張りちらしている。馬鹿な奴だ。実は東方こそ征服されてるのだ。東方はわれわれの養分となつた後に、やがてみずから排泄はいせつされてしまふだろう。ゴールの国は丈夫な胃袋をもつてるのだ。二十世紀間のうちに、一つならずの文化を消化しつくした。われわれは毒にも堪えることができる……。恐れるのは君たちドイツ人にはいいだろう。純粹であるかもしくは存在しないか、そのいずれかが君たちの道だ。しかしわれわれフランス人にとっては、純粹は問題ではない。世界的ということが問題なのだ。君たちは皇帝をもつてるし、大ブリテンは帝国だと自称してる。しかし事実において、わがラテン精神こそ帝王的なのだ。われわれは世界市の市民である。ローマと世界とにまたがる者である。」

「国民が壮健で気力盛んな間は、それもうまくゆくだろう。」とクリストフは言った。

「しかしいつかはその精力が衰えてくる。すると国民は、そういう外来の流れに沈められる恐れがある。君との間だけの話だが、もうそういう日がやって来てるようじゃないか。」

「そんなことは、幾世紀も前からたびたび言われてきた。だがいつもわが国の歴史はその恐れを打ち消してしまったのだ。人なきパリおおかみに狼の群れが彷徨ほうこうしていたあのオルレアンの少女の時代この方、われわれは他の多くの困難をきりぬけてきたのだ。現時の、不道徳の跳梁ちようりよう、快樂の追求、懦弱だじやく、無政府状態、などを僕は少しも恐れない。忍耐だ！

持続せんと欲する者は堪え忍ばなければならない。僕はよく知ってる、このつきには道徳的な反動が起こってくるだろう！ がそれももとより、ずっとよいものではないだろうし、おそらくは同じようなくだらぬものに帰着するだろう。今日一般の腐敗に生きてる奴らこそ、その反動をもつとも騒々しく導くだろう。……しかしそんなことはわれわれにとつてはどうでもいいのだ。それらの運動は真のフランス民衆に触れはしない。果実が腐っても親木は腐りはしない。腐った果実は地に落ちるだけだ。そのうえ、そういう連中は国民としてはわずかな部分だ。彼らが生きようと死のうと、われわれにはなんらの痛痒つうようもない。彼らに反して徒党を結んだり革命を起こしたりすることに、なんで僕は働くものか。現在の病弊はある何かの制度から起こったものではない。それは、贅沢ぜいたくにとりつく

天刑病であり、富と知力とにたかる寄生虫だ。やがて滅びてしまふだろう。」

「君たちを食い荒らしたあとにね。」

「いや僕らのような民族については、絶望ということは許されないので。この民族は自分のうちに、一つの大なる徳操を隠し持っており、光明と活動的理想主義との大なる力を隠し持っているのです、この民族を利用し廢滅せしめようとする者どもをも感染さしてしまうのだ。貪欲どんよくな政治家どもでさえこの民族に眩惑げんわくされる。もつとも凡庸な者どもも権力を得るときには、この民族の運命の偉大さにとらえられる。その運命は彼らを彼ら以上の所へ引き上げる。彼らの手から手へと炬火きよかを受け継がせる。彼らは相次いで、闇黒あんこくにたすける神聖な戦いをなしてゆく。彼らの民衆の精神に引きずられる。否応なしに彼らは彼らが否定してる神の掟おきてを、フランス人によって神がなしたもう行為を、完成してゆく……。親愛なる国、親愛なるこの国、僕はけつしてそれを疑わないだろう。この国が致命的な困難に際会しようとも、そのために僕はますます、世界におけるわれわれの使命をあくまで慢りほろつづけるだろう。わがフランスが戸外の空気を恐れて病室に蟄居ちつきよすることを、僕は少しも望まない。病苦の生存を長引かせることを僕は好まない。われわれのように一度偉大となった暁には、偉大でなくなるよりもむしろ死ぬほうがよいのだ。世界の思想をわれ

われの思想界に飛び込ませるがいい。僕はそれをけつして恐れぬ。洪水の波は、その泥土でわれわれの土地を肥やしたあとに、自分からくずれ去るだろう。」

「だが気の毒にも、そうなるまでの間は面白いことじゃない。」とクリストフは言った。

「そして、君のフランスがナイル河から浮かび出してくる時分には、君はいつたいどうなつてゐるだろうか。戦うほうがいいじゃないか。戦つたとて敗北の危険しかないだろう。」

君はすでに生涯敗北に甘んじてゐるじゃないか。」

「いや敗北よりもずっと大きな危険があるかもしれない。」とオリヴィエは言った。「おそらく精神の安静を失う危険があるだろう。僕には勝利よりも精神の安静のほうが大事なのだ。僕は人を憎みたくない。敵をも正當に判断したい。熱情のうちにもなお眼の明晰さをもつていたく、すべてを理解しすべてを愛したいのだ。」

しかしクリストフは、そういう生から遊離した生にたいする愛は、死にたいする忍従と大差ないもののように思われた。彼は自分のうちに、老エンペドクレスのように、憎悪と憎悪の兄弟たる愛との賛歌が、土地を耕し種まく生産的な愛が、とどろくのを感じていた。彼はオリヴィエの冷静な宿命觀をもち合わせていかなかったし、また、少しもおのれを防御

しない一民族の持続をオリヴィエほど信じてはいなかったので、国民のあらゆる健全な力の行使を、フランス全体の正しい人々の一いっせい齊の奮起を、促したく思っていた。

ある一個の存在については、それを数か月観察するよりも一瞬間愛することによつて、より多くを知り得るものである。クリストフは、ほとんど家から出ないでも、オリヴィエと一週間ばかり親しく暮らすと、一年間もパリをうろつき回つたり、学術的な政治的な客間に注意深く臨席したりしたあとよりも、フランスについて知るところが多かつた。彼が途方にくれたその一般的無秩序のまん中において、友人オリヴィエの魂は、まったく

「フランス島」——海洋のまん中にある理性と静穏との小島——のように思われた。オリヴィエのなかにある内心の平和は、それがなんらの知的支持をもたなかつただけに——彼の生活状態が困難だつただけに——（彼は貧乏で孤独だつたし、彼の国は頽た廢はいして居ようだつた）——彼の身体が弱々しく病的で神経に支配されていただけに、いつそうクリストフの心を打つた。その静穏は、意志の努力から得られたものとは思えなかつた——

（彼は意志をあまりもつていなかった）——それは彼の一身と彼の民族との深いところから来たものだつた。オリヴィエの周囲の多くの者のうちにも、そういう沈着の遠い光を——

―「不動の海の黙々たる静けさ」を――クリストフは認めた。そして彼は、自分の魂の騒々しい混濁した奥底を知っていたし、自分の力強い天性の平衡を維持するためには、意志のあらゆる力を用いなければならぬことも知っていたので、そういう内に秘められて心の調和を感嘆した。

隠れたるフランスをながめてみて、フランス人の性格に関する彼のあらゆる考えは、くつがえされてしまった。彼の眼に映ったものは、快活な社交的な無頓着な花やかな民衆ではなくて、自己中心的な孤立した精神の人々であった。彼らはあたかも輝いた雲霧に包まれてるように、樂觀主義の外観に包まれてはいたが、しかし深い静穏な悲觀主義のうちに浸っていて、一定の觀念にとらわれ、知的熱情にとらわれていて、変化させるよりもむしろ破壊するほうがやさしいほどの確固不動な魂の人々だった。それはもちろん、フランスの優秀者らの一部分にすぎなかった。しかしクリストフは、彼らがどこからそういう堅忍と信念とを汲み取って来たかを怪しんだ。オリヴィエは彼に答えた。

「敗北の中から汲み取ってきたのだ。クリストフ、君たちドイツ人がわれわれを鍛えてくれたのだ。ああそれは苦しくないことはなかった。眼前に死滅をながめてき、武力の暴虐な威嚇が常にのしかかっているのを感じてる、辱しめられ傷つけられたフランスにおいて、

いかなる暗澹たる雰囲気の中にわれわれが生長したかは、君たちには想像もつくまい。われわれの生命、われわれの精神、われわれのフランス文明、十世紀の間得ていた偉大さ——それらのものが、それを少しも理解せず、それを心の底では憎悪し、それをいつでも永久に粉碎しつくし得る、暴戾な征服者の掌中にあることを、われわれは知っていた。そしてそういう運命を守って生きなければならなかった。思ってもみたまえ、フランスの少年らは、敗北の影たちこめた喪中の家に生まれ、意気沮喪した思想に養われ、血腥い宿命的なそしておそらく無益な復讐のために育てられたのだ。というのは、彼らはいかにも幼少ではあったけれど、彼らが意識した第一のことは、正理がないということ、この世に正理がないということだった。力が権力を圧倒するということだった。そういう発見が子供の魂を永久に毀損したのだ、もしくは生長させたのだ。多くのものは自棄になつてしまった。彼らはみずから言った。『こうしたものだとするれば、戦つてなんのためになろう？ 活動してなんのためになろう？ くだらないことはくだらないんだ。考えないようにならう。享樂しよう。』——しかし抗争した者たちは、熱火にも堪え得るのだ。いかなる幻滅も彼らの信念を害し得ない。なぜなら、最初から彼らは、自分の道は幸福の道と通ずる点は少しもないこと、それでも選択の余地はなく、ただその道を進まねばなら

ないこと、他の道では息がつけられないこと、それをよく知っていた。が人は初めからそういう確信に達するものではない。十四、五歳の少年でそれに達せられるものではない。それ以前に、多くの苦悩をなめ、多くの涙を流すものだ。しかしそれでこそよいのだ。そうなければならぬのだ……。

おう信念よ、鋼鉄の処女よ……

なんじやり

汝の鎗もて耕せ、蹂躪せられし民族の心を……。」

クリストフは黙つてオリヴィエの手を握りしめた。

「クリストフ、」とオリヴィエは言った、「君らドイツは、われわれをひどく苦しめたのだ。」

クリストフは、自分がその原因でもあったかのようにほとんど謝らうとした。

「なに心配するには及ばない。」とオリヴィエは微笑みながら言った。「ドイツがみずから知らずにわれわれにくれた善は、その悪よりも大きいのだ。われわれの理想主義をふたたび燃えさせたのは君たちであり、われわれのうちに学問と信念との熱をふたたび

高めさせたのは君たちであり、わがフランスの至る所に学校を設けさせたのは君たちであり、パストールの、あの五十億の償金をつくのうほどの発見をなしたパストールのような創造力を、刺激してくれたのは君たちであり、われわれの詩や絵画や音楽を復興させたのは君たちである。君たちのおかげでわが民族の意識は覚醒かくせいしたのだ。幸福よりも自己の信念のほうを取るためになさなければならなかった努力に、われわれはよく報いられた。なぜなら、われわれは世界一般の無気力のうちにあつて、大なる精神力を感得して、もはや勝利をさえも疑わなくなっているのだ。君が見るとおりわれわれはいかにも少数ではあるけれど、また外観上いかにも微弱ではあるけれど——大洋のごときドイツの力に比すれば水の一滴にすぎないけれど——しかもわれわれは、大洋全部を染め得る一滴であると自信しているのだ。マケドニアの一隊の武士がヨーロッパ平民の群がり立つ軍勢を突破するようなことも、起こるかもしれないのだ。」

信念に輝いた眼つきをしてる病弱なオリヴィエを、クリストフはながめた。

「憐あわれな小さな虚弱なフランス人たち、君たちのほうがわれわれよりもずっと強い。」

「仕合わせな敗北なるかなだ！」とオリヴィエは繰り返した。「讃ほむべき災害なるかなだ！われわれは災害を否認しはしない。われわれはそれから生まれた児である。」

二

敗北は優秀者らを鍛え、魂の選り分けをする。それは強い純粹な者だけを別になし、それをいつそう強く純粹になす。しかしそれは他の者らの滅落を早め、もしくはその氣勢をくじく。それゆえに、倒れかかっている大部分の民衆と、歩きつづけてる優秀者らとを、分け隔てる。優秀者らはそのことを知っており、そのことを苦しんでいる。しかしもともと勇敢な人々のうちにも、あるひそかな憂鬱ゆううつが、自己の無力と孤立との感情が、存在している。そしてもともいけないことには、彼らはその民衆の本体から離れながら、また彼ら相互も離れ離れになっている。各自が自分自分のために戦っている。強い者らは自分の身を救うことばかりを考えている。おう人間よ、汝自身を助けよ！……という雄々しい格言は、おう人間らよ、たがいに助け合え！ という意味であることを、彼らは考えてもみない。信頼の念、同情のあふれ、一民族の勝利から来る共同動作の要求、充実の感情、絶頂に達せんとする感情、などがすべての人に欠けている。

クリストフとオリヴィエとは、そのことを多少知っていた。彼らを理解し得る魂に満ちてるこのパリーの中で、未知の友人らが住んでるこの家の中で、彼らはアジアの沙漠さばく中にいると同じくらいに孤独だった。

彼らの境遇はつらかった。生計の道がほとんどないとも言っていないほどだった。クリストフは、ヘヒトから頼まれた音楽上の模作や改作の仕事をもってるきりだった。オリヴィエは、軽率にも学校の職を辞してしまっていた。それは姉の死以来意気沮喪そそうしてしまい、ナタン夫人の連中の間である悲しい恋愛の経験をしたために、さらに落胆した時期だった。——（彼はその恋愛についてクリストフへかつて話さなかった。なぜなら、自分の苦しみを恥ずかしがっていたから。そして、もつとも親しい者にたいしてまで、いつも内心に多少の秘密をもつてること、それがまた彼の魅力の一つの原因となるのだった。）——沈黙に飢えてるそういう精神疲憊ひはいの状態にあつては、教師の職務は堪えがたくなつたのだった。この職業では、虚勢を張り思想を高言しなければならぬし、けつして一人きりでいることがないので、それにたいして彼はかつて趣味がもてなかつた。中学の教師としては、何かある高尚さをもつために、伝道師的な氣質が必要だった。がオリヴィエはそういう氣質

を少しもたなかつた。大学の教師としては、たえず公衆と接触することを余儀なくされた。がオリヴィエのように孤独を愛する魂にとつては、公衆との接触は痛ましいことだった。オリヴィエは二、三度公衆の前で話さなければならなかつた。彼はそれについて妙な屈辱を感じた。高い壇の上で見世物となることが嫌いやでたまらなかつた。彼は聴衆を見物し、あたかも触角できるように聴衆を感知し、聴衆の大部分は憂うれ晴らしを求めてるだけの無為の徒からなつてることを知つた。そして公々然と人の慰みになるような役目は、彼の趣味に合わなかつた。それからことに、演壇の上から発する言葉は、思想を變形してしまうものである。よほど注意しないとその言葉は、身振りや語調や態度や思想表白の方法などのうちに——氣持のうちにさえも、ある一種の道化味をしだいに導き入れる。講演というもの、退屈な喜劇と世俗的な物知り顔、その二つの暗礁の間を行き来する種類のものである。敷石の見知らぬ無言の人々の面前における、その声高な独自の形式、万人に向くはずであつてしかもだれにも似合わない、その出来合いの着物、それは、多少人馴なれない高慢な芸術家氣質にとつては、ひどく間違つたものと思われる事柄である。オリヴィエは、自分自身に沈潜して自分の思想の完全な表現のみをしか口にしたくない欲求を感じていたので、ようやくにして得た教師の職をも擲なげうつてしまった。そして、彼の夢想的傾向を止める

べき姉もいなくなっていたので、彼は筆を執り始めた。芸術的な価値がありさえすれば、別にその価値を人に認められようと努力せずともかならず認められるものだと、率直に考えていた。

ところが彼はその夢から覚めさせられた。何一つ発表することができなかつた。彼は自由を熱愛していたので、すべて自由をそこなうものを嫌悪して、自分一人離れて生きていた。あたかも、たがいに対抗団結を作つて国土と新聞雑誌とを分有する、政治的諸教会の岩石の間に生えてる、空気の欠乏した植物に似ていた。また同様に彼は、あらゆる文学的党派から離れ見捨てられていた。文学者仲間に一人の友人もなかつたし、友人のありようがなかつた。彼はそれらの知的な魂の冷酷さや無情さや利己主義に悩まされた——（ただほんとうの天稟てんびんに導かれてる者や熱心な学術的研究に没頭してる者など、ごく少数の人々については例外だつた。）頭脳——小さな頭脳をもつてるときに——頭脳のために心を萎縮いしゆくさせた者こそ、悲しむべきである。温情は少しもなく、鞞さやに納めた短刀のような知力があるのみである。われわれはその知力にいつ喉のどを刺されるかわからない。不斷に武装していなければならぬ。自分の利益のためにではなしに美しいものを愛する善良な人々——芸術界の外部に生きてる人々、などにしか友情の可能性はない。芸術界の空気は大多

数の者には呼吸できない。生命の泉たる愛を失わずにそこに生きることができるとは、ただきわめて偉大なる人々のみである。

オリヴィエはただ自分一人を頼りにするのはかはなかつた。それはごく心細い支持だった。彼にはあらゆる奔走がつかつた。自分の作品のために身を屈したくはなかつた。阿諛あ的な追従ついでを見ると恥ずかしかつた。たとえば、知名な劇場支配人は、青年作家らの卑怯ひきようさに乗じて、召使にたいするよりもひどい態度を示していたが、それに向かつて彼らは、やはり卑しい阿諛を事としていた。オリヴィエには、たとい生活問題に関するときでもそういうことができなかつた。彼は自分の原稿を、劇場や雑誌の事務所に、郵送するか置いてくるかだけだった。その原稿は幾月も読まれないで放っておかれた。ところがあつた日彼は偶然に、中学時代の古い同窓の一人に出会つた。愛すべき怠惰者なまけものだったが、オリヴィエからいつも親切にたやすく宿題を作ってもらつたことがあるので、今でもなお深い感謝の念を失わずにいた。文学のことは何にも知らなかつたが、はるかに好都合なことには、文学者らに知人をもつていた。そして、金持で俗人だったので一種の見栄坊みえぼうから、内々文学者らの利用するところとなつていた。その男が自分の出資してある大雑誌の幹部へ、オリヴィエのために一言口をきいてくれた。するとただちに、オリヴィエの埋もれ

た原稿の一つが掘り出されて読まれた。そして多くの躊躇ちゅうちよの後——（なぜなら、その作はある価値をもつてゐるらしかったが、作者の名前は世に知られていないのでなんらの価値ももつていなかった）——ついに採用されることとなった。オリヴィエはその吉報を聞くと、もうこれで心配は終わったと思つた。しかしそれは心配の始まりだった。

パリーでは、作品を受諾してもらふことは比較的たやすい。しかし作品を発表してもらふことは別事である。編集者らを機嫌きげん取つたりうるさがらせたり、それら小さな君王らの前にときどき伺候したり、自分が存在してゐることや必要なときにはいつでも困らしてやる決心でゐることを彼らに思い出さしたりする、という才能を知らないときには、幾月も、場合によつては一生でも、待ちに待たなければならぬ。ところがオリヴィエは自分の家に閉じこもつてゐることしか知らなかつた。そして待ちくたびれてしまつた。たかだか手紙を書くくらいなものだったが、それにはなんの返事も来なかつた。いらいらしてもう仕事も手につかなかつた。それは馬鹿げたことではあつたが、理屈ではどうにもならなかつた。彼はテーブルの前にすわり、落ち着かない悩みに沈んで、郵便の来る時間時間を待ちくらした。室から出て行つては、下の門番のところにある郵便箱に希望の一瞥べっを投げたが、すぐに裏切られてしまふのだつた。散歩に出ても何にも眼にははいらず、もどつて来ること

ばかり考えるのだった。そして、最終便の時間が過ぎてしまうとき、室の中の静けさを乱すものは頭の上の鼠ねずみどもの荒々しい足音ばかりとなるとき、彼は編集者らの冷淡さに息づまる心地がした。一言の返事、ただ一言！ それだけの恵与をも拒まれるのであろうか？ けれども、それを彼に拒んだ者のほうでは、彼をどれだけ苦しめてるかは夢にも知らないでいた。人はそれぞれ自分の姿によつて世界をながめるものである。心に生氣のない人々は世界を乾燥しきつたものと見る。そして彼らは、年若い人々の胸に湧わき立つ期待や希望や苦悶くもんのおののきを、ほとんど思つてもみない。もしそれを思いやるとしても、飽満した身体の鈍重な皮肉さで、それを冷淡に批判してしまう。

がついに作品は発表された。オリヴィエはあまりに待たされたので、もうなんらの喜びをも感じなかった。それは彼にとつては死物だった。それでも彼は、それが他人にとつてはなお生命あることを期待していた。その中にこもつてゐる詩や知力の閃ひらめきは、認められずに終わるはずはなかった。ところがその作品はまったく沈黙のうちに葬られた。——オリヴィエはその後になお、一、二の論文を発表した。しかし彼はいずれの流派にも属していなかった。やはり同じような沈黙に、なおよく言えば、敵意に出会った。彼はさらに合点がいかなかった。たといそれほどよくないものであろうともすべて新しい作品にた

いしては、好意を寄せるのが各人の自然の感情であると、彼は単純に考えていた。多少の美を、多少の力を、多少の喜びを、他人にもたらそうと欲した者に、人は感謝すべきである。しかるに彼は、冷淡もしくは誹謗ひぼうにばかり出会った。それでも、自分が書いた事柄を感じてるのは自分一人ではないこと、他にもそのことを考えてる人たちがいることを、彼は知っていた。しかし、それらりっぱな人たちは彼の作を読んではくれないこと、文学上の意見などには少しもたずさわらないことを、彼は知らなかった。二、三人の人が彼の書いたものを眼にとめて、彼と同感してくれることがあるとしても、けっして彼らはそれを彼に言いはしないだろう。彼らはその沈黙のうちに平然と澄まし込んでいた。選挙に投票しないと同様に、芸術に関与することを控えていた。気分を乱されるので書物を読まなかったし、嫌いやな思いをさせられるので芝居へ行かなかった。そして、反対者どもが投票したり、反対者どもが選ばれたり、または、厚顔な少数者のみを代表してる作品や観念が、恥ずべき成功をしたり仰山な広告をしたりしても、彼らはそのまま放っておいた。

オリヴィエは、精神上同民族たるべき人々から知られていないので、彼らを当てることのできなかつた。そして敵軍の掌中に陥つてるのを知った。多くは彼の思想に敵意をもつてる文学者や、その命を奉じてる批評家などばかりだった。

彼らとの最初の接触到、彼は血を絞らるる思いをした。老ブルックナーは、新聞雑誌の意地悪さにひどく苦しめられて、もう自作の一編をも演奏させたがらなかったが、それと同じくらいにオリヴィエは、批難にたいして敏感だった。彼は、昔の同僚たる大学の職員らからさえも、支持されなかった。彼らはその職務のおかげで、フランスの精神的伝統にたいするある程度の知覚をなもつていて、オリヴィエを理解し得るはずだった。しかしそういうりっぱな人々も一般に、規律にたわ擾められ、自分の仕事に心を奪われ、仕甲斐しがいのない職業のためにたいは多少とも苛辣からつになつていて、オリヴィエが自分らと異なつたことをやりたがるのを許し得なかった。善良な官吏として彼らは、才能の優越が階級の優越と調和するときには、才能の優越を認めながらない傾向をもつていた。

そういう事態にあつては、三つの手段しかあり得なかった。暴力をもつて抵抗をうち砕くこと、讓歩して屈辱的な妥協をなすこと、あるいは、あきらめて自分のためにばかり書くこと、オリヴィエには、第一の手段も第二の手段も取り得なかった。彼は第三の手段に身を託した。彼は生活のために厭いやいや々ながら出稽古でげいこをし、そのかたわら、筆を執つた。その作品は大氣のうちに花咲く望みがなくて、色褪あせてき、空想的な非現実的なものとなつていった。

そういう薄明の生活のまん中に、クリストフが暴風雨のように落ちかかってくるのだ。人々の賤劣せんれつさとオリヴィエの気長さとに、彼は腹をたてた。

「いったい君には血の気がないのか。」と彼は叫んだ。「そんな生活をどうして我慢できるのか。あんな畜生どもよりすぐれてることを自分で知っていながら、手向かいもせずに踏みつぶされるままになってるじゃないか。」

「ではどうせよと言うのか。」とオリヴィエは言った。「僕には身を守ることができないのだ。軽蔑けいべつしてる奴やつらと戦うのは厭いやなんだ。向こうでは僕にたいしてどんな武器でも用うるにきまつてる。そして僕にはそんなことはできはしない。僕は彼らのような不正な方法に頼ることが厭なばかりでなく、彼らを害するのも心苦しいのだ。僕は子供のときには、ばかばかしく仲間からなぐられてばかりいた。卑怯ひきょうもの者だと思われ、拳固げんこを恐こわがつてるのだと思われていた。けれどなぐられるよりも人をなぐるほうがずっと恐かったのだ。腕白者の一人にいじめられたある日、だれかにこう言われた。『一遍うんとやつつけて片をつけてしまえ。彼奴あいつのどてっ腹を蹴破けやぶつてやれ。』ところがそれが僕には非常に恐かった。そんなことをするよりむしろなぐられているほうがよかった。」

「君には血の気がないんだ。」とクリストフは繰り返した。「その上に、始末に終えない

キリスト教的観念ときてる……。教理問答だけになつてゐるフランスの宗教教育、去勢された福音書、無味乾燥な骨抜きの新約書……いつも眼に涙を浮かべてゐる人気取りの人道主義……。だが、大革命、ジャン・ジャック・ルソー、ロベスピエール、一八四八年、おまけにユダヤ人ども、などを見たまえ。血のたれてゐる旧約書の一部でも、毎朝読んでみるがい。」「

オリヴィエは抗弁した。彼は旧約書にたいして生来の反感をもつてゐた。その感情は、絵入聖書をひそかにひらいてみた子供のときからのものだった。その聖書は田舎いなかの家の書庫にあつたもので、だれも読んだ者がなかつた。——（子供には読むことが禁じられてさへいた。）——が禁ずるにも及ばなかつた。オリヴィエは長くその書物を手にしてはいらなかつた。彼はいらだち悲しくなつて、すぐにそれを閉じてしまった。そのあとで、イリアスやオデュッセイアやまたは千一夜物語などに読みふけて、ようやく安心するのだった。

「イリヤードの中の神々は美しい力強い不徳な人間である。僕にはよく理解できる。」とオリヴィエは言つた。「僕はそれらを愛するか愛しないかだ。愛しないときでさえなお愛してるとも言える。まったく惚ほれ込んでゐるのだ。パトロクレスとともに血まみれのアキレ

スの美しい足には接吻せつぷんしたい。しかし聖書バイブルの神は、偏執狂の老ユダヤ人で、恐ろしい狂人で、いつも怒号し威嚇いかくし、怒つた狼おおかみのようにわめきたて、雲の中で逆上している。僕には理解できないし、愛せられもしない。その永遠の呪いのろを見ると頭が痛くなるし、その獐猛どうもうさを見ると恐ろしくなる。

モアブにたいする裁断さいはき、

ダマスカスにたいする裁断、

バビロンにたいする裁断、

エジプトにたいする裁断さいはき、

海原さいはくの沙漠さばくにたいする裁断、

幻象まぼろしの谷やにたいする裁断……。

「それはまったく狂人だ。自分一人で審判者と検察官と死刑執行人とを兼ねてると思い、その獄屋の中庭で、花や小石にたいして死刑の宣告をしている。その書物を虐殺の叫びで満たしてる憎悪の執拗しつようさには、あきれるのほかはない……。

破滅の叫び……その叫びの声はモアブの全地に響き渡る。彼の怒号の声はエグライムにまで達す。彼の怒号の声はペーリムにまで達す……。

「そして彼は、殺戮さつりくの間に、踏みつぶされた子供や強姦ごうかんされ腹を割きかれた女などの間で、ときどき休息する。そして、都市を略奪して食卓についてるヨシユアの軍卒のように、彼はうち笑う。

しかして軍勢の主君は、脂肪あぶらこき肉の、柔らかき脂肪肉あぶらみの馳走ちそう、古き葡萄酒ぶじょうの、よく澄める古葡萄酒の馳走を、その人民どもになしたもう……。主君の剣は血に満てり。主君の剣は羊の腎臓しんぞうの脂肪に飽きたり……。

「もつともいけないのは、この神が不誠実にも、予言者を遣わして人々を盲目にすることだ。それも彼らを苦しませるための理由を得るためにだ。

行け、この民の心を堅からしめ、その眼と耳とをふさげよ。彼らが悟ることを恐るればなり。彼らが改心して健康を回復することを恐るればなり。——主よ、何時までなりや。——家にはもはや人なく土地は荒廢に帰するまで、しかせよ……。

「いや僕は生まれてからまだかつて、これほど邪悪な男を見たことがない……。

「僕とても、言葉の力を認めないほど馬鹿ではない。しかし思想を形式から引き放すことはできないのだ。僕がときとしてこのユダヤの神を感嘆することがあるとしても、それは虎などを感嘆するのと同じ態度でなんだ。種々の怪物を生みだすシエイクスピヤでさえもこんな憎悪ぞうおの——神聖な貞節な憎悪の——英雄を、うまくこしらえ出すことはできなかった。こんな書物は実に恐ろしいものだ。狂気はすべて伝染しやすい。そしてこの書物の狂気のうちには、その殺害的な傲慢ごうまんさに純化的主張があるだけに、さらに大なる危険がこもっている。イギリスが数世紀来それを糧かてとしてるのを思うと、僕はおののかざるを得ない。イギリスと僕との間に海峡の溝渠こうきよが感ぜられるのは仕合わせだ。ある民衆が聖書バイブルで身を養つてゐる間は、僕はそれをまったくの文化の民だとはけつして信じないだろう。」

「それでは君は僕をも恐れていいわけだ、僕は聖書バイブルに酔わされてるのだから。」とクリ

ストフは言った。「^{バイブル}聖書は獅子の精髓なんだ。それを常食としてる者こそ強健な心の人だ。福音書も旧約書の配剤がなければ、味のない不健全な料理にすぎない。^{バイブル}聖書は生きんことを欲する民衆の骨格なのだ。戦わなければいけない、憎まなければいけない。」

「僕は憎悪^{ぞうお}を憎む。」とオリヴィエは言った。

「ただ君に憎悪の念さえあればいいんだが。」とクリストフは言った。

「君の言うとおり、僕には憎む力さえないのだ。しかたがない。敵のほうの理由をも見ないではいられないのだ。僕はシャルダンの言葉をみずから繰り返している、温和だ、温和だ！ と。」

「まるで小羊だね。」とクリストフは言った。「しかし否でも応でも僕は、君に溝^{みぞ}を飛び越えさしてみせる、無理やりに君を連れ出してみせる。」

果たして彼は、オリヴィエの事件を引き受けて、オリヴィエのために戦いだした。しかし最初のうちはあまり都合よくはいかなかった。彼は第一歩からもういらだって、友を弁護しながらかえってその不利を招いていた。あとで彼はそれに気づいて、自分の頓馬^{とんま}さに落胆した。

オリヴィエもじつとしてはいなかった。彼はクリストフのために戦っていた。彼は戦いを恐れていたし、過激な言葉や行為を嘲笑^{あざわら}うだけの、明晰^{めいせき}皮肉な知力をそなえてはしたが、それでもクリストフを弁護する場合になると、だれよりも、クリストフ自身よりも、いつそう過激になるのだった。無我夢中になるのだった。人は愛においては無茶になり得なければいけない。オリヴィエもその例にもれなかった。——けれども彼は、クリストフよりは巧妙だった。自分自身のことには一徹で頓馬^{とんま}だったこの青年も、友の成功のためには、策略やまた狡^{こうかつ}猾な術数をさえめぐらすことができた。非常な元氣と機敏さをもつて、友に味方を得さしてやった。自分自身の味方に願うのは恥ずかしがってるような、音楽批評家やメセナスのごとき文芸保護者の連中を、うまくクリストフへ心向けさしてやった。

そういう努力にもかかわらず、二人はなかなか自分らの境遇を改善できなかった。たがいの愛情のために、いろいろばかげたことをした。クリストフは金を借りてオリヴィエの詩集を一冊内密に出版したが、一部も売れなかった。オリヴィエはクリストフを説き落とすとして、音楽会をやらせたが、ほとんどだれも聴^ききに來なかつた。クリストフはむなししい聴衆席を前にして、ヘンデルの言葉を繰り返しながらみずから雄々しく慰めた。「素敵だ！

俺おれの音楽はこのほうがよく響くだろう……。」しかしそういう空威張りも、費やした金を償つてはくれなかつた。そして二人は寂しく家に帰つていった。

そういう困難のうちにおいて、彼らを助けに来てくれたただ一人の者は、タデー・モークという四十歳ばかりのユダヤ人だつた。彼は美術写真の店を開いていた。そしてその職業に興味をもち、趣味と巧妙さをもつてやつていたが、それでもなおその商売をおろそかにしたいほど他のいろんなことに興味をもつていた。商売に身を入れるのも、技術上の完成を求めるためにであり、新しい複写法に熱中するためであつた。がその複写法は、巧妙な工夫になつてゐるにもかかわらず、めつたに成功しなかつたし、またたいへん金がかかつた。彼は非常にたくさん書を読んで、哲学や芸術や科学や政治などのあらゆる新思想を求めていた。驚くべきほど鼻がきいて、独自の力をもつてゐる者を嗅かぎ出してゐた。その隠れたる磁力を感じてゐるがようだつた。オリヴィエの友人らが、各自に孤立して自分自分の仕事をしている間で、彼は一種の連れんけい繋の役目をなしてゐた。彼はあちらこちら行き来していた。そのために、彼らも彼も気づかないうちに、常に一つの思潮が皆の間にでき上がつていた。

その男をオリヴィエがクリストフへ近づかせようとしたとき、クリストフは初め断わつた。彼はイスラエルの民族との過去の経験に飽き飽きしていた。オリヴィエは笑いながら、ぜひその男に会えと説きたて、フランスを知らないと同様にユダヤ人をもよく知ってはいないので言つた。でクリストフは承諾した。しかしタデー・モークを初めて見ると、彼は顔を渋めた。モークは外見上、あまりにもユダヤ人的だった。ユダヤ人ぎらいの者が描き出すとおりのユダヤ型、背の低い頭の禿げた無格好な身体、すつきりしない鼻、大きな眼鏡の後ろから斜視やぶにらみする大きな眼、荒いまつ黒なもじやもじやした髭ひげに埋まつてる顔、毛深い手、長い腕、短い曲がつた足、まったくシリアの小バール神であつた。しかし彼のうちには深い温情の現われがあつてクリストフはそれに心打たれた。彼はことに、ごくさつぱりしていて、少しも無駄な言葉を発しなかつた。誇張したお世辞は少しも言わなかつた。ただ慎み深い一言だけで済ました。しかし人の役にたとうと願つていた。人から頼まれないうちに、もう何か世話をしてくれていた。彼はたびたびやって来、あまりたびたびやって来た。そしてたいていいつも何か吉報をもたらしした。二人のどちらかへ仕事をもつて来、オリヴィエのために芸術上の論文執筆や講義の口をもつて来、クリストフのために音楽教授の口をもつて来た。彼はけつして長居をすることがなかつた。彼は押しつけがま

しいことをわざと避けていた。たぶんクリストフのいらだちに気づいたのであろう。クリストフはそのカルタゴの偶像みたいな髯ひげづら面が戸口に現われるのを見ると、いつもまっ先に我慢しかねるような様子をするのだった。——（彼はモークをモロツクと呼んでいた。）——しかしモークが帰ってゆくと彼はすぐに、そのまったくの温情にたいして満腔まんこうの感謝を覚ゆるのだった。

温情はユダヤ人には珍しいことではない。それはあらゆる美徳のうちで、彼らがたとい実行しないときでももつともよく容認するものである。実をいえば、温情は彼らの大多数にあつては、否定的なあるいは中性的な形のまま、寛容、無関心、悪を行なうことの嫌け悪んお、皮肉な許容、などとなる。ところがモークにあつては、その温情がひどく活動的だった。だれかにもしくは何事かに、いつでも身をささげようとしていた。貧しい同宗の者らのために、ロシアの亡命者らのために、あらゆる国民のうちの迫害された者らのために、不幸な芸術家らのために、あらゆる不運のために、あらゆる健気けんげな事件のために、いつでも尽くそうとしていた。彼の財布はいつも口をあいていた。いかにその中身が少ないときでも、どうにかして多少の金を取り出した。まったく空からである場合には、他人の財布から金を引き出した。人の世話をする場合になると、自分の心労や足労を意に介しなかった。

単純に——わざとらしいほど単純に人の世話をした。単純で実直だとあまりに自称しているのは瑕きずだったが、しかし多とすべきは、実際彼が単純で実直なことだった。

クリストフはモークにたいするいらだちと好感との板ばさみになって、一度餓鬼大将みたいな残忍な言葉を発したことがあった。すなわちある日、彼はモークの親切に感動して、やさしく両手をとりながら言った。

「実に不幸なことだ……実に不幸なことだ、あなたがユダヤ人であるのは！」

オリヴィエはそれがあたかも自分のことでもあるかのように、ぎくりとして真赤まっかになった。非常に当惑して、友が相手に与えた不快を打ち消そうとつとめた。

モークは寂しい皮肉の様子で微笑ほほえみ、落ち着いて答えた。

「人間であるのはさらに大きな不幸です。」

クリストフはそれを単なる思いつきとしか見なかった。しかしその言葉のうちにこもっている悲観思想は、彼が想像も及ばないほど深いものだった。オリヴィエは精緻せいちな感受性によつて、それを直覚し得た。人に知られてるモークの下には、まったく異なつた、そして多くの点においては全然反対でさえある、他のモークが存在していた。彼の表面の性質は、真の性質にたいする長い戦いから生じたものだった。単純らしく見えるこの男は、曲

がりくねった精神をもっていた。自制していない場合には、いつも簡単な事物をも複雑にしたがり、もつとも真実な感情にも気取った皮肉の性質をもたせたがった。謙讓でときとするとあまりに卑下してゐる観があるこの男は、その底に傲ごうまん慢さをもっていて、それをみずから知ってひどく抑制していた。彼のにこやかな樂觀主義、たえず他人に尽くさんとする不断の活動性は、深い虚無思想を、自分で見るのも恐ろしい致命的な落胆を、その下に覆おほい隠していたのである。モークは、多くのことに大なる信念を表示していた。人類の進歩、純化されたユダヤ精神の未来、新精神の闘士たるフランスの運命などに。——（彼はこの三つの事柄を好んで同一視していた。）——しかしオリヴィエはそんなことに欺かれはしなかつた。彼はクリストフに言った

「心の底では、彼は何も信じていないのだ。」

モークは、その皮肉な良識と冷静ともかかわらず、自分のうちの空虚をながめたがらない神経衰弱者だつた。ときどき虚無の発作に襲われた。真夜中に憎おびえた唸うなり声をたてながら、突然眼を覚さますこともあつた。至る所に動き回るべき理由を捜し求めては、あたたかも水中で浮標にすがるようにそれへしがみついていた。

あまりに古い民族たるの特権は、高い代価を要する。そのとき人がになわせられるもの

は、苦難や疲れた経験や裏切られた知能と愛情など、過去の大なる重荷である——古来の生活の大桶おけである。桶の底には、倦怠けんたいの苛辣からつな滓かすがたまっている……。倦怠、セム種族の広大な倦怠、それはわれわれアリアン種族の倦怠とは別種のものである。アリアン種族の倦怠は、われわれをかなり苦しませてはいるが、少なくともはつきりした原因をもつていて、その原因とともに過ぎ去ってしまう。なぜならそれはたいいてい、欲望するものを得ないという憾うらみみから来てるものである。しかしあるユダヤ人らにあつては、生の源泉そのものが、致命的な毒によつて害されている。もはや欲望もなく、何物かにたいする興味もない。野心も愛も快樂もない。そして、数世紀来必要上精力を消費してきて疲憊ひはいしつくし、不動心の境地を渴望しながらそれに到達し得ないでいるそれらの、東方から根こぎにされた人々のうちに、ただ一つのもののみが、完全なままではなく、病的に過敏になされて、残存している。それは思考癖であり、限りなき分析癖であつて、前もつてあらゆる享樂を不可能ならしめ、あらゆる行動の勇氣を失わせる。もつとも元氣ある者らは、自分のために活動する以上に、種々の役目を引き受けてそれを演じている。不思議なことには、そういう実生活にたいする無欲さは、彼らのうちの多くの者に——かなり知力ありまた往々々なり真面目まじめなのであるが——俳優となつて生活を演ずるといふ、天性もしくは無意識的な

願望を吹き込んでいる。そして彼らにとっては、それが唯一の生活方法なのである。

モークもやはり自己流の俳優であった。彼は気晴らしのために活動していた。しかし、多くの者が利己心のために活動しているのに反して、彼は他人の幸福のために活動していた。クリストフにたいする彼の尽力は、感心なほどまたうるさいほどだった。クリストフはいつも彼を冷遇し、そのあとでまた後悔した。しかしモークはかつてクリストフを恨まなかった。何事も彼の気をそこなわなかった。と言つて、クリストフにたいして強い愛情をもつてゐるからではなかった。彼が愛しているのは、身をささげてる相手の人々よりも、献身そのものだった。相手の人々は彼にとっては、善をなすための、生きるための、一つの口実にすぎなかった。

彼は非常に骨折つて、クリストフのダヴィデと他の数曲とを、ヘヒトに出版させることにした。ヘヒトはクリストフの才能を尊重してはいたが、それを世に紹介しようとするつもりではいなかった。ところが、モークが自分の金で他の出版屋に出版させかねないのを見て、彼は自負心から、みずから進んでそれを引き受けたのだった。

モークはまた、オリヴィエが病氣にかかつて金のない困難な場合に、二人と同じ建物に住んでる金持の考古学者たるフェリックス・ヴェールに、助力を求めようと考えついた。

モークとヴェールとは知り合いだったが、おたがいにより同情の念はなかった。彼らはあまりに異なっていた。落ち着きがなく底暗く革命主義で、おそらく故意に誇張された

「平民」的態度をしてるモークは、平静で嘲笑的ちやうしやうで上品な態度と保守的な精神をもったヴェールの、皮肉を招いていた。もとより彼らは共通の素質をももっていた。二人とも同じく活動にたいする深い興味を失っていた。そしてただ執拗な機械的な活力だけで支持されていた。しかしそれを意識することを二人とも好まなかった。彼らは自分の演じている役割にしか注意を払いたがらなかった。そしてその役割には、たがいに接触点がほとんどなかった。それでモークは、ヴェールからかなり冷やかに取り扱われた。オリヴィエとクリストフの芸術上の企図について、ヴェールに興味をもたせようとしたとき、彼はその懐疑的な冷笑に出会った。いつもなんらかの空中楼阁に熱中してるモークは、ユダヤ人仲間の笑い話となっていて、危険な「山師」とされていた。が彼は多くの場合のように、こんども落胆はしなかった。なおしつこく説きたてて、クリストフとオリヴィエとの友情を話してきかせながら、ヴェールの興味をひいた。それに気づいてなお説きつづけた。

彼はその点で相手の心琴に触れていた。友もなくすべてから離れてるこの老人は、友情を非常に尊んでいた。彼が一生のうちに感じた大なる情愛は友情だったが、途中でその友

をも失つたのだつた。友情は彼の内心の宝だつた。友情のことを考えると慰められた。友の名前でいろんなことをやってきた。亡き友に著書をささげたりした。そして今、クリストフとオリヴィエとの相互の愛情をモークから聞かされると、そのいろんな点に感動させられた。彼の身の上の話も、二人のことと多少似通つていた。亡くなった彼の友は、彼にとつては、一種の兄であり、青春の伴はんりよ侶であり、崇拜してゐる嚮きやうどう導者であつた。若いユダヤ人のある者らは、知力と勇ましい熱情とに燃えたち、周囲の酷薄な環境に苦しめられ、おのが民族を向上せしめおのが民族によつて世界を向上せしめんと、身をささげて尽じ瘁んすいし、みずから自分の身を疲憊ひはいさし、四方から自分自身を焼きつくし、樹脂たいまつの炬火のようにしばらくのうちに燃えつくしているが、彼の友もその一人だつた。その炎はこの小ヴェールの無情無感を温めてくれた。彼が生きてた間は、ヴェールも、その救世的な魂があたりに光被している信念の円光——学問や精神力や未来の幸福などにたいする信念の円光——に包まれて、彼と並んで歩いてきた。しかしその魂から一人この世に置きざりにされた後には、弱い皮肉なヴェールは、その理想主義の高みからすべり落ちて、ユダヤ人の知力の中に存在しその知力を常にのみつくさんとする、伝道書の砂地にはいり込んでしまつた。しかし彼は、友と共に光明のうちに過ぎたときのことをけつして忘れなかつた。

ほとんど消えてしまつてゐるその光明の輝きを、大事に心のうちにしまつていた。彼はその友のことを、だれにも話したことがなく、愛してゐる妻にも話さなかつた。それは神聖なものであつた。そして、人からは乾燥した心の俗人だと思われ、もう生しょうがい涯がいの終わり近く達してゐる、この老人は、古代インドのバラモン教徒の寂しいやさしい思想を、ひそかにみずから繰り返してゐた。

世界の毒樹は、生の泉の水よりも甘き、二つの果実を作り出しぬ。その一は詩にして、一は友情なり。

それ以来彼はクリストフとオリヴィエとに同情を寄せた。二人の気位の高いのを知つて、最近出版されたオリヴィエの詩集をひそかにモークから届けてもらった。そして、二人の友になんらの奔走もさせないで、また自分の企てを少しも知らせないようにして、いろいろ骨折つたあげく、その詩集にある学アカデミー芸院の賞金を得さしてやった。その賞金は、二人がたいへん困つてるときにおりよく手にはいつた。

クリストフは、その意外の援助が、今まで悪く思いがちだった男から来たのを知つたと

き、その男についていろいろ言ったり考えたりしたことを後悔した。そして、人を訪問することの厭いやさを無理に押えて、礼を言いに行つた。が彼の殊勝な意志は報いられなかつた。老ヴェールはクリストフの若々しい感激に接すると、例の皮肉さをいかに隠そうとしても押えきれなかつた。そして二人はなかなか理解し合えなかつた。

クリストフは、ヴェールを訪問したあと、感謝といらだちとを覚えながら、自分の屋根裏の部屋にもどつて来たが、ちょうどその日、オリヴィエへ新しい仕事をもつて来てくれる善良なモークから、リュシアン・レヴィー・クルルの筆になつた、彼の音楽に関するありがたくない雑誌記事を見せられた。それは明らかにさまの非難ではなかつたが、侮辱的な親切から書かれたもので、巧妙な揶揄やゆによつて、彼が忌みきらつてる三、四流の音楽家のうちに、彼を列して喜んでいた。

「見たまえ、」とクリストフは、モークが帰つた後オリヴィエに言った、「僕たちはいつもユダヤ人どもを相手に、ユダヤ人どもばかりを相手にしてるじゃないか。こんなふうでは僕たちまでユダヤ人になつてしまひそうだ。そうじゃないか。僕たちはいつもユダヤ人どもをひきつけてると言われたつてしかたない。僕たちの行く手にはどこにも、敵となり味方となつてユダヤ人どもばかりいる。」

「それは彼らが他の者より知力すぐれてるからだ。」とオリヴィエは言った。「自由な精神の人が新しい事や生きた事柄を語り得る相手は、われわれのうちではほとんどユダヤ人らばかりなんだ。他の者どもは、過去のうちに、死んだ事物のうちに、じつと閉じこもっている。があいにくその過去は、ユダヤ人らにとっては存在しない、あるいは少なくともわれわれが考えるのと同様なものではない。彼らを相手にしては、われわれは今日のことしか話すことはできない。ちようど、同民族の者らとわれわれが過去のことしか話し得ないのと同じだ。あらゆる事柄におけるユダヤ人の活動を見てみたまえ、商業に、工業に、教育に、学問に、慈善事業に、芸術に……。」

「芸術のことは措おこうじやないか。」とクリストフは言った。

「僕は彼らがなすことにいつも同感してると言うのじやない。往々嫌悪けんおの情さえ覚ゆることがある。が少なくとも、彼らは生きているし、生きてる人々を理解し得るのだ。われわれは彼らなしに済ましてゆくことはできない。」

「大袈裟おおげさなことを言うなよ。」とクリストフは嘲り顔あざけに言った。「僕はユダヤ人なしにやつてゆけるよ。」

「おそらく生きてはゆけるだろうよ。しかし君の生命や君の作品が、だれにも知られずに

終わつたら、それがなんの役にたつだろうか。そしてユダヤ人らがいなくなつたら、たぶんそれは知られずに終わるだろう。われわれを助けに来てくれるものは、われわれの同宗教者たちだろうか。カトリック教は、その血縁のもつともすぐれた人々を、少しも保護しようとはせずに滅ぶるに任している。魂の底からして信仰してる人たち、神を守るために一生をささげてる人たち、そういう人々はすべて——もし彼らが大胆にカトリックの教則から離れローマの権力から脱した暁には——自称カトリックの卑しい多衆からは、ただに冷淡であるばかりでなくまた敵意ある者と見なされる。そして多衆は彼らのことには口をつぐみ、彼らを共通な敵の餌食えしきとしてしまう。また、自由精神の人は、いかに偉大な人であろうとも——もし彼が心からのキリスト教徒でありながらも服従的なキリスト教徒でない場合には——もつとも純なる真に聖なる信仰を彼が体現していることも、カトリック教徒らにとつてはなんの重きもなさない。その人は羊の群れに属する者ではなく、自分自身で考えることをしない盲目聾啞ろうあの信者ではない。それゆえ彼は人々から好んで打ち捨てられ、ただ一人で苦しみ、敵から引き裂かれ、同胞の助けを呼び求めながら、同胞の信仰のために死んでゆく。実に今日のカトリック教のうちには、殺害的な懶惰らんだの力が存在している。今日のカトリック教は、それを覚かくせい醒さしそれに生命を与えんとする人々よりも、敵のほ

うをいつそう容易に容赦するかもしれない……。ねえクリストフ、少数の自由な新教徒とユダヤ人がいかなかったら、民族的にはカトリック教徒であり自身では自由人となつてゐるわれわれは、いったいどうなるであらうか、何をすればいいのであらうか。ユダヤ人らは今日のヨーロッパにおいては、あらゆる善悪のもつとも長命な代表者である。彼らは思想の花粉をやたらにもち回つてゐる。君は最初の悪い敵と最初の友とを、彼らのうちに見出しはしなかつたか。」

「それはまつたくだ。」とクリストフは言った。「彼らは僕を励まし支持してくれ、理解してゐることを示しながら戦う者に元氣をつける言葉を、僕にかけてくれた。もとよりそれらの友のうちで、長く僕に忠実だった者はごく少ない。彼らの友情は藁火わらびにすぎなかつた。それでも結構だ。闇夜やみよの中ではその一時の光もありがたい。君の言うことは道理だ。忘恩者ではありたくないものだ。」

「ことに愚昧者ぐまいではありたくないものだ。」とオリヴィエは言った。「いちばん古い枝を少しく切り落とすのだと称しながら、すでに病弱なわれわれの文明の幹を痛めたくないものだ。もし不幸にも、ユダヤ人らがヨーロッパから追われるならば、ヨーロッパはそのために知力と活動とが貧しくなつて、全然崩壊してしまふかもしれない。ことにわれわれの

うちにあつては、フランスの活動力の現今のような状態では、ユダヤ人らを放逐することは、十七世紀における新教徒らの放逐よりも、国民にとつていっそう危険な出血となるかもしれない。——もちろん彼らは現在では、その真価に不相応な地位を占めてゐる。彼らは現今の政治および道徳上の無政府状態に乗じてゐる。生来の趣味からまた好都合なところから、この状態の助長に少なからず力を尽くしてゐる。すぐれた者らはあの敬すべきモークのように、フランスの運命と彼らユダヤ人の夢想とを、不都合にもごく真面目まじめに同一視してゐる。そのユダヤ人の夢想がまた、われわれにとつて有益であるよりもむしろ多くは危険だ。しかし、彼らがフランスを自己流にこしらへ上げたがつてゐるからといって、彼らを悪く思つてはいけない。それは彼らがフランスを愛してゐるからなのだ。たとい彼らの愛が恐るべきものであるとしても、われわれは自分自身を守りさえすればいいし、彼らをわれわれのうちでの本来の地位たる第二流の列に置きさえすればいい。と言つて僕は、彼らの民族がわれわれの民族より劣つてゐると思つてゐるのではない。——（すべてかかる民族の優劣問題はつまらない不快なことだ。）——しかしながら、われわれの民族とまだ融和してゐない他の民族が、われわれに何が適してゐるかをわれわれ以上によく知つてると主張するのは、容認しがたいことだ。その民族がフランスでよくやつてゆくことには、異議は

ない。しかし、フランスをユダヤ国たらしめようと望んではもらいたくない。知力秀でた強固な政府があつて、ユダヤ人らをその本来の地位にすえ得るならば、フランスを偉大ならしむるもつとも有用な道具の一つと彼らをなすだろう。そして、われわれのためになると同時に彼らのためにもなるだろう。かかるそわそわした不安定な神経過敏な者らには、彼らをしめくくる法律の必要があり、彼らを制御する強い正しい首長の必要がある。ユダヤ人は女のようなものだ。人から手綱を引きしめられるとりっぱにしている。しかし向こうが支配する場合には、女にしてもユダヤ人にしても、とてもたまらないことになる。その下に服従する者どもは、それこそ物笑いの種である。」

クリストフとオリヴィエとは、たがいに愛し合つてはいたけれど、また愛のためにたがいの魂にたいする直覺力を得てはいたけれど、それでも、おたがいによく理解のできない、おたがいに気を悪くさえするような、いろんなことが存在していた。友にもつとも似寄つた自分の部分だけを存続させようと努力する友情の初期のうちには、二人ともそのことに気づかなかつた。ところがやがて少しずつ、両民族の面影が表面に浮かび出てきた。二人はときどき気持の些細な齟齬を感じ、たがいの愛情をもつてしてもそれを避けることができ

なかつた。

二人は誤解のうちに迷い込んだ。オリヴィエの精神は、信念と自由と熱情と皮肉と普遍的疑惑との混合したもので、クリストフはその形体をとらえ得なかつた。オリヴィエのほうでは、クリストフの心理の欠乏に不満だつた。彼の知的な古い民族の貴族性は、クリストフの、強健ではあるが鈍重で融通がきかず、自己分析ができず、他人からも自分からも欺かれてる精神の、頓馬とんまさ加減を笑つていた。その感傷性、騒々しい感情表白、たやすい感動、などもまたオリヴィエに、ときとすると厭いやな気を起こさしたり、軽い滑稽こっけいの念をさえ起こさせることがあつた。そのうえ、力にたいするある種の崇拜については、すぐれた拳固道徳げんこ、もつとも強きものの権利にたいするドイツ流の確信については、オリヴィエや彼の民衆は、それを信じ得られないりっぱな理由をもつていた。

また、クリストフはオリヴィエの皮肉にしばしば立腹するほどいらだたせられて、それに我慢ができなかつた。その理屈癖、不断の分析、ある一種の知的不道徳性、などにも我慢ができなかつた。この知的不道徳性は、オリヴィエのごとく道徳的純潔を熱望してる者にあつては驚くべき事柄であつた。その源は、あらゆる否定を拒む彼の知力、相反する思想を見渡して喜ぶ彼の知力、その知力自身の広さのうちにあつた。オリヴィエは事物を、

一種歴史的な全景パノラマ的な見地からながめていた。すべてを理解したいとの念から、可否の両面を同時に見ていた。人が彼の前でその一方を支持すれば、彼は反対のほうを支持した。ついには彼自身がその矛盾のうちに迷い込んでしまった。そしてなおいつそうクリストフを途方にくれさせた。けれども、人に反対したいという欲求や矛盾を好む傾向が、彼のうちにあるのではなかった。正理や良識を求むるところから必然に来たものだった。彼はあらゆる偏執の愚昧ぐまいさに不快を感じ、それに反抗しずにはいられなかった。クリストフがすべてを実際以上に誇張して、不道徳な行為や人物を批判する生なまなやり方は、オリヴィエには不愉快だった。オリヴィエも同じく純粹ではあったが、同じ一徹な鋼鉄からできてはいなくて、外部の影響にそそれ染められ動かされた。彼はクリストフの誇張に抗言し、そして反対の方面へ誇張した。彼はいつもそういう精神の癖から、味方に反対して敵の主張を支持しがちだった。クリストフは腹をたてた。彼はオリヴィエにその詭弁ぎべんと寛容を非難した。オリヴィエは微笑した。その寛容は空うつろな幻をまとつてるものでないことを、よく知っていた。クリストフのほうがはるかに多くのことを信じており、それをよりよく受け入れていることを、彼はよく知っていた。ただクリストフは、左右を顧みず猪突ちよとつしていた。パリー人の「温情」をことにいらだつていた。

「パリー人らがあんなに自慢そうに大議論をして、悪人どもを『容赦』しようとするのは、それは、」と彼は言った、「悪人どもはすでに悪人となるほど不幸であり、もしくは、彼ら自身には責任がないのである、と考えての上のことだ……。しかし、第一に、悪をなす者どもが不幸であるとは真実でない。そんなのは、芝居の上の道徳観念であり、幼稚な通俗劇の観念であり、スクリーンやカプユスの作品中に陳列されてると同様のばかげた楽天的観念である——（君らのパリーの偉人たるスクリーンやカプユスこそ、享樂的で偽善的で幼稚で自分の醜を正視し得ないほど卑怯ひきょうな君らの中流社会に、ちやうどふさわしい芸術家だ。）——悪人たる者はよく幸福な人間になり得るのだ。幸福な人間になるべき機縁をもつとも多くそなえていさえする。そして悪人に責任がないということ、それもまた馬鹿げたことだ。自然は善と悪とに無関心であるから、またしたがって邪悪でさえもあり得るから、人はよく罪深くあるとともに完全に健全であり得るということを、認めるだけの勇氣をもつがいい。美德は自然的な事柄ではない。それは人間がこしらえ出したものだ。でそれを保護しなければいけない。人間の社会は、他の者よりも強い偉大な少数の人によって建てられたのだ。その雄壮な製作物を犬みたいな心を持った賤民せんみんどもから害されないようにすることこそ、人間の務めである。」

そういう思想は、要するに、オリヴィエの思想と大して異なつてはいなかつた。しかしオリヴィエは、平衡を欲するひそかな本能よりして、もつとも享樂的な気持で戰鬪的な言葉を書き流した。

「そうやきもきするなよ。」と彼はクリストフに言った。「世界をして死ぬがままにさしておくがいい。デカメロンの仲間ののように、思想の花園の香ばしい空気を平和に呼吸しようよ。薔薇の花でとりまかれた糸杉の丘の周囲では、フロレンスの町が黒死病に荒らされていたつて、構わないじゃないか。」

彼はその幾日もの間、芸術や学問や思想などの隠れた機械装置を探るために、それを分解して面白がつていた。そのためにいつしか懷疑癪に陥つてしまつて、すべて存在するものは、もはや精神の作為にすぎなくなり、空中の楼阁にすぎなくなり、あたかも幾何学の図形のように、人の精神に必要なとの口実をも失つてしまつていた。クリストフは憤慨した。

「機械はうまくいつているのに、なぜ分解するんだ。君はそれをこわしてしまふかもしれない。無駄な骨折りをしたことになるばかりだ。いったい君は何を証明したいのか。つまらないものはつまらないということをか。なあに、そんなことは僕にだつてよくわかつて

る。われわれが戦うのは、四方から空虚が侵入してくるからだ。何も存在しないというのか……。しかしこの僕は存在している。活動の理由がないというのか……。しかしこの僕は活動している。死を好む奴らは、望みどおり死んでゆくがいい。しかしこの僕は生きる。生きることを欲するのだ。秤ばかりの一方の皿さじらに僕の生命をのせ、他の皿に思想をのせるとすれば……。思想なんか鬼に食われてしまえだ！」

彼はいつもの乱暴さに駆られていたし、議論をしながら人の気を害する言葉を発していた。がそれを言ってしまうとすぐに後悔した。それを取り消したかった。しかしもうあと祭りだった。オリヴィエはたいへん感じやすかった。すぐに擦すりむける皮膚をもっていた。ひどい一言を聞くと、ことに愛してる者からひどい一言を聞くと、胸せまる思いをした。彼は高慢心からそれを口には出さず、自分自身のうちに潜み込んだ。そのうえ彼は、あらゆる大芸術家のうちにある無意識的利己心の突然の閃ひらめきを、友のうちに認めないではなかった。そしてある場合には、自分の生命もクリストフにとつては、美うらわしい音楽に比して大した価値をもつてはしないと、感ずるのであった。——（クリストフはそのことを彼に隠すだけの労をほとんど取らなかった。）——彼はよくそのことを理解して、クリストフのほうが道理だと思った。しかしそれは悲しいことだった。

それにまた、クリストフの性質中には各種の混濁した要素があつて、オリヴィエにはそれがよく理解できず不安を覚えさせられた。それは奇怪な恐ろしい気分の突発だった。ある時は口をききたがらなかつた。あるいはまた、ひどい意地悪をしたがつて人を困らせようとはかりした。または、身を隠してしまつて、その一日じゅう晩まで姿を見せなかつた。あるときなどは二日間も引きつづいていなくなつた。何をしてくのかだれにもわからなかつた。彼自身もよくは知らなかつた。……実際、彼の力強い性質は、その狭い生活と住居の中に、あたかも鶏小屋の中へでも入れられたように押し縮められて、ときどき爆発しかけていた。友の落ち着いてる様が腹だたしかつた。するとその友をいじめてやりたくなくなつた。そしては逃げ出して自分と自分を疲らさなければならなかつた。パリーの街路や郊外をうろつき回つて、ぼんやり何かの冒険を求め歩いた。そして時にはそれにぶつかつた。悪い奴に出つくわして満ちあふれた力を喧嘩けんかに費やしてしまうようなことでも、彼には平気だつたらう……。オリヴィエは憐あわれな健康と肉体の弱さとのために、そのことを理解しかねた。がクリストフ自身にもよくわかつてはいなかつた。疲れ多い夢から覚めるさように、それらの迷蒙めいもうから眼を覚ました——自分のしたことや、これからまだしかねないことなどが、やや恥ずかしくもあり不安でもあつた。しかしその狂乱の突風が吹き去ると、あた

かも雷雨のあとの広い洗われた空のように、あらゆる穢れけがから清められ朗らかになり主権者となった自分自身を、彼はふたたび見出すのだった。オリヴィエにたいしては前よりいっそうやさしくなり、苦しみをかけたことを心痛していた。二人がなんでちよいちよい争いをするのかももうわからなくなっていた。それはいつも彼のほうばかりが悪いのではなかった。それでも彼は罪が自分にあると考えた。自分を正当化するために勢い込んだことをみずからとがめた。友に反対して自分を正当だとするよりも、友に賛成して自分を欺くほうがいい、と彼は考えた。

二人の誤解は、それが晩に起こって、不和解のうちにその一夜を過ぎさなければならぬというようなときにはことにつらいことだった。その不和解はどちらにとつても激しい悩乱の種となった。クリストフは起き上がって、一言書きしるし、それをオリヴィエの扉とびらの下から差し入れた。翌日になると、向こうが眼を覚さますや否や許しを求めた。あるいはまた、夜中にその扉をたたくこともあった。翌日まで待てなかった。オリヴィエもたいてい、クリストフと同様に眠れなかった。クリストフは自分を愛しているし悪意あつてなしたのではないと、彼はよく知っていた。しかし向こうからそう言われるのが聞きたかった。クリストフはそれを言った。すると何もかも消え去った。なんとよろこい静安だったろう

！ そのあとで二人は、いかによく眠ったことだろう！

「ああ、」とオリヴィエは嘆息した、「たがいに理解するのは実に困難なことだ！」

「だが、いつも理解し合う必要があるだろうか。」とクリストフは言った。「僕はそんなことはあきらめた。たがいに愛し合いさえすればいいのだ。」

それらの些細な不和を、その後二人は、細やかな愛情で直そうと考えついたので、そのためたがいにますます親愛の度を加えた。不和の場合には、オリヴィエの眼の中にアントアネットの姿が現われてきた。二人の友は女のような心づかいをたがいに示した。オリヴィエの祝い日には、クリストフはかならず、彼にささげた作品や、または、花、菓子、贈り物などでそれを祝った。どうして買ってきたかはわからなかった——（なぜなら、家には金のないことがしばしばだったから。）——オリヴィエのほうでは、クリストフの総譜を夜ひそかに写し直しては、眼をくぼましていた。

人間の誤解は、第三者がはいり込んで来ないかぎりには、けっして重大なことではない。

——しかし、いつかは第三者がきつとはいり込んで来るものである。この世ではあまりに多くの人が、他人の事柄を気にして、他人を不和ならしめようとしている。

オリヴィエは、クリストフが先ごろ出入りしていたストウヴァン家の人たちを知っていた。そして彼もまたコレットに心ひかれていた。クリストフがその旧知の女の友の取り巻き連中の中でオリヴィエに出会わなかったのは、ちょうどそのころオリヴィエが姉の死にがっかりして、喪にこもってだれにも会わなかったからである。コレットのほうではオリヴィエに会おうとも努めなかった。彼女はオリヴィエを好きだったが、不幸な人を嫌いだった。自分は感じやすく悲哀を見るに堪えないと思っていた。オリヴィエの悲しみが過ぎ去るのを待っていた。そして、彼の気持が回復してもうその悲しみに感染するの危険がなさそうだと知ったとき、思い切って呼び寄せてみた。オリヴィエはすぐに応じた。彼は人馴れないところがあるとともにまた、誘惑されやすい社交的などころがあった。そのうえコレットにたいしては弱味があった。彼はクリストフに、またコレットのもとへ出入りするつもりであることを告げた。クリストフは友の自由を束縛したくなかったので、少しも異議を唱えないで、ただ肩をそびやかした。そして揶揄的な様子で言った。

「面白いなら行くがいいよ。」

彼はオリヴィエについて行くことを控えた。ああいう浮薄な女どもとはもう関係すまいと決心していた。それは彼が女嫌いだったからではなかった。かえって女をたいへん好き

だった。労働者や雇員や公吏など、すべて働いてる年若い女どもが、朝いつも多少遅れがちに、まだよく眼が覚めていない様子で、工場や事務所へ急いでゆくのを見ると、彼はやさしい好感を起こした。女がその意識をことごとくそなえてるのは、活動しているとき、自分自身で生存し自分のパンと独立とを得ようと努力してるときばかりだと、彼には思えた。そしてそういうときばかり女は、そのまったくの優美さを、動作の敏捷びんしょうなしなやかさを、あらゆる官能の覚醒かくせいを、生命と意志との完全さを、そなえてるもののように彼には思えた。彼は怠惰な享樂的な女をきらった。それは不健全な空想に浸って消化と退屈とを事としてる満腹した動物のような気がした。オリヴィエはそれに反して、ただ美しく周囲の空気を香かおらせんがためにのみ生きてるような、女の無為を、その花のような魅力まじを、非常に好んでいた。彼はより多く芸術家的であり、クリストフはより多く人間的だった。クリストフはコレットとは反対に、他人が世の苦しみを多くになっておればになっておるほどますます好きだった。そして彼は親愛な同情の念で他人に結ばれる心地がした。

コレットは、オリヴィエとクリストフとの交誼こうぎを知って以来、ことにオリヴィエに再会したがっていた。なぜならその細かな点を知りたかったから。クリストフが一種の輕蔑けいべつ的な態度で彼女を忘れはてたらしいことについて、彼女は多少の恨みを含んでいた。そし

て別に意趣晴らしをするつもりではなしに——（わざわざ意趣晴らしをするほどの事柄ではなかつた）——何か悪戯いたずらをしてやりたかつた。猫ねこのようにちよつと引っかいてやって、注意をひいてみたかつた。彼女は人を口車にのせることが巧みだつたから、わけなくオリヴィエに口を開かせてしまった。オリヴィエは、人から遠く離れてるときには、もつとも洞察どうさつの明があつてもつとも欺かれなかつた。しかしやさしい両の眼の前に出ると、率直な信頼さをもつとも多く見せるのだつた。彼とクリストフとの友情にコレットがいかにも誠実そうな同情を示したので、彼はうっかりその友情の物語をして、些細ささいな睦むつまじい誤解なごをもいくらか話した。その誤解も遠くからながめるとかえつて愉快な気がしたし、また彼はすべて自分のほうが悪いのだとしていた。彼はまた、クリストフの芸術上の抱負や、フランスおよびフランス人にたいするクリストフの批判——それは賞賛的なものばかりではなかつた——の多少を、コレットにもらした。それらのことはみな、それ自身では大したことではなかつたが、コレットはそれを勝手に案配し、しかもクリストフにたいする一種のひそかな意地悪をもつてしただけに、なおさら人の気をひく話となして、すぐさま方々へ流布した。第一にその内密ないしよばなし話を聞いたのは、彼女の腰巾ぎんちやく着たるリュシアン・レヴィー・クールだつた。そしてレヴィー・クールは、それを秘密にしておく理由を少し

ももたなかつた。でその話は、途中でますます面白いものとなつて四方へ広がつた。オリヴィエが犠牲者ということになつて、オリヴィエにたいする皮肉なやや侮辱的な憐憫れんびんの調子を帯びてきた。本来ならばその話は、二人の主人公がほとんど世に知られていない人物だつたから、だれにもさほど興味あるものとはなりそうになかつた。しかしパリー人というものは、自分と無関係なことについてまでも興味をもつものである。そしてついにその秘密は、ルーサン夫人の口からクリストフ自身の耳にまで伝わつた。夫人はある日音楽会で彼に出会つて、あのオリヴィエ・ジャンナンと喧嘩けんかしたのはほんとうかと尋ねた。そして、彼とオリヴィエ以外には知つてゐる者がないはずの事柄にそれとなく言及して、仕事のことを尋ねた。だれからそんな詳しいことを聞いたのかと尋ねられて、リュシアン・レヴィー・クールから聞いたのであり、レヴィー・クールはオリヴィエから聞いたそうであると、彼女は答えた。

クリストフはそれに参つてしまつた。激烈で批評眼のない彼には、その噂うわさがほんとうらしくないことを取り上げる考えは起こらなかつた。彼はただ一つのことしか見なかつた。オリヴィエに打ち明けたその秘密が、リュシアン・レヴィー・クールにもらされたのだ！ 彼は音楽会にじつと残つてゐることができなかつた。すぐに席を立つた。周囲には空虚し

か感ぜられなかった。彼はみずから言っていた、「友に裏切られた!……」

オリヴィエはコレットのもとへ行つていた。クリストフは自分の室の扉とびらに鍵かぎをかけて、オリヴィエがいつものとおり帰つてきて少し話をしようとしても、それができないようにした。しばらくすると果たして、オリヴィエが帰つて来、扉を開こうとし、鍵のかかつてる向こうから挨拶あいさつの言葉をささやいてるのが、聞こえてきた。しかし彼は身動きもしなかつた。寢床の上に暗闇くらやみの中にすわり、頭を両手でかかえて繰り返していた、「友に裏切られた!……」そしてそのまま、夜中までじつとしていた。すると、いかにオリヴィエを愛してるかを感じてきた。裏切られたことを恨んでるのではなく、ただ一人苦しんでるのだつた。愛せられる者のほうには、あらゆる権利がある。もはや相手を愛さないという権利さえある。人はそれを彼に恨むことはできない。彼から見捨てられて、自分がほとんど彼の愛を受くるにも足りないということを、みずから恨むだけのことである。それこそ致命的な苦しみである。

翌朝、クリストフはオリヴィエに会つても、なんとも言わなかつた。オリヴィエを非難することは——信賴に乗じて秘密を敵へ餌えきとして投げ与えた、と非難することは——いかにも厭いやな気がして、一言も口に出し得なかつた。しかし彼の顔つきが彼に代わつて口をき

いていた。敵意を含んだ冷酷な顔つきだった。オリヴィエはそれに驚かされた。しかし少しも理由がわからなかった。クリストフが何を根にもっているのか、彼は恐る恐る知ろうと試みた。がクリストフは返辞もせず、素気なく顔をそむけてしまった。オリヴィエのほうでも気にさわって、口をつぐみ、黙然として心を痛めた。二人はもうその日一日顔を合わせなかった。

クリストフは、オリヴィエからたといその千倍もの苦しみを与えられたとしても、けっして意趣晴らしをすることはできなかつたろうし、ほとんど身を守ることさえできなかつたろう。彼にとってオリヴィエは神聖なものであった。しかし彼は憤慨の念に駆られたあまり、だれかにぶつかって思いを晴らさなければならなかった。そして、オリヴィエがその的まととなり得なかつたので、リュシアン・レヴィー・クールが的となった。彼はいつも不公平と激情とのために、オリヴィエが犯したはずの罪過の責任を、レヴィー・クールにもっていった。レヴィー・クールのような奴やつから、昔はコレット・ストウヴァンの友情を奪われたうえに、こんどは友の愛情を奪われたかと思うと、堪えがたい嫉妬しつとの苦しみを感じた。そしてさらに彼を激昂げつこうさせたことには、ちょうどその日、フィデリオ上演についてのレヴィー・クールの論説が眼にはいった。レヴィー・クールはその論説中で、ベートー

ヴェンのことを嘲弄ちやうろうの調子で述べたて、その女主人公をモンティオン賞のためにうまくひやかしていた。クリストフは、その作品の滑稽こっけいな点や音楽のある誤謬ごびゆうをさえ、だれよりもよく見て取っていた。彼は自身ではいつも、知名の大家にたいして大袈裟おおげさな尊敬を示しはしなかった。しかし、常に自説を固執することやフランス流の論理などを、少しも鼻にかけてはいなかった。彼は元来、自分の好きな人の欠点も指摘しはするが、他人にはそうすることを許さなかった。そのうえ、大芸術家を批評するのに、クリストフのようにかに辛辣しんらつであろうとも、芸術上の熱烈な信念をもつてし、また——（あえて言い得べくんば）——その人のうちに凡庸さを許し得ないほど、その榮譽にたいする一閃な愛情をもつてすること——もしくは、リュシアン・レヴィー・クールがしているように、偉人を貶けなして公衆の下劣さに媚こび愚衆を笑わすことだけを、その批評の眼目とすること、その両者はまったく別事であった。つぎに、クリストフはいかにも自由な批判を事としてはいたが、常にある種の音楽にたいしては、それを黙つて別な場所に安置し、けつして手を触れなかった。それは、いわゆる音楽よりもより高きより善き音楽であり、慰藉いしやと力と希望とを汲くみ出し得る偉大な有益な魂そのものであった。ベートーヴェンの音楽はそういうものだった。それがある下司野郎げすから侮辱されてるのを見ると、彼は我を忘れて激昂げっこうし

た。もはや芸術上の問題ではなく、名誉の問題だった。すべて生に価値を与えるもの、愛、^{きょうゆう}侠勇、熱烈な徳操、などがみな含まれていた。それが害されるのは、愛慕せる女の侮辱を聞くのと同様に、許し得られないことだった。憎悪し^{しとさつ}屠殺するのほかはなかった……。ましてその侮辱者は、クリストフがだれよりももつとも軽蔑^{けいべつ}してる男ではなかったか！
そして偶然にも、その晩に、二人は顔を合わせた。

オリヴィエと二人きりにならないために、クリストフは珍しくも、ルーサン家の夜会に行つたのだつた。すると演奏を求められて、心ならずも承知した。それでもやがて、自分のひいてる楽曲の中に我を忘れた。そしてふと眼をあげたとき、数歩先に、一団の人々の中に、こちらを見守つてるリュシアン・レヴィー・クルの皮肉な眼を認めた。彼はある小節の最中にぴたりとひきやめ、立ち上がって、ピアノに背を向けた。人々は当惑してひっそりとなつた。ルーサン夫人はびつくりして、強^しいて微笑を浮かべながら、クリストフのところへやって来た。そして用心深く——その楽曲のまだ終わっていないことがはつきりわからなかつたので——彼に尋ねた。

「つづけておやりになりませんか、クラフトさん。」

「もう済みました。」と彼は冷やかに答えた。

そう言ってしまうや否や彼は自分の無作法に気づいた。しかしそのために憤み深くなるどころか、かえつてますますいらだつた。聴衆の嘲り気味な注目には気も止めずに彼は、リュシアン・レヴィー・クルルの挙動が見守れる片隅かたすみに行つてすわつた。隣席には、赤いぼんやりした顔をし、薄青い眼をもち、子供らしい表情を浮かべてる、ある老将軍がすわつていた。なんとかお世辞を言わなければならぬと思つてか、彼の楽曲の独創的なことをほめた。クリストフは不快を感じてただ辞儀をし、訳のわからない言葉をつぶやいた。将軍は無意味なやさしい微笑を浮かべながら、極端に丁寧な調子で話しつづけた。そして、あんなに長い音楽をどうしてそらでひけるか、それを説明してもらいたがつた。クリストフはその好々爺こうこうやを長椅子いすからなぐり落としてやろうかとも考えた。彼はリュシアン・レヴィー・クルルがなんと言つてるか聞きたがつていた。攻撃の口実をねらいすましていた。少し前から、自分が何か馬鹿げたことをしでかしそうな氣持になつていた。どうしても馬鹿げたことをするに違いない氣がした。——リュシアン・レヴィー・クルルは、一団の婦人達を相手に、例のわざとらしい声で、大芸術家らの意図やその内心の思想などを、説明してきかしていた。ちよつとあたりがひつそりとなつた合間あひまにクリストフは、彼がワグ

ナーとルードウイツヒ王との友情について、言葉の裏に醜關係をにおわせながら話してるのを、それと聞き取った。

「もうたくさんだ！」と彼はそばのテーブルを拳固げんこでたたきながら叫んだ。

人々は呆氣あっけに取られて振り向いた。リュシアン・レヴィー・クールはクリストフの眼つきに出会い、軽く蒼あおざめて言った。

「君は僕に向かって言ってるのか。」

「君にだ、恥知らずめ！」とクリストフは言った。

彼はむつくと立ち上がった。

「世の中のりっぱなものを、君はなんでも汚そうとするんだな。」と彼は猛然と言いつづけた。「出て行け、馬鹿野郎、窓から放り出すぞ！」

彼は進み寄っていった。婦人たちはちよつと声をたてて遠のいた。少し騒ぎとなった。クリストフはすぐ人に取り巻かれた。リュシアン・レヴィー・クールは半ば腰を浮かしていた。それからまた肱掛椅子ひしかけいすに事もなげにすわった。通りかかりの召使を小声に呼んで、一枚の名刺を渡した。そして、何事も起こらなかつたかのように話をつづけた。しかしその眼瞼まぶたは神経質にまたたき、ちらちら横目で見やって、人々の様子をうかがっていた。ル

ーサンはクリストフの前に立ちふさがっていたが、その上衣の襟えりをとらえて、彼を扉とびらのほうへ連れて行つた。クリストフは憤怒ふんぬと恥とでいっばいになり、頭をたれて、ルーサンの白シャツの大きな胸部を眼の前にし、その光ったボタンを数えていた。そしてそのでつぶりした男の息を顔の上にかけていた。

「ええ、君、ええ、どうしたんだ？」とルーサンは言っていた。「なんとしたことだ？反省してみたまえ。ここをどこだと思う？ おい、気でも狂つたのか。」

「あなたの家へなんか、もう二度と足踏みはしない！」とクリストフは言いながら、向この両手を振り払つた。そして扉へ進んでいった。

人々は用心して道を開いていた。着物置場で、一人の召使が彼に盆を差し出した。その上にはリュシアン・レヴィー・クルの名刺がのつていた。彼は訳がわからずにそれを取り上げて声高に読んだ。それからいきなり、激怒の息を吐きながらポケットの中を探つた。五つ六ついろんな物を取り出したあとで、三、四枚の皺しわくちやな汚きたない名刺を引き出した。「そら、そら！」と言いながら彼は、それらの名刺を盆の上に激しくたたきつけたので、一枚は下にはね落ちてしまった。

彼は出て行つた。

オリヴェイエは何にも知らないでいた。クリストフは介添人として、手当たり次第に選んだ。音楽批評家のテオフィル・グージャールと、スイスのある大学の私人教授でドイツ人であるバルト博士とだった。彼はこのバルトに、ある晩麦酒店ビヤホールで出会ってそれから知り合いになったのだった。彼は相手にたいしてあまり同情はいだかなかつたが、しかし二人いつしよになつて故国のことを話すことができるのだった。リュシアン・レヴィイ・クールクールの介添人らと相談のうえ、武器はピストルにきめられた。クリストフはいかなる武器の使い方も知らなかつた。それでグージャールは、いつしよに射撃場へ行って少しは稽古いこしとくのも悪くなかろうと言つた。がクリストフは断わつた。そして翌日を待ちながら、仕事にかかつた。

しかし彼の精神はよそにあつた。悪夢の中のように、漠然ばくぜんとしたしかも固定してるある観念の唸り声うなが耳に響いていた……。 「不愉快なことだ、そうだ、不愉快なことだ……どうしたというのだ？ ああ、明日がその決闘……冗談だ！……けつしてあたるものか……だがあたるかもしれない……あつたら？ あたる、そう、あつたら？……彼奴あいつの指がちよつとしまると、それで俺おれの生命がなくなる……すると……そうだ、明日は、今か

ら二日たつと、俺はこのパリーの汚い土地の中に横たわってるかもしれない……なあに、どこだって同じわけさ！……ところで、卑怯な真似をする？……いやするものか。しかし、俺のうちに生長してる多くの思想をみな、くだらないことに失ってしまふのは、名譽なことじゃない……。現今の決闘ほど厭なものはない。相手二人の運命を平等だとしてやる。馬鹿者の生命と俺の生命とを同じ価値だとするなんて、なんとという平等さだ！拳固と棒とで戦うんだつたら！ それこそ素敵だ。だがこの冷やかな射撃では！……そしてもとより彼奴は打ち方を知ってる、が俺はピストルを手にしたことさえない……。皆の言うのは道理だ。稽古しなくちやいけない……。彼奴は俺を殺すつもりだろう。なあに、俺のほうで彼奴を殺してやる。」

彼は降りて行つた。近くに射的場があつた。彼はピストルを一つかりて、その使い方を説明してもらつた。最初の一発は、危うく主人を打ち殺すところだった。彼はつづいて二度三度とやつてみたが、少しもうまくならなかつた。焦れだしてきた。それがなおいけなかつた。あたりには、数人の青年が見物して笑つていた。彼はそれに気も止めなかつた。人の嘲りなどは平氣でただ上達したい一心でやりつづけた。それでいつもあるとおりに、そのへまな根氣強さはやがて人々の同情をひいた。見物の一人がいろいろ助言してくれた。

彼はいつもの乱暴さに似ず、子供のようにおとなしく耳を傾けた。神経を押えつけて手を震わせまいとした。眉根まゆねを寄せて堅くなつた。汗は両の頬ほおに流れた。一言も口をきかなかつた。しかしときどき、癩かんしやく癩しやくを起こして飛び上がった。それからまた打ち始めた。二時間もつづけた。二時間後に的に中あたつた。その思うままにならぬ身体を制御しようとする意力ほど、人の心をひくものはなかつた。それは人に敬意を起こさした。初めに笑つた人々も、ある者は立去つたが、ある者はしだいに口をつぐんでしまい、見物をやめることができかねた。クリストフが立ち去るときには、皆親しく挨拶あいさつをした。

クリストフが家に帰ってみると、親切なモークが心配して彼を待つていた。モークは喧嘩けんかのことを聞いて駆けつけて来たのだつた。喧嘩の原因を知りたがっていた。クリストフはオリヴィエをとがめたくなかつたので、はつきり言つてきかせなかつたが、モークはついにそれを察した。彼は冷静であり二人の友人の人柄を知っていたので、オリヴィエが負わせられてるちよつとした背信の行為というのは事実無根であることを、少しも疑わなかつた。そして事の起こりを調べにかかつて、その間違いはコレットとレヴィー・クールとの饒舌じょうぜつから来たものであることを、わけなく発見してしまつた。彼は大急ぎでもどつて来て、それをクリストフに証明した。それで決闘をやめさせるつもりだつた。しかし結

果は反対だった。クリストフは、レヴィー・クルルのせいで友に疑いをかけたのだと知ると、ますますレヴィー・クルルにたいして憤った。そして、決闘するなとしきりにモークが頼むので、その厄やっかい介ま介ま払いいをするために、なんでも言うとおりになると約束した。しかし決心を固めていた。こうなるとまったく愉快だった。決闘するのはオリヴィエのためだった。もう自分のためにはなかった。

馬車みちが森の中の径みちを進んでいるうちに、介添人の一人が発した言葉は、突然クリストフの注意を呼び起こした。彼は介添人らが考えてることを読み取ろうとつとめた。そして、彼らがいかに自分にたいして無関心であるかを知った。バルト教授は、何時ごろこの片がつくかを考え、国民文庫の原稿のために始めていた仕事をその日のうちに終えられるくらいに、家に帰れるかどうかと考えていた。それでもクリストフの三人の連れのうちでは、ゲルマンの自負心から決闘の結果をもっとも気づかっている人だった。グージャールのほうは、クリストフのことも一人のドイツ人のことも念頭に置かずに、猥褻わいせつ心理の露骨な問題について医者あまがさのジュリアンと話していた。このジュリアンは、トゥールーズ生まれの若い医者で、最近クリストフと同階の隣人となり、ときどきアルコールランプや雨傘あまがさや

コーヒー皿^{さつ}などを借りに来ては、いつもこわして返すのだった。その代わりには無料で診察をしてやり、いろいろの薬劑をすすめ、そして彼の率直な性質を面白がっていた。スペインの貴族みたいなのにその冷静さの下には、絶えざる嘲^{ちやうろう}弄^{ちやうろう}が潜んでいた。彼はこの決闘事件をひどく面白がり、それを道化じみたものと思っていた。そして前もって、クリストフの無器用さを当てにしていた。人のよいクラフトの金で森の中を馬車で散歩するなどとは、愉快なことだと思っていた。——そしてそれは明らかに、また三人一様の考えだった。彼らはこの事件を、費用のかからない遊山^{ゆうざん}だと見なしていた。だれも決闘に重きをおいてはしなかった。それにまた皆落ち着き払^{はら}って、あらゆる不慮の出来事をも覚悟していた。

彼らは相手方よりも先に約束の場所へ到着した。それは森の奥の小さな飲食店だった。パリー人らがその名譽を洗い清めに来る、やや不潔な遊び場所だった。生籬^{いけがき}には清い野薔薇^{ばら}が花を開いていた。青銅色の葉をつけてる櫛^{かし}の木立の陰に、小さなテーブルが設けられていた。三人の自転車乗りがその一つに陣取っていた。一人は白粉をぬりたてた女で、半ズボンに黒い半靴^{くつした}下^{した}をはいていた。他の二人はフランネルの服をつけた男で、暑さうんざりして、言葉を忘れたかのようにときどき唸^{うな}り声を出していた。

馬車がついたのでその飲食店はちよつとこたごたした。グージャールはずつと以前から

その家と人々を知っていたので、自分がすべて引き受けると言った。パールトはクリストフを青葉棚だなの下へ引つ張つていつて、ビールを命じた。空気は気持よく暖まっつていて、蜜蜂みつばちの羽音が響いていた。クリストフは何しに来たのか忘れていた。パールトはビールを一本空からにしながら、ちよつと沈黙のあとに言った。

「僕は仕事の予定をたててみた。」

彼は一杯飲んで言いつづけた。

「まだ時間があるだろうから、済んだあとでヴェルサイユに行くつもりだ。」

グージャールが主婦かみさん相手に決闘場所の借り賃を値切つてる声が聞こえていた。ジュリアンは時間を無駄むだに費やしてはいなかった。自転車乗りたちのそばを通りすぎりに、女の裸すねの脛すねを騒々しくほめた。それにつづいて卑猥ひわいな言葉が一時に落ちかかってくるが、彼も負けてはいなかった。パールトは小声で言った。

「フランス人で実に穢けがらしい奴らだ。君、僕は君の勝利を祈つて飲むよ。」

彼はクリストフのコップに自分のコップをかち合わせた。クリストフは夢想にふけていた。音楽の断片が虫の調子よい羽音とともに頭に浮かんでいた。眠たくなっていた。

他の馬車の車輪むちが径みちの砂すなに音をたててきた。いつものように微笑ほほえんでるリュシアン・レ

ヴィー・クルルの蒼白い顔を、クリストフは認めた。そして憤怒の念が眼覚めた。彼は立ち上がった。バルトがあとからついて来た。

レヴィー・クルルは大きな襟飾りを首にまきつけ、ごく念入りの服装をしていた。その様子は相手クリストフの無頓着な様子と、いちじるしい対照をなしていた。彼のあとから降りて来たのは第一にプロシユ伯爵で、多くの情婦や、古い聖体盒の蒐集や、過激王党主義の意見などで、世に知られてる戸外運動家だった。——つぎには、レオン・ムーエーというやはり流行児で、文学方面から代議士となり、政治上の野心によって文学に従事していて、年若く、頭は禿げ、髯を生やさず、蒼白い怒りっぽい顔つき、長い鼻、丸い眼、鳥のような格好の頭をしていた。——最後には、エマニュエルという医者で、ごくすつきりしたセム人型の親切な同時に冷淡な男であつて、医学院の会員であり、ある病院の長であつて、学者的な著書や医学上の懷疑説などで有名となり、その懷疑説のあまりにいつも、病人の愚痴を皮肉な憐憫の念で聞くばかりで、病気をなおしてやろうとは少しもしないのだった。

その新来の人たちは丁寧な挨拶をした。クリストフはろくに答礼もしなかった。そして自分の介添人らがせかせかしたり、レヴィー・クルルの介添人らにひどく慇懃な態度

を示したりしてるのを、不満の念で見とった。ジュリアンはエマニユエルを知っており、グージャールはムーエーを知っていた。二人はにやかな阿諛あゆ的な様子で近寄っていった。ムーエーはそれを冷やかな丁寧さで迎え、エマニユエルは嘲あざけり気味の無遠慮さで迎えた。ブロシユ伯爵のほうは、レヴィー・クルルのそばに残っていて、じろりと一目で相手方の上着下着を評価し、そしてレヴィー・クルルと、短いおどけた意見をほとんど口を結んだまま言いかわしていた。——二人とも落ち着き払ってきちんとしていた。

レヴィー・クルルは、決闘の指揮をとつてるブロシユ伯爵の合図を、泰然として待っていた。彼はその事件を単なる形式だと考えていた。彼は射撃に長じていたし、相手の無器用さを十分知っていたので、介添人らがこの決闘は無事にすむものと気にもかけないでいる場合なのにかかわらず、自分の得手を利用して相手に弾丸を命中させようなどは、思つてもいなかった。相手をわけなく片付けるほうがはるかに容易であるのに、さあ射殺するぞという様子ばかりをしてみせるのは、この上もなく馬鹿げたことだと知っていた。しかしクリストフのほうは、上衣をぬぎ捨て、シャツをくつろげて、太い首筋とたくましい拳こぶしとを示しながら、額ひたいを下げ、レヴィー・クルルを見つめ、元気いっぱいになって待ち受けていた。殺害の意志がその顔つきにありありと浮かんでいた。その様子を観察していた

ブロシユ伯爵は、文明が決闘の危険をできるだけ防止せんとしたのは幸いなことだと、考えていた。

二つの弾丸が両方から発射されたが、もちろん被害は少しもなかった。介添人らは争つて二人の無事を祝した。それで名譽は満足されたわけである。——しかしクリストフは満足しなかった。もう済んだのだとは思わずに、ピストルを手にしたままつつ立っていた。前日射撃場でやったように、弾丸が命中するまで打ち合いたがっていた。相手と握手するようにグージャールから言われると、その茶番狂言が癪しやくにさわった。相手は例のいつに変わらぬ微笑を浮かべて、彼のほうへ堂々と進み出て来た。彼は怒って武器を投げ捨て、グージャールを押しつけて、レヴィー・クールに飛びかかった。人々は一生懸命に骨折つてようやく、彼が拳固げんこでなぐり合おうとするのを止めた。

介添人らが中に立つてるまに、レヴィー・クールは遠のいていた。クリストフは人々から離れて、その笑い声やとがめる声を耳にもいれずに、大声に口をきき激しい身振りをしながら、森の中をさして大股おおまたに歩み去った。そこに上衣と帽子とを置き忘れたことにも気づかなかつた。そして森の中へはいり込んでいった。自分の介添人らが笑いながら呼んでるのが聞こえた。がやがて彼らも疲れて、もう彼のことを構わなかつた。間もなく馬車

の音が遠ざかってゆき、彼らの立ち去ったことがわかった。彼は黙々たる木立の間に一人残った。怒りは静まった。彼は地面に身を投げ出して、草の中に寝そべった。

それからほどなく、モークがその飲食店にやって来た。朝からクリストフを追っかけ回して居るのだった。森の中にクリストフがいることを聞いて捜し始めた。あらゆる茂みを見回り、反響こだまを起こして呼ばわり、それから空むなしくもどりかけたが、そのとき歌声を聞きつけた。その声のほうへ進んでいってみると、クリストフはある小さな空地に、子牛のように仰向けにひっくり返っていた。クリストフはモークの姿を見ると、快活に声をかけ、

「親愛なモロツク」と呼び、相手の身体を穴だらけにしてやったと話した。そして、無理に背飛び遊戯の相手をさせ、向こうにも飛ばせ、また自分が飛ぶときには、ぴしりとその背をひどくたたきつけてやった。モークも他愛なく、下手へたではあるが彼と同じくらいに面白かった。——二人は腕を組み合わせて飲食店にもどって来、それから近くの駅で汽車に乗ってパリへ帰った。

オリヴィエはその出来事を知らなかった。彼はクリストフのやさしい態度に驚かされ、その急な変わり方が腑ふに落ちなかった。翌日になってようやく、クリストフが決闘したことを新聞で知った。クリストフが冒した危険のことを考えると、気持が悪くなるほどだっ

た。彼はその決闘の理由を知りたがった。クリストフは話さなかった。あまりうるさく聞かれて、笑いながら言った。

「君のためにだ。」

オリヴィエはそれ以上一言も聞き出し得なかった。モークが事情を話してくれた。オリヴィエは駭然として、コレットと交わりを絶ち、自分の不謹慎を許してくれとクリストフに願った。クリストフは頑として聴き入れず、二人の友の幸福なさまをうれしげにがめてる人のよいモークが腹をたてるのも構わずに、フランスの古い諺を勝手に意地悪くもじつて誦してきかした。

「君、うっかり人を信用するものでないことがわかるだろう……。」

隙なお饒舌娘から、

にせ信心のおべつかユダヤ人から、

うわべばかりの友だちから、

馴れ馴れしい敵から、

そして気のぬけた葡萄酒から、

「主よわれらを救いたまえ！」

友情は回復された。危うく友情を失うかもしれない恐れに臨んだために、その友情はいつそう濃こまやかになった。つまらぬ誤解は消えてしまった。二人の性格の差異がかえって二人をひきつける種となった。クリストフはその魂のうちに、和合した両国の魂を包み込んだ。彼は自分の心が豊かで充実してるのを感じた。そしてその楽しい豊満は、彼にあつてはいつものとおりに音楽の流れとなつて現われた。

オリヴィエはそれに驚嘆させられた。そして過度の批評癖から彼は、自分の愛する音楽はもう窮極に達してるのだと信じがちだった。ある程度の進歩の後には必然に頹たい廢はいが来るといふ、病的な観念にとらえられていた。自分に生を愛さしてくれたその美うつくわしい芸術が、突然行きづまって涸こ渴かつし地面に吸い込まれてしまひはすまいかと、びくびくしていた。クリストフはそういう意気いき地じない考えを面白がった。そして物に逆らいたい精神から彼は、自分より以前には何一つでき上がったものもなく、すべてがこれからできるのだと言ひ出した。オリヴィエはフランスの音楽を例にもち出した。フランスの音楽はある完成さと終局の発展との域に達していて、それから先にはもう何もあり得そうにないのだった。クリ

ストフは肩をそびやかした。

「フランスの音楽だつて？……フランスには音楽なんかまだありはしない……。だが君たちフランス人は、いろいろりっぱなものを作ることができるはずだ。ただ君たちはあまり音楽家ではないから、作ろうという気をつけて起こさなかつたのだ。ああ僕がもしフランス人だつたら！」

そして彼は、フランス人が書き得るすべてのことを列挙してみせた。

「君たちは柄にもない種類のものばかりに気を向けて、自分の才能に適したものは何一つ作っていない。君たちは、優雅と、華美な詩と、身振りや足取りや態度や流行や服装などの美とをもつてる、民衆である。そして、詩的舞蹈の比類ない一芸術を創り得たはずなのに、もう今では舞踊劇を書く者がいない……。——君たちは、知的な笑いをもつてる民衆である。それなのに、もう喜歌劇を作りもしないし、または喜歌劇を、音楽以下の者どもの手に委ねてる。ああ僕がもしフランス人だつたら、僕はラブレールのものを音楽にし、滑稽の手に委ねてる。ああ僕がもしフランス人だつたら、僕は小説家的民衆である。それなのに、物語叙詩を作つてやるんだが……。——君たちは小説家的民衆である。それなのに、物語音楽を作っていない（というのは、ギユスターヴ・シャルパンティエの通俗物なんかは、物語音楽とは言えないから）。君たちは心理解剖の天分や性格洞察力などを利用して

ない。ああ僕がもしフランス人だったら、僕は音楽で性格描写をやってみせるんだが……
 (下の庭のリラの花陰にすわってるあの少女を描いてみせようかね。) 弦楽四重奏曲でスタンダードみたいなものを書いてやるんだが……。——君たちはヨーロッパのもつともすぐれた民主的な人々である。それなのに、民衆劇ももたなければ、民衆音楽ももっていない。ああ僕がもしフランス人だったら、あの大革命を、一七八九年七月十四日、一七九二年八月十日、ヴァルミーの戦い、武装団結、などを音楽にし、民衆を音楽にしてやるんだが。それも、ワグナー流の法螺を事とする誤った種類のものではない。交響曲や合唱や舞踊なのだ。演説はいけない。演説には飽き飽きだ。無言なるかな！ 火と土と水と輝いた空とを、人の心を脹らす熱を、民族の本能的な運命的な伸長力を、幾百万の人を従属させ軍勢を死へ突進せしむる、世界の帝王たる律動の勝利を、合唱を伴う広い交響曲に、広漠たる音楽の風景面に、ホメロス式な聖書式な叙事詩に、太い筆致で描き出すのだ……。至る所に、すべてのものに、音楽を置くのだ。もし君たちが音楽家だったら、君たちは社会的祝祭のそれぞれに、公式の盛典に、労働組合に、学生連合に、家庭的な祝いに、音楽をもつだろう……。しかしまず何よりも、もし君たちが音楽家だったら、君たちは純粋な音楽を、何物をも意味しない音楽を、何物にも役だたずにただ、人を温め

息づかせ生かすだけの音楽を、作り出すだろう。太陽の光を作るべしだ！ サート・プラタ……（牧場は十分に……雨を得たり）……（なんで君はそれをラテン語で言いたがるんだ？）……実際君たちのうちにはかなり雨がが多い。君たちの音楽に浸ると僕は風邪かぜをひきそうだ。よく見えないから、ランプをつけたまえ……。君たちの劇場に侵入し、君たちの公衆を征服し、君たちを自宅から追い出してる、あのいわゆるイタリーの豚小屋を、君たちは現在不満に思ってるじゃないか。だがそれは君たちのほうが悪いのだ。公衆は、君たちの黄昏たそがれの芸術に、調子のよい神経衰弱に、対位法的な術学げんがく趣味に、飽いてしまってるのだ。生活が野卑なものであろうとなかろうと、公衆は生活のあるほうへ行くものだ。なぜ君たちは生活から引退してるのか。君たちのドビュッシーは偉い芸術家だが、しかし健康にはよくない。彼は君たちの無氣力を助長している。君たちは手荒く揺り覚まされなければいけない。」

「ではシュトラウスをきけというのか。」

「それもいけない。君たちを破滅させるばかりだ。そんな不養生な物を飲み込んでもちこたえるには、僕たちドイツ人みたいな胃袋をもっていないくちやいけない。でもドイツ人でさえ実はもちこたえ得ないんだ……。シュトラウスのサロメ……。傑作だ……。けれど僕はそ

れが書かれたことを好まない……。僕は憐れな老祖父や叔父ゴットフリートのことを思い出す。彼らはいかに深い尊敬としみじみとした愛情とで、この音響の逸品たるサロメのことを僕に話してきかしたろう！……ああいう崇高な力を自由に駆使し、しかもあんなふうで使用するのは！……それは炎を発してる流星だ！ ユダヤの娼婦たるイゾルデ姫だ。痛ましい獣的な淫乱だ。ドイツの頹廢の底に唸つてる、殺害や強姦や不倫や犯罪などの熱狂だ……。そして、君たちのほうには、フランスの頹廢のうちに呻いてる、逸樂的な自殺の発作がある……。一方は獣、そして一方は餌食。それで人間はどこにいるのだ？ ……君たちのドビュッシーは良趣味の天才であり、シュトラウスは悪趣味の天才である。前者は無味乾燥であり、後者は不愉快である。一方は、銀色の池であつて、葦の中に隠れ、熱気ある匂いを発散させている。一方は、泥立った急湍であつて、……末期イタリー趣味と新マイエルベール式との匂いがあり、感情の醜悪な塵芥がその泡の下に流れている……。嫌悪すべき傑作だ。イゾルデの生み出したサロメだ。……そしてこんどはサロメから、何者が生まれるかわかつたものではない。」

「そうだ、」とオリヴィエは言った、「半世紀ほど前進したいものだ。こういうふうに深淵に向かつて突進することは、どうにかしてやめなければいけないだろう。あるいは馬

が立ち止まるか倒れるかしてもいい。そのときになってわれわれは息がつけるだろう。あ
りがたいことには、音楽があつてもなくても、やはり地には花が咲くだろう。こんな非人
間的な芸術になんの用があるのだ！……西欧は燃えつきてる……がやがて……やがて……
いや僕にはもうすでに、立ちのぼってくる他の光明が見える、東方の彼方に。」

「君の東方諸国のことなんかよしてくれ！」とクリストフは言った。「西欧だつてまだ終
局には達していない。君はこの僕が諦めをつけるとでも思つてるのか。まだ未来幾世紀も
ある。生活は万歳なるかなだ。喜びは万歳なるかなだ。運命との戦いは万歳なるかなだ。
われわれの心を脹れ上がらしむる、愛は万歳なるかなだ。われわれの信念を温めてくれる
友情は——愛よりもなお楽しき友情は、万歳なるかなだ。昼は万歳なるかなだ。夜は万歳
なるかなだ。太陽に光栄あれ！ 神を讃め称えんかな、夢想と実行との神を、音楽を創れ
る神を！ ホザナ！……」

そこで彼はテーブルについて、今まで何を言つたかはもう考えないで、頭に浮かんでく
ることを書きとめた。

クリストフはそのとき、彼のすべての生の力が完全に平衡してゐる状態にあつた。あれやこれやの音楽形式の価値に関する美学的論議にも、または新しいものを創造せんとする合理的探究にも、煩わされることがなかつた。音楽に移すべき題目を見出すために骨折する必要さえなかつた。彼にとつてはすべてのものがいいのだった。音楽はひとりでに滔々とうとうと流れ出してきて、いかなる感情を表現してゐるのか彼自身でも知らなかつた。彼はただ幸福であるばかりだつた。自分を発露することが幸福であり、自分のうちに普遍的な生命の脈みやく搏はくを感じるのが幸福であつた。

そういう喜びと豊満とは、彼の周囲の人々へも伝わつていった。

四方ふさがつてゐる庭園付きのその建物は、彼にはあまりに小さすぎた。大きな径みちと百年以上の古木とのある静寂な隣の修道院の広庭を、初めは見おろすことができたいけれど、それはあまりによすぎて長つづきはしなかつた。ちようどクリストフの室の窓の正面に、七階建ての家が建築されかかつていて、そのために眺ちようぼう望がさえぎられ、クリストフは四方を閉ざされてしまった。愉快なことには、滑車のきしる音や、石をけずる音や、板を打ち付ける音などが、毎日朝から晩まで聞こえてきた。その労働者の間には、先ごろ彼が屋根の上で知り合いになつた屋根職人もいた。二人は遠くから合図で親しみを通じ合

った。あるときなど、彼はその職人に往来で出会って、酒場へ連れて行き、いっしょに飲んだことさえあった。オリヴィエはびつくりして眉をしかめた。がクリストフは、その男の滑稽な饒舌といつも変わらぬ上機嫌とを愉快がっていた。それでも彼はやはり、その職人や仲間の勤勉な動物どもが、家の前に障壁を築き上げ、光を奪うことを、呪わずにはいられなかった。オリヴィエはあまり不平をこぼさなかった。眼界をふさがれることに慣れていった。あたかも圧搾された思想が自由な空へ吹き出すデカルトの暖炉に似ていた。しかしクリストフには空気が必要だった。彼はその狭い場所に幽閉されて、そのうめ合わせとして、周囲の人々の魂へ交渉していった。それらの魂を吸い込んで、それを音楽とした。オリヴィエは彼が恋でもしているような様子だと言った。

「もし僕が恋をしたら、」とクリストフは答えた、「僕は自分の恋愛以外のものは、何物も見ず、何物も愛せず、何物にも興味をもたなくなるだろうよ。」

「ではいったいどうしたんだ？」

「ごく達者なんだ、腹がすいてるんだ。」

「君は幸いだ！」とオリヴィエは嘆息した。「君の食欲を、僕らにも少し分けてくれるといいがね。」

健康は感染的なものである——ちようど病氣のように。その健康の力の恩恵を最初に感じたのは、もとよりオリヴィエだった。そしてその力こそ、彼にもっとも不足してるところのものだった。彼は世の卑陋ひろうさが厭いやになつて、世の中から引退していた。大なる知力と異常な芸術家的天分とをもつていながら、大芸術家となるにはあまりに繊弱だった。およそ大芸術家たるものは、何物をもいやがらないものである。あらゆる健全なる者の第一の掟おきては、生活するということである。天才にあつてはそれがなお強力となる。天才はより多く生活するからである。ところがオリヴィエは生活から逃げていた。身体も肉も現実との関係もない詩的作為の世界に、漂い浮かんでいた。世には、美を見出そうとして、もう過ぎ去つた時代のうちに、もしくははかつて存在しなかつた時代のうちに、美を捜し求めたがる人々がいるが、オリヴィエもその一人だった。人生の飲料は、今日では昔ほど人を酔わせるものではないと思つてるかのようにである。かかる疲れた魂の人々は、人生との直接の接触をきらい、人生を堪え得るのはただ、過去の隔てによつて織り出される幻影の帷とぼりを通してであり、昔生きてた人々の死語を通してである。——クリストフとの交わりは、オリヴィエをそういう芸術の幽界からしだいに引き出した。彼の魂の深所に、太陽の光がさし込んできた。

技師のエルスベルゼもまた、クリストフの樂觀主義に感染していった。でもそれは彼の習慣の変化となって現われはしなかった。彼の習慣はあまりに根深いものだった。フランスを去つて他国へ成功を求めに行くほど、彼の氣持を冒險的にならせることは、とうてい望み得られなかった。それはあまりに大なる要求だった。しかし彼は無氣力の状態から脱した。長い前から打ち捨てている研究や読書や科学的の仕事に、ふたたび趣味をもちだした。かく自分の職業に興味がふたたび眼覚めてきた原因は多少クリストフにあるということ、彼は聞かされたら定めし驚いたであろう。そしてクリストフのほうはさらに驚いたであろう。

家じゆうでクリストフがもつとも早く交際を結んだのは、三階の小さいほうの部屋の人たちだった。彼はその扉とびらの前を通るとき、一度ならずピアノの音に耳傾けた。それは若いアルノー夫人が一人きりのときに好んでひいてるものだった。そこで彼は、自分の音楽会への切符をその夫妻へ送った。彼らはそれを心から感謝した。それ以来彼は晩にときどき訪問してみた。若い婦人の演奏はもうまったく聞こえなくなった。彼女は非常に内気で人前ではひけなかった。一人きりのときでさえ、階段から聞く人があることを知ってる今で

は、弱音器をかけることにしていた。しかしクリストフは夫妻のために演奏してやった。そして皆で長く音楽の話にふけた。アルノー夫妻は若々しい心で話し、クリストフはそれをたいへん喜んだ。これほど音楽を愛するフランス人があるとは、彼は思っていなかったのである。

「それは君が今まで、」とオリヴィエは言った、「音楽家にしか会わなかったからだ。」
 「僕だつて、」とクリストフは答えた、「音楽家はもつとも音楽を愛しない者であることを知っている。しかし君たちのような人がフランスに多数あるとは、僕にはどうしても考えられない。」

「数千人いるさ。」

「それでは、それは一種の流行病だ、ごく最近の流行だろう。」

「流行の事柄ではありません。」とアルノーは言った。「楽器の楽しき和音や自然の声の楽しきを聞きながら、それを少しも悦ぶことなく、少しも感動することなく、楽しき歓喜の情に頭より足先まで戦くことなく、われを忘れることもできざる者は、不徳なるゆがめる墮落せる魂をもてるしるしにして、かかる者にたいしては、生まれ悪しき者にたいするがごとくに、人は注意を要するなり……。」

「それは僕も知ってます。」とクリストフは言った。「わが親愛なシェイクスピヤの言葉です。」

「いいえ。」とアルノーは穏やかに言った。「シェイクスピヤよりも前の人、わがロンサールの言葉です。音楽を愛するのが流行にしても、フランスでは、昨今に始まったのではないことがおわかりでしょう。」

しかし、クリストフを多く驚かしたのは、フランスにおいて音楽が愛されてるということとよりもむしろ、ドイツにおけるとほとんど同じ音楽が愛されてるということだった。彼が最初見たパリーの芸術家や当世人などの間では、ドイツの大家らをすぐれた他国人として取り扱うことが普通だった。彼らは賞賛を拒みはしなかったが、一定の距離をおいていた。そしてグルツク式の鈍重さやワグナー式の野蛮さなどを好んであざけり、それにフランスの精緻せいせいさを対立たいりつさせていた。実際クリストフもついには、フランスで実演されてるような方法では、フランス人がドイツの作品を理解し得るかを怪しんだ。彼はあるとき、グルツクの作品公演から不快を感じてもどつて来た。巧みなパリー人らは、この恐ろしい老人グルツクに化粧させようとしていた。彼らは彼を塗りたて、彼にリボン結びつけ、彼の律動リズムに真綿を着せ、印象派的色彩で、淫逸いんいつな顔たいはい糜はいの色でその音楽を飾りたてていた

……。気の毒なグルツクよ！ その心の雄弁さから、その道徳的純潔さから、その赤裸な悲痛さから、何が残っていたであろう？ フランス人がそれらを感じ得ないせいではなかつたろうか。——しかるにクリストフは今、ゲルマン魂の中に、ドイツの古い歌曲リートの中に、ドイツの古典芸術の中にもっとも根深く存在してるところのものにたいして、新しい友人らが深いやさしい愛情をいだいてることを、見てとつたのだつた。そして彼らに、それらドイツの大家連が彼らには他国人と思えるということや、フランス人がまったく愛し得るのは同民族の芸術家のみであるということなどは、ほんとうではなかつたのかと尋ねてみた。

「ほんとうなものですか！」と彼らは抗弁した。「批評家どもがわれわれの代弁をしてるのだと、勝手に自称してゐるのです。彼らはいつも自分らが流行に従つてゐるので、われわれまで流行に従つてゐるのだと言つています。しかし彼らがわれわれを気にかけていないと同様に、われわれのほうでも彼らを気にかけてはいません。彼らはまったく滑稽こっけいな馬鹿者どもで、フランス式であるものとなしものをわれわれに教えたがっています、古いフランスの生粹きつすいのフランス人たるわれわれに向かつてです……。彼らはわれわれに向かつて、わがフランスはラモーの中に——もしくはラシーヌの中に——あつて、他にはないと高言

しています。そしてベートーヴェンやモーツァルトやグルックが幾度か、われわれの炉のほとりに来て腰をおろし、われわれの愛する人々の枕^{まくら}辺でわれわれとともに夜を明かし、われわれの苦痛を分かちない、われわれの希望を力づけ……われわれの家庭の人となつたということ、まるで知らないかのようです。けれどわれわれの考えを明らかに言えば、わがパリーの批評家どもから祭り上げられてるフランスの某芸術家などこそ、われわれにとつてはむしろ他国人なのです。」

「実際のところ、」とオリヴィエは言った、「もし芸術に国境があるとすれば、その国境は人種間の境界というよりも、階級の間の境界と言うべきだ。フランスの芸術とかドイツの芸術とかいうものがあるかどうか、僕は知らない。しかし富んでる者らの芸術があり、また、富んでいない者らの芸術がある。グルックは偉大なる中流人であつて、われわれと同階級のものである。ところが、僕は今はつきり名ざしたくないが、フランスの某芸術家などはそうでない。彼は中流階級に生まれてはいるけれど、われわれを不名誉だとし、われわれをしりぞけている。それでわれわれのほうでも、彼をしりぞけてるのだ。」

オリヴィエの言うところは真実だった。クリストフはフランス人をよく知れば知るほど、フランスの善良な人々とドイツのそれらとの間の類似に驚かされた。アルノー夫妻は、芸

術にたいするその純潔な私心なき愛や、自己忘却や、美しきものにたいする奉仕などによって、彼にあの親愛なるシウルツ老人を思い起こさした。そして彼はシウルツ老人の思い出のために、彼らを愛した。

クリストフは、異なつた民族の善良な人々の間に精神的国境を設けることの愚かさを見出すと同時に、同一民族の善良な人々の異なつた思想の間に国境を設けることの愚かさも見てとつた。そして彼のおかげで、しかも彼が求めたことではなかつたが、もつともたがいに理解しがたいと思われた二人、牧師コルネイユとヴァトレー氏とは、たがいに知り合いになつた。

クリストフはその二人から書物を借りていた。そしてオリヴィエがいやがつたほどの無遠慮さで、彼はその書物をまた一方のほうに貸していた。コルネイユ師はそれを別段不快ともしなかつた。彼は人の魂にたいする直覚力をもつていた。そして若い隣人クリストフの魂中に、みずから知らずに宗教的なものがあることを、それとなく読みとつていた。ヴァトレー氏から借り出されたクロポトキンの一冊は、種々の理由から三人ともに好きな書物であつて、それが接近の初めとなつた。ある日偶然にも三人はクリストフのもとで落ち

合った。クリストフは初め、二人の客の間に面白からぬ言葉がかわされはすまいかと恐れた。しかし反対に二人は、非常な丁寧さを示し合った。彼らは安全な話題について話をした、旅行の話や、他人にたいする経験談など。そして彼らは二人とも、絶望すべき多くの理由をもつてたにもかかわらず、架空的な希望や福音書的な精神や温厚さなどに満ちてることを、二人とも示した。彼らはたがいに相手にたいして、ある皮肉さの交じった同情の念を覚えた。ごく慎み深い同情の念だった。彼らはけっしてたがいの信仰の奥底に触れ合わなかった。たがいに会うことはごくまれであり、また会おうとも求めなかった。しかし顔を合わせるときにはそれを喜んでいた。

二人のうちでコルネイユ師のほうがより独立的な精神をもっていた。クリストフは初めそれを予期していなかった。がしだいにクリストフは、彼の宗教的な自由な思想が、力強い清朗な熱のない神秘観が、きわめてしつかりしてることを認めていった。その神秘観は、彼の牧師としてのあらゆる思想、日常生活のあらゆる行為、あらゆる世界観照のうちに、沁み通つていて、あたかもクリストフが神のうちに生きていたと彼が信じてるところと同じように、彼をクリストフのうちに生きさしていた。

彼は何物をもいかなる生の力をも、否定しなかった。彼にとっては、あらゆる宗教書は、

古きと新しきとを問わず、宗教的なものと世俗的なものとを問わず、モーゼからベルトロ
 ーにいたるまで、皆確実なものであり、崇高なものであり、神の言葉であった。そして、
 聖書はただそのもつとも豊かな見本であつて、神のうちに結ばれたる同胞愛のもつとも高
 い優秀者が教会であるのと同じだった。しかしその聖書も教会も、一定不動な真理のうち
 に人の精神を閉じこめるものではなかつた。キリスト教は、生けるキリストにほかならな
 かつた。世界の歴史は、神という觀念の不斷の生長の歴史にすぎなかつた。ユダヤ聖堂の
 没落、異教の世界の衰滅、十字軍の失敗、法王ボニファス八世の屈辱、眩暈めまいするばかりの
 広い空間に地球を投げ出したガリレオ、大なるものよりもさらに力強い極微なるもの、王
 権の終滅と和親コンコルダ条約の絶滅、すべてそれらのものは、一時人心を途方にくれしめた。ある
 人々は倒壊しかけてるものに必死とすがりついた。またある人々は手当たりしだいに板子
 をつかんで漂流した。しかるにコルネイユ師はただみずから尋ねた、「人間はどこにいる
 のか？ 人間を生きさせるものはどこにあるのか？」なぜなら彼は、「生のあるところに
 神がある、」と信じていたから。——そしてまたそれゆえに、彼はキリストフにたいして
 同感をもつていた。

クリストフのほうでも宗教的な偉大な魂の美うらわしい音楽をふたたび聞くのはうれしかつ

た。それは彼のうちに遠い深い反響を呼び起こした。不断の反動的な感情——強健な性質の人にあつては、生の一本能であり、自己保存の本能であり、あぶな危い場合に平衡を立て直して船を新たに躍進せしむるか權の一撃であるところの、不断の反動的な感情——それによつて、クリストフの心の中には、パリーの極端な疑惑と忌まわしい快樂主義とに接して、二年以前から、少しずつ神がよみがえつてきつつあつた。と言つて彼は神を信じてるのではなかつた。神を否定していた。しかし神に満たされていた。彼はその守護神たる善良な巨人のように、みずから知らないで神になつてるのだと、コルネイユ師はほほえ微笑みながら言つた。

「ではなぜ僕には神が見えないのでしょうか？」とクリストフは尋ねた。

「あなたも他の多くの人たちと同様です。毎日神を見てはいるが、それを神だと知らないのです。神は種々の形で万人におのれを示しています——ある者には、ガリラヤにおける聖ペテロへのように、その日常生活のなかで——ある者には、（たとえばあなたの友人のヴァトレー氏には、）聖トマスへのように、ちゆ治癒を求めてる傷や苦痛のなかで——あなたには、おごそかなる理想のなかで、われに触るるなかれのなかで……。いつかあなたも神を認めるようになるでしょう。」

「いやけつして僕は讓歩しません。」とクリストフは言った。「僕は自由です。」
 「それならばなおさら神とともにいることになるでしょう。」と牧師は穏やかに言い返した。

しかしクリストフは、自分の心に反してキリスト教徒とされることを許し得なかった。自分の思想に何かの符牒ふちようをつけられることがさも問題でもあるように、率直な熱心さで自分を守った。コルネイユ師は、ほとんどわからないくらいわずかな聖職的皮肉と多くの温情とで、彼に耳を傾けた。彼はその信仰の習慣に基づいてる不撓ふたうの忍耐をもつていた。現時の教会が受けてる困難から鍛えられていた。それらの困難のために大なる憂鬱を投げかけられながらも、また痛ましい精神上の危機を通過することさえ強しいられながらも、心の底は少しも害せられないでいた。もとより、上に立つ人々から圧迫され、あらゆる行動を司教らからうかがわれ自由思想家らからねらわれ、両者から争って思想を利用され自分の信仰に反する役目をさせられ、同宗者と反対者との両方から等しく理解されずに攻撃されるのは、残酷なことには違いなかった。反抗することはできなかつた、なぜなら服従しなればならなかつたから。けれど心から服従することはできなかつた、なぜなら当局者のほうが間違つてるとわかつていたから。口をきき得ない苦しみ。口をきいて誤解され

る苦しみ。なおその上に、自分に責任がある他の多くの魂の存在、忠言を助力を求めつつ明らかに苦しんで多くの人々の存在……。コルネイユ師はそれらの人々のためにまた自分のために苦しんだ。しかし彼は忍従した。教会の長い歴史に比ぶれば、それらの困難の日々はいかに些さし少なものであるかを知っていた。——ただ、無言の忍諦にんていのうちに潜み込んでばかりいる間に、彼は徐々に貧血してゆき、ある臆おく病びょうさに、口をきくことを恐れる気分に、いつしかとらわれていつて、わずかな行動もますますなしがたくなり、しだいに無言無為のうちに陥っていった。それをみずから感ずると、悲しくはあつたが、しかしもう反抗しようとはしなかつた。ところがクリストフと出会つたことは、彼にとって大なる支持となつた。その隣人が示す年少気鋭な熱意や率直なやさしい同情は、また時としては不謹慎なその質問は、彼にとつて非常にためになつた。クリストフは彼を強しいて、生者の仲間に立ちもどらしめた。

電気職人のオーベルが、あるときクリストフの室で、この牧師と出会つた。彼は牧師の姿を見るとびつくりした。嫌悪けんおの情をなかなか隠し得なかつた。その最初の感情を押えたあとでもなお、この法服の男と顔を合わせると、いつもある気づまりな変な当惑を覚えた。彼にとつては、法服の男などはなんと云つてよいかわからない人物なのだった。それでも、

教養ある人々と話をするうれしさから、はんそうりよ反僧侶主義の気持を制してしまった。彼はヴァ
 トレー氏とコルネイユ師との間の親しげな調子に驚いた。民主的な牧師と貴族的な革命家
 とを見出したことにも、やはり同じく驚いた。それは彼がこれまで得てるあらゆる観念を
くつがえ覆すものだった。彼は社会上のいかなる部類に彼らを置くべきかを迷った。彼は人を理解
 せんがために分類する必要を感じてたのである。ところが、アナトール・フランスやルナ
 ンのものを読み、それについて正当な正確な言葉を平気でくだしてる、この牧師の平穩な
 自由さは、いかなる所に置いてよいか容易にわからなかった。学問上の事柄においては、
 命令する人々からよりも知識ある人々から、コルネイユ師は導かれるのを常としていた。
 彼は権力を尊んではいた。しかしそれは彼にとつては、学問と同種のものではなかった。
 肉体と精神と慈愛、それは三つの部門であつて、崇高な梯子はしごの、ヤコブの梯子の、三つの
 段であつた。——善良なオーベルにはもとより、そういう精神状態を理解しがたかった。
 コルネイユ師はクリストフに、オーベルを見ると昔見たフランスの農夫たちのことを思い
 出すと、静かに話してきかした。一人の若いイギリスの女が、農夫たちに道を尋ねていた。
 彼女はイギリス語を話していた。農夫たちはそれがわからなかったけれど耳を傾けていた。
 それから彼らはフランス語を話した。彼女にはそれがわからなかった。すると彼らは気の

毒そうに彼女をながめ、頭を振って、また仕事にかかりながら言った。「でも気の毒だなあ、あんなにきれいな娘さんだが……。」

初めのうちオーベルは、牧師とヴァトレー氏との学殖や上品な態度に気圧けおされて、彼らの会話を鵜うのみにしながら黙っていた。がしだいに、自分の話を聞いてもらう素朴そぼくな喜びに駆られて、会話の中にはいつてきた。そして自分の漠然ばくぜんたる理論を並べた。相手の二人は内心いささか微笑しながら、丁寧に耳を貸してやった。オーベルは有頂天になって、なおそれだけでは満足しなかった。彼はコルネイユ師の限らない我慢を利用し、やがて凶にのってきた。苦心さんたん澹たんの原稿を読んできかせまでした。牧師はいつもあきらめて耳を貸していた。そしてさほど退屈してもいかなかった。というのは、相手の言葉よりも人間のほうに多く耳傾けていたから。それにまた、気の毒がつてるクリストフへ答えたとおりの理由もあった。

「なあに、あの人に限ったことはありません。」

オーベルはヴァトレー氏とコルネイユ師とをありがたがっていた。そしてこの三人は、たがいに相手の思想を理解しようともつとめずに、なぜとはなしにたがいに愛し合うようになった。そしてたがいにごく接近してるのを見出してびっくりした。彼らはそんなこと

をかつて思つたこともなかつた。——クリストフが彼らを結びつけていたのである。

クリストフはまた、エルスベルゼの二人の娘とヴァトレー氏の養女との三人に、無邪気な味方を見出した。彼は彼女らの友だちとなつた。彼は彼女らが孤立して暮らしているのを苦にした。そして彼女らのおのにおのに未知の隣人のことを噂して、たがいに会いたくてたまらない気を起こさした。で彼女らは窓から合図をかわしたり、階段でそつと言葉をかわしたりした。そのうえなおクリストフの尽力によつて、彼女らはときどきリュクサンブールの園で会う許しを得た。クリストフは計画が成功したのを喜んで、彼女らが出会う最初るときには、自分で様子を見に行つてみた。すると彼女らは、きまり悪がってもじもじして、新たなその幸福をどうしていいかわからないういた。彼はすぐに彼女らを打ち解けさせ、いろんな遊びや駆けっこや追いかけてを考へ出した。自分も十歳ぐらいな子供のように勢い込んで仲間入りした。散歩の人たちは、その大子供が大声をたてて駆け出したり、三人の少女に追われて木のまわりを回つたりしているのを、おかしそうに見やつていた。そして少女らの両親たちは、まだやはり疑念をいだいていて、リュクサンブールの遊びがたびたび繰り返されるのを、あまり好まないらしい様子だった——（なぜなら、彼らは娘をそばで監督することができなかつたから。）——それでクリストフは、一階に住

んでるシャブラン少佐に願つて、家の庭で彼女らを遊ばせる工夫をした。

偶然にも彼はシャブラン少佐と交際を結んでいた——（偶然はいつも自分を利用してくれる人々を見出し得るものである。）——クリストフの机は窓ぎわに置いてあつた。風のために楽譜の数枚が下の庭に飛ばされた。クリストフは例のごとく、帽子もかぶらず胸もはだけたままで、その楽譜を取りにいった。彼は下男に一言断わるだけのことだと思つていた。ところが扉とびらを開けてくれたのは若い娘だつた。彼は少しまごつきながら、やつて来たわけを述べた。彼女は笑顔をして彼を中にはいらせた。二人は庭へ行つた。彼が楽譜を拾い集めて、娘に送られながら急いで逃げ出そうとしてるとき、もどつて来た少佐に出会つた。少佐はびっくりした眼つきで、その異様な客をながめた。若い娘が笑いながら彼を紹介した。

「ああ、君がああの音楽家ですか。」と将校は言つた。「ちようどいい。われわれはお仲間です。」

彼はクリストフの手を握りしめた。二人は、クリストフはピアノで少佐はフルートでたがいに音楽を聞かせ合つてゐることを、隔てない皮肉な調子で話した。それでクリストフは辞し去ろうとした。しかし相手は彼を離さないで、際限もなく音楽談をやり始めた。それ

から突然話をやめて言った。

「僕のカノン（訳者注 大砲と追走曲と両様の意味あり）を見に来ませんか。」

クリストフは、フランスの大砲に関する彼の意見がなんの面白いことがあるものかと思いつながら、彼のあとについて行った。ところが少佐は得意げに、音楽上のカノン——追走曲を示した。それは一種の曲芸の楽曲であつて、終わりから読むこともできれば、表と裏と両面から二重奏することもできるのだつた。少佐は昔理工科学校の学生であつたところから、音楽にたいする趣味を常にもちつづけていた。しかし音楽のうちでもことにその難問題を好んでいた。彼にとつて音楽はりっぱな精神的遊戯らしく思われた——（一面においては音楽は実際そうである。）そして彼は音楽的な組み立ての謎を、どれもみな奇怪な無益なものではあつたが、一心に工夫してかけたり解いたりしていた。もとより軍職についてゐる間は、その嗜癖しへきに十分ふけるだけの隙ひまがなかつた。しかし退職してからはそれに熱中してしまつた。黒人王の軍隊を追跡してアフリカの沙漠さばくを駆け回つたり、または敵の策略から脱出した、その昔の精力を、ことごとくそれに費やしていた。クリストフはそれらの謎を面白がり、また自分のほうからもいつそう複雑な謎をかけてやった。将校は夢になつた。二人は知恵比べをした。両方で音楽上の難問題を連発した。十分遊んだあとに、

クリストフは自分の室にもどった。しかしその翌朝になると、彼はまた新しい問題を受け取った。それはまったく頭が割れるほどの難問題で、少佐が夜もろくに寝ないで考えたものだった。彼のほうからも応戦してやった。そして戦いはいつまでもつづいたので、ついにクリストフはめんどろくさくなって、負けたと言ひ出した。将校は大喜びだった。彼はその勝利を、ドイツにたいする復讐ふくしゅうのように考えていた。彼はクリストフを午餐ごさんに招待した。クリストフは少しも遠慮のない態度で、彼の音楽上の作品をけなしたり、彼がハーモニウムでハイドンのアンダンテを台なしにすると、大声をたてたりして、すっかり彼を征服してしまった。それ以来二人はかなりしばしば談話を交えた。しかしもう音楽のことについては話さなかった。クリストフは少佐の音楽上の談話を聞いてもつまらなかった。それで話を好んで軍事上のことにもつていった。それは少佐の望むところだった。不幸な彼にとつては音楽は無理に求めた気晴らしだった。心の底では弱りきっていた。

彼の話はよくアフリカ戦役のことに落ちていった。ピサロやコルテスにふさわしいような途方もない冒険談だった。その驚くべき野蛮な叙事詩がふたたび生き上がってくるのを見て、クリストフは呆然ぼうぜんとした。そんな話を彼は少しも知らなかったし、またフランス人自身もたいていは知っていなかった。しかし実際その話によると、一群のフランス遠征

者らが二十年もの間、勇氣と巧妙な胆力と超人間的な精力とを費やしながら、未開の大陸のまん中に踏み迷い、黒人の軍隊に包圍され、もつとも基本的な戦闘用具さえも十分になく、怖氣おしげついてる世論と政府との意に反してたえず戦い、フランスの意向に構わず、フランスのために、フランス自身よりもさらに大きな帝国を征服してるのであった。力強い喜びと血潮との匂においがその戦いから立ちのぼっていた。クリストフの眼には近世の傭兵ようへいの面影が、勇壮な冒険者の面影が、そこから浮かび上がってきた。それは現今のフランスには思いがけないものであり、現今のフランスが容認するのを恥じてるものであり、慎み深くその上に帷とばりを投げかけてるものである。しかるに少佐の声は、それらの思い出を呼び起こしながら、快活に鳴り響いていた。そして彼は元氣な朴ぼくとつ訥とつさをもつて、また地勢についてへんてこの賢明な叙述——（その叙事詩的な物語の中に変へんてこ挺とつに挿そうにゆう入いされる）——をもつて、広範囲にわたる追跡のことや、その無慈悲な戦いにおいて彼が獵師となったり獲物となったりした、人間の狩獵のことなどを、物語つていった。——クリストフは彼の話に耳を傾け、彼の顔をながめ、そして、そのりっぱな人間獸が無為閑散を余儀なくされ、滑稽こっけな遊びのうちに衰えてゆかなければならないのを見て、同情の念を覚えた。そういう運命に彼がどうしてあきらめ得たかを怪しんだ。そして彼自身に向かつてそれを尋ねてみ

た。少佐は初め、自分の不遇を他国人に説明したがらないらしかった。しかしフランス人というものは饒舌じょうぜつであつて、ことに他人を恨むときにそうである。

「現今の軍隊にはいつていたつて、僕になんの仕事があるものですか。」と彼は言った。

「海軍の者は文学をやつてるし、陸軍のものは社会学をやつてゐる。彼らは戦争以外のことならなんでもやつてゐる。しかしもう戦争の準備はしてゐない。戦争をすまいという準備をしてゐる。戦争哲学をやつてゐる……。戦争哲学！ 他日受ける打撃を考えてるなぐられた驢馬ろばどもの遊びと同じだ……。屁理屈へりくつを並べたり哲理をこねたりすることは、僕の仕事じゃありません。家の中に引つ込んでカノン（追走曲——大砲）でもこしらえてるほうがましです。」

しかし彼は慎みの念から、もつとも大きな不満は口に出さなかつた。上申者への告げ口によつて将校らの間に起こる猜疑さいぎ、愚昧ぐまい邪悪な政治家連の横柄な命令を受ける屈辱、または、賤しい警察事務や、教会堂の財産調べや、労働争議の鎮圧や、権力を得た一派——反は僧侶主義の過激な小市民輩——の利益や怨恨えんこんのために、残りの国民全部に反対する仕事、それに使用される軍隊の悲しみ、などがあつた。なおその上に、新しい植民地軍にたいするこの老アフリカ軍人の嫌悪けんおもあつた。新しい植民地軍は、「大なるフランス」——

海の彼方かなたのフランス——の防備を確かにするという名誉と危険とにあずかることを拒む他のフランス人らの、利己心を容赦せんがために、大部分は国民のもつとも下等な分子から徴集されてるのだった。

クリストフは、右のようなフランスの内紛には差し出口の必要をもたなかった。それは彼に関係した事柄ではなかった。しかし彼は老将校に同感した。戦争にたいする考えはとにかくとして、ただ彼は、軍隊は兵士を作るためのものであつて、あたかもりんごの木がりんごを生ずるのと同じだと思つていた。政治家や耽美家たんびや社会学者がそれに接つぎ木されることが、おかしな変形だと思つていた。それでも彼は、この頑健がんけんな人が他人に地位を譲つたのが理解できなかつた。敵と戦わないことはもつとも悪い敵たることである。しかしそれらの多少りつぱなフランス人らの中には、ある棄権的な精神が、不思議な見切りの心が存在していた。——クリストフはそれのさらに痛切なものを、少佐の娘のうちに見出した。

彼女はセリーヌという名だった。丁寧に櫛くしを入れてシナ風に編んだ細かな髪をもつており、その下から高い丸い額ひたいとややとがった耳とがのぞいていて、痩やせた頬ほお、素朴な優美さの愛くるしい頤あご、黒い伶俐れいりな打ち解けたごくやさしい近視の眼、多少太い鼻、上唇うわくちびるの

隅すみの小さな黒子ほくろ、やや脹ふくれた下唇をかいらしくとがらして突出させるしずかな微笑、などをもっていた。彼女は親切で活発だったが、精神的な好奇心にひどく欠けていた。あまり書物を読むことがなく、新しい書物を少しも知らず、けっして芝居へ行かず、けっして旅行をせず——（父親は昔あまり旅をしたので旅行に飽いていた）——なんらの世間的慈善事業にもかかわらず——（父親はそういう事業を非議していた）——少しも勉強しようとはせず——（父親は女の学者をあざけていた）——四方壁に囲まれてる大きな井のよな方形の庭から、ほとんど外へ出なかつた。それでも彼女はさして退屈してはいなかつた。どうかこうか仕事を見つけて、快くあきらめていた。彼女の一身から、また、どこにいても女が知らず知らず創つくり出すその小さな世界から、シャルダン風の空気が発散していた。微温的な沈黙。習慣的な仕事に気を向けてる——（やや麻痺まひされてる）——態度や顔つきの静穏さ。日々のきまつた仕事や、馴なれきつた生活や、同じ時間に同じようにやってくるかわかつていながらも、やはりしみじみとした落ち着いたやさしきで愛せられる、い로운な考えや身振り、などのうちに包まつてる詩。正直や良心や真実や静かな仕事や静かな喜び、それでもなお詩的たるを失わないそれらの、美うつくわしい中流人士的魂の朗らかな凡庸さ。りっぱなパンやラヴァンド化粧水や方正や温情などの香かほりのする、健全な優雅さ、

精神のおよび肉体的な清潔さ。事物と人物との平和、古い家と微笑^{ほほえ}める魂との平和……。

クリストフの親切な信頼の態度はいつも人の信頼を招いていたので、彼はやがて彼女とごく親しくなった。二人はかなり自由に話をした。しまいに彼はいろんな問いをさえかけるようになり、彼女はそれに答えてはみずからびつくりしていた。彼女は他人にはだれへも言ったことのない事柄をも彼へ話していた。

「それはあなたが私を恐れていないからです。」とクリストフは説明した。「私たちは恋に陥るような危険はありません。恋に陥るにはあまりに親しすぎます。」

「ほんとにあなたはやさしい方ですわ！」と彼女は笑いながら答えた。

彼女の健全な性質は、クリストフの性質と同じく、恋愛的な交わりを、自分の感じにいつも手管を弄^{ろう}する曖^{あい}昧^{まい}な魂にとつては尊いその感情形式を、忌みきらっていた。二人はたがいに仲のいい間柄だった。

彼女はときどき午後になると、庭のベンチにすわって、膝^{ひざ}の上に仕事を置いて、それら手を触れようもしないで、幾時間もじつとしてることがあった。彼はある日またそれを見かけて、何をしているのか尋ねてみた。彼女は顔を赤らめて、それは幾時間ものことではなく、たまにしばらくの間のことであり、十四、五分間のことであると抗弁し、「話の先

をつづけてるのだ」と言った。

——なんの話？

——彼女がみずから語ってる話。

「あなたは自分で自分に話をしてるんですか。そんなら私にも聞かしてください。」

彼女は彼があまりに好^{ものずき}奇だと言った。そしてただ、自分がその話の女主人公ではないということだけを打ち明けた。

彼はそれに驚いた。

「自分でみずからいろんな話をするくらいなら、美化した自分自身の話をして、現実以上の幸福な生活をしてるように夢想するほうが、より自然のことのように思えますが。」

「私にはそんなことはできません。」と彼女は言った。「そんなことをしたら絶望に沈むかもしれません。」

彼女は人に隠してる自分の魂を多少うち明けたので、また顔を赤めた。そして言った。

「それに、庭にいて風にさつと吹かれますと、ほんとにいい心地になります。庭は私には生きてるもののように思われます。そして風が荒くて遠くから吹いて来ますときには、いろんなことを私に語ってくれます。」

クリストフは、彼女が控え目な口をきいてるにもかかわらず、彼女の快活さと活発さとの下に隠されてる、底深い憂鬱ゆううつを見てとった。その活発さも彼女を欺くことはできなかつたし、なんの結果をももたらしてはいなかつた。彼女はなぜ自分を解放しようとはしなかつたか？ 活動的な有用な生活にいかにも適してはなかつたか！——しかし彼女は父の愛情を楯たてにとつていた。父は彼女を手離したがらなかつたのである。クリストフはそれに反対して、強健で元気なその将校は彼女を必要としないこと、ああいう性質の人は一人きりで暮らし得ること、彼女を犠牲にする権利は彼にはないこと、などを言いたてたが無駄むだだつた。彼女は父を弁護した。父が無理に自分を引き留めておくのではなくて、自分のほうで父のもとを離れ得ないのだと、孝心深い嘘うそで主張した。——そしてまたそれは、ある程度まではほんとうだつた。彼女にとつては、彼女の父にとつては、また周囲の人々にとつては、万事はかくあるべきもので異なつたようになるべきではないということが、永久にわたつて承認されてるらしかつた。彼女には結婚した兄があつたが、その兄も、自分の代わりに彼女が献身的に父のめんどうをみてくれるのを、自然のことだと考えていた。そして彼自身は子供たちのことばかりに気を向けていた。彼は子供たちを嫉妬しつと深いほど愛していて、何事をも子供たちの自由に任せなかつた。その愛情は、彼にとつては、ことに

彼の細君にとつては、一生のしかかつてきてあらゆる行動を束縛する任意的な鎖だった。人は子供をもったときから、その個人的生活は終わりを告げて、自己の発展は永久に止めらるべきものである、とでも言うかのようだった。この活動的な伶俐なまだ若い男は、隠退するまでに残つてゐる働くべき年月を、ちゃんと数え上げていた。——それらのりっぱな人々は、家庭的愛情の空気のために貧血させられていた。その愛情はフランスにおいてはいかにも深いものだったが、しかしまた人を窒息させるものだった。フランス人の家庭が父と母と一、二人の子供というふうに、ごく少数になる場合に、それはますます圧迫的になるのだった。あたかも一握りの黄金を握りしめてるりんしょく吝きん嗇家しやくけのように、戦々きようきよう兢兢けいけい々々として自分だけを守つてゐる愛情だった。

ある偶然の事情からクリストフは、セリーヌにますます同情をもつとともに、フランス人の愛情の狭小なこと、生活や自己の権利の主張などを恐れてゐることを、示されたのであった。

技師のエルスベルゼに、やはり技師である十歳年下の弟があつた。世間によく見かけるとおり、りっぱな中流家庭に生まれて芸術上の志望をもつてゐる好青年だった。そういう人々は、芸術をやりたがってはいるが、その中流的身分を危うくすることを欲しない。実を

言え、それはごく困難な問題ではない。現時の多くの芸術家は容易に解決をつけている。でもとにかくそうしたいという願望だけは必要であつて、そしてそれだけのわずかな気力をも万人がもつてるといふわけにはゆかない。彼らには自分の欲することを欲するといふだけの確かさもない。そして彼らの中流的身分が確實になればなるほど、ますますそこに安住して従順に静かになつてゆく。彼らがくだらない芸術家とならずに善良な中流者となるとしても、それはとがむべきことではないだらう。しかしその失意からは、ひそかな不満の念が、いかに偉大なる芸術家が僕とともに滅びることぞが、たいていは彼らのうちに残つてくる。そしてそれは、とにかく哲学と呼ばれ得るものでどうか覆い隠されはするが、歳月に磨り減らされ新しい心配事に紛らされてその古い怨恨の痕が消されてしまふまでは、彼らの生活を毒するのである。アンドレ・エルスベルゼの場合もそうであつた。彼は文学をやるつもりだつた。しかし自説にのみ凝り固まつてる兄は、彼をもやはり科学の方面にはいらせたかつた。アンドレは惻癡であつて、科学に——または文学に——同じくらいかなりの天分をもつていた。芸術家たるには十分の自信がなかつたけれど、中流者たるにはあまりに多くの自信があつた。で彼は初め一時的に——（この一時的という言葉がいかなる事を意味するかは人の知るとおりである）——兄の意志に従つた。彼は大して

よくない成績で工芸中央学校にはいり、同じくらい成績で卒業し、それから本気でし
かしなんの興味ももたずに、技師の職についていた。もとよりその間に、わずかの芸術家
的気質をもっていたのを失ってしまった。で彼はもう皮肉をもってしか芸術のことを語
らなかった。

「それにまた、人生というものは、やりそこねた職業のために気をもむにも値しないもの
です。くだらない詩人なんかあつてもなくても同じことです……。」と彼は言っていた。

——（クリストフはそういう理屈のなかに、オリヴィエ流の悲觀思想を見てとつた。）

二人の兄弟は愛し合っていた。彼らは同じ気質をもっていた。しかし話が合わなかった。
二人ともドレフユース派であつた。しかしアンドレは、産業革命主義にひきつけられて、
非軍国主義者であつた。そしてエリーは愛国者であつた。

アンドレは時とすると、兄に会いに行かずにクリストフだけを訪れてきた。クリストフ
はそれに驚いた。なぜなら、彼とアンドレとの間には大なる同感も存しなかったから。ア
ンドレはたいしていだけれどもしくは何事かにたいする不平ばかりを述べた——それはうるさ
いことだつた。そしてクリストフが口をきくときには、アンドレのほうでよく聞いていな
かつた。それでクリストフはもう、彼から訪問されるのをつまらないと思つてる様子を隠

そうとしなかった。しかし彼はそんなことにはいつこう平気だった。気づいてもいないらしかつた。がついにある日、クリストフの疑問は解けた。相手が窓にもたれて、こちらの話によりも下の庭の様子に多く気をとられてるのが、彼にもわかった。彼はそれを言つてやつた。するとアンドレは、実際シャブラン嬢を知つてることや、クリストフを訪問してくる理由のうちには彼女がはいつてることなどを、すぐに承認してしまった。それから舌がほどけて、昔からの友情を、おそらくは友情以上のものを、その若い娘にたいして言ひてゐることを白状した。エルスベルゼの家は少佐の家と昔から交際があつた。しかしごく懇意だつたあとに、政治上のことで離れ離れになつた。それ以来もう行き来をしなかつた。クリストフはそんなことを馬鹿げてると思う様子を隠さなかつた。各人各自の考え方をしながらなお尊敬し合つてゆくということが、できないものだろうか？ アンドレは、自分は自由な精神をもつてると抗弁した。しかし二、三の問題は寛容外のことだと言つた。彼によれば、それらの問題について異なつた意見をもつのは許されなかつたことだつた。そして彼は有名なドレフユース事件をあげた。それについて彼も普通一般のとおりは無茶な論をした。クリストフはその慣例を知つていたし、少しも議論を闘たたかわそうとはしなかつた。しかしただ、その事件もいつか終わりを告げることがないものかどうか、その呪のろいは孫子の

末の末にまで永遠に波及すべきものであるかどうかを、尋ねてみた。アンドレは笑いだした。そしてクリストフに答えはしないで、セリーヌ・シャブランをしみじみとほめたたえ、彼女から献身的に仕えられるのを当然だと思ってる父親の利己心を非難した。

「彼女と愛し愛されてるのなら、なぜ結婚しないんですか。」とクリストフは言った。

アンドレはセリーヌが僧侶派であることを嘆じた。僧侶派とはどういうことかとクリストフは尋ねた。その答えによれば僧侶派とは、宗教上の務めを守り神や坊主どもに奉仕するということだった。

「そしてそれがなんの妨げになるんですか。」

「だって僕は自分の妻が自分以外のものに所有されることを望みません。」

「ほう、あなたは細君の思想にまで嫉妬するんですか。じゃああの少佐よりもあなたのほうがいつそう利己的だ。」

「それは勝手な理屈です。たとえばあなたは音楽を愛しない女をもらえますか。」

「もらおうとしたこともありますよ。」

「思想が違つててどうしていつしよに暮らせるでしょうか。」

「そんなことをくよくよ考えるには及ばないでしょう。なあに、愛するときには思想なん

かどうだって構わない。僕の愛する女が僕と同じく音楽を愛してくれたって、なんの足しになるものですか。僕にとつてはその女が音楽なんです。あなたのように、相愛のかわいい娘があるという喜びを得るときには、彼女は彼女の好きなのを信ずるがいいし、あなたはあなたの好きなのを信ずるがいい。要するにどの思想もみな同じく尊いんです。そして世には一つの真理しかありません。それは愛し合うということです。」

「それは詩人の言い草です。あなたは人生を見ていません。精神の不一致に苦しめられた多くの家庭を、僕はたくさん知っています。」

「それは十分愛し合っていないからです。人は第一に自分が何を欲してるかを知らなければいけません。」

「人生においては意志がすべてをなし得るものではありません。僕がシャブラン嬢と結婚しようと思っても、それはできないでしょう。」

「なぜでしょうか。」

アンドレは気がかりな事柄をうち明けた。彼の地位はまだでき上がっていないかった。それに財産もなく、身体も弱かった。そういう事情で結婚していいものかどうか疑っていた。大なる責任問題だ……。愛する者や自分自身を——将来の子供のことは言うまでもなく——

—不幸に陥れる憂いはないだろうか……。待つほうが——もしくはあきらめるほうが——よくはないか。

クリストフは肩をそびやかした。

「りっぱな愛し方ですね！ 彼女に愛があるのなら、彼女は一身をささげて幸福になるはずです。それから子供のことについては、あなたたちフランス人は実際滑稽こっけいですよ。苦しむことのないほど十分な財産をつけてやれると思うまでは、世の中に産み出したがらない……。がそんなことはどうでもいいことです。なかに、生と生にたいする愛と生を守る勇氣とを与えてやればいいんです。その他のことは……。生きようと死のうと……。それが人の運命です。僥倖ぎょうこうの生を求めるくらいなら、生きるのをやめたほうがいいでしょう。」

クリストフから発散する強健な信念は、相手のうちにも伝わっていったが、少しもその心を決しさせはしなかった。彼は言った。

「ええ、おそらくそのとおりでしょう……。」

しかし彼はそのままじつとしていた。あたかも他の多くの人々のように、意欲と行動との不能に陥つてるがようだった。

クリストフは、知り合いのフランス人のうちにたいい見出される無気力さにたいして、戦いを始めた。その気力は、不撓ふとうなそしておおむね熱狂的な精励せいりきさと、不思議に結合してのだった。中流階級の種々の方面で彼が出会う人々は、ほとんどすべて不満家だった。ほとんどすべての人々が、当代の大立者とその腐敗した思想とにたいする、同じような嫌きら悪あくの念をいだいていた。ほとんどすべての人々が、おのが民族に裏切られた魂についての、寂さびしいかつ矜ほこらかな意識をもっていた。そしてそれは、個人的怨えん恨こんの事柄ではなかった。免職された官吏や、用途のない精力や、傷ついた獅子ししのように自分の土地に隠退して死んでゆく古い貴族など、すべて権力や活動的生活から追われてる、敗北した人々や階級の怨え嗟さではなかった。それは、一般的な深い暗黙な精神的反抗の感情だった。軍隊や司法界や大学や官省や、政府機関のあらゆる主要な部分に、至るところに存在していた。しかしそれらの人々は行動してはいなかった。行動しない前から失望していた。彼らは繰り返す言っていた。

「しかたがないことだ。」

彼らは悲しい事柄を恐れて、それから思考や談話をそらしていた。そして、家庭生活のなかに隠れ家を求めていた。

彼らが政治上の行動からだけ引退したのなら、まだしもだった。しかし日常の行動の範圍内においてさえ、それら誠実な人々はだれもみな行動の興味を失っていた。彼らは軽蔑してゐる悪者どもとの賤しい交際は大目に見ていたが、それと鬪うことは無益だと前もつて考えていて、なるべく鬪いをしないように用心していた。たとえば芸術家らは、ことにクリストフがよく知つてゐる音楽家らは、彼らに勝手なことをする新聞雑誌のスカラムーシユども厚顔を、なぜ反抗もしないで堪え忍んでいたのか。多くの愚人どもがいて、およそ人の知り得るあらゆる事に無知であるのが知れ渡つていながら、それでもやはり、およそ人の知り得るあらゆる事に主権的な力を与えられていた。彼らは自分の論説や書物を書くだけの労さえ取らなかつた。彼らには秘書どもがついていた。もし魂をもつてたとして、パンや女のためにその魂をも売りにかねない、憐れむべき飢えた乞食どもがついていた。それはパリーでは、だれ知らぬ者のない事柄だった。それでも彼らはなお羽振りを引きかせ、芸術家たちを上から見下していた。彼らの記事のあるものを読んだとき、クリストフは憤激の叫びを發した。

「おう、卑怯者が！」と彼は言った。

「君はだれにたいし言つてゐるんだい。」とオリヴィエは尋ねた。「相変わらず広場の市の

馬鹿者どもを相手にしてるのか。」

「いや、誠実な人たちに言ってるんだ。悪者どもがのさばって、嘘をつき奪い盗み人殺しをしている。しかしその他の者を——彼らを蔑視しながら勝手なことをさせてる人たちを、僕ははるかに多く軽蔑する。新聞雑誌の仲間たちが、誠実な教養ある批評家たちが、無定見なアールカンドにもわいわい言われてる芸術家たちが、臆病から、災いをこうむる恐れから、あるいは、相互に容赦するという恥ずべき打算から、敵の打撃を免れるために敵と結んだ一種の密約から、奴らをなすまに任して黙っていることがなかったならば——もし彼らがその庇護と友情とを奴らに利用されるままに任せることがなかったならば、奴らの厚顔な威勢は単なる物笑いとなってしまうだろう。あらゆる方面に同様な気弱さがある。僕が出会った多くの善良な人々は、ある男について『彼奴は馬鹿者だ』と僕に言ってきたせながら、その男を『親しい仲間』と呼びかけて握手しないような者は、一人もなかった。——『あんな人間が多すぎる』と彼らは言っている。——がまったく腰抜けが多すぎる。誠実でありながら卑怯である者が多すぎるのだ。」

「ではどうせよというんだ？」

「君たち自身で警察事務をやるのさ！ 君たちは何を待ってるのか。仕事を天に引き受け

でももらいたいのか。それら、ちょうど見てみたまえ。雪が降ってから三日になる。雪は街路を埋め、パリを泥海どろうみにしている。が君たちは何をしてるのか。君たちを泥水の中に放っておく施設にたいしては非難の声をあげている。しかし君たち自身はそれから脱しようとしているか。あきれたことだ。腕を拱こまぬいてばかりいて、だれも家の前の歩道を掃くだけの勇氣をもっていない。国家も個人もともにその義務を尽くしていない。両者がいにとがめ合つて責を免れたと思つている。君たちは数世紀間の君主主義的教育のため、自分自身で何にもしないことに馴なれきつていて、奇跡を待ちながらいつもぼんやり天を仰いでるような様子だ。がここに可能な唯一の奇跡は、君たちが行動の決意をするということだろう。ねえオリヴィエ、君たちはたくさんの知力と美德とをもっている。しかし血が君たちには不足している。第一に君には不足している。君たちのうちで病衰してるものは、精神でも心でもない。それは生命なんだ。生命が逃げ去りかけてるんだ。」

「しかたないさ。生命がもどつてくるのを待つよりほかはない。」

「生命がもどつてくるのを欲しなければいけない。意欲することが必要なのだ。そしてそのためにはまず、自分の家に清い空気をはいらせなければいけない。家から外に出たくなるときには、少なくとも家を健全にしておかなければいけない。君たちは市場いちばの悪い空気

で家を毒されるままにしている。君たちの芸術と思想とは三分の二以上悪変させられてる。そして君たちは意気沮喪そそうのあまり、もうそれを憤ろうともしないし、ほとんど驚こうともしない。気おくれがしてそれらのばかな善人らのうちには、自分らのほうが誤りで欺瞞ぎまん者どものほうが正当だと、ついに思い込んでしまつてる者さえある。何物にも欺かれていないと公言して君のイソツプ誌の連中のうちにも、愛してもいけない芸術を愛してると思ひ込んで憐あわれな青年らに、僕は出会つた。彼らはうれしくもないのにただ順従の念から酔つ払つてる。そしてその虚偽のうちに倦けん怠たいしきっている。」

クリストフは、胎はらのすわらない連中の中を、あたかも眠つてる樹木を揺り起こす風のように通りすぎていった。彼は自分の考え方を彼らに教え込もうとはしなかった。自分で考えるだけの元気を彼らに吹き込んでやつた。彼はこう言っていた。

「君たちはあまりに謙讓だ。神経衰弱的疑惑こそ大敵なんだ。人は寛容で人間的であり得るしあるべきである。しかし、善であり真であると信じてる事柄を疑つてはいけけない。そして信じてる事柄を支持しなければいけない。われわれの力がどのくらいのものであろうと、われわれは讓歩してはならない。この世においては最小のものも最大のものと同等に

一つの義務をもっている。そして最小のものもまた——（みずからよく知っていないことであるが）——一つの力をもっているのだ。君たちだけの反抗を取るに足らぬものだと思つてはいけない。強健で自己を肯定し得る本心は一つの威力である。君たちが近年一度ならず見てきたとおりに、国家と世論とは一人のりっぱな男の判断を重んじなければならなかったではないか。しかもその男の武器といつては、公然と執拗しつように肯定されたその精神力のみだったのだ……。

「もし君たちが、こんな骨折つてなんの役にたつかを、闘つてなんの役にたつかを、なんの役にたつかということをも、みずから怪しむならば……よく覚えておくがいい……それは、フランスが死にかかつてるからであり、ヨーロッパが死にかかつてるからであり——わが文明が、千年余の苦悩によつて人類が築き上げた驚嘆すべき作品が、もしわれわれが闘わなかったならば覆滅する恐れがあるからである。祖国が危険に瀕ひんしているのだ。わが祖国ヨーロッパが——なかんずく君たちの小なる祖国フランスが、危険に瀕している。君たちの無情無感がそれを殺すのだ。君たちの元気が消滅するにつれ、君たちの思想が諦あきらめにはいるにつれ、君たちの誠意が働きを止めるにつれ、君たちの血が無駄に一滴ずつ涸かれてゆくにつれて、祖国は死んでゆくのだ……。奮起したまえ。生きなくてはいけない。も

しくは、死ななければならぬとすれば、立ちながら死ぬべきである。」

しかし、彼らを活動に導くことよりも、彼らをいつしよに活動させることのほうが、なおいっそう困難だった。この点では彼らはまったく手におえなかった。彼らはたがいに不平を言い合っていた。りっぱな人たちほど頑固^{がんこ}だった。クリストフは同じ家の中にその実例を見出した。フェリックス・ヴェール氏と技師エルスベルゼと少佐シャブランとは、暗黙な敵意をたがいにいいていた。それでも、彼らはその党派や種族の異なった作法のもとにありながら、みな同じものを望んでるのだった。

ヴェール氏と少佐との間には、ことに理解し合える多くの理由があるようだった。ヴェール氏は書物を手放したことがなく、精神生活のうちにはばかり生きていたので、思想を事とする人々のうちによく見かける一種の矛盾から、軍事上の事柄をたいへん面白がっていた。「われわれはみな断片でできている、」と半ばユダヤ人のモンテーニユは、ヴェール氏が属するような精神上のある種族についてのみ真実であることを、万人に適用して言っている。この知的な老人ヴェール氏は、ナポレオンを崇拜していた。大帝の偉業の花やかな夢想がよみがえってる文書や記念物に取り囲まれていた。この時代の多くのフランス人と

同じく、その栄光の太陽の遠い光に眩惑げんわくされていた。その戦役をやり直し、戦いを交え、作戦を議していた。オーステルリッツの戦いを説明しワートルローの戦いを訂正する室内戦略家が、もろもろの学芸院や大学などにはたくさんいるが、彼もその一人だった。彼はそういう「ナポレオン派」をまつ先にあざけて、自分の皮肉をみずから面白がってはいたけれど、それでもなおやはり、遊びにふけてる子供のようになり、ナポレオンの素敵な話に酔わされていた。ある種の逸話になると眼に涙まで浮かべた。その気弱さに気づくときには、ばかな老耄おいぼれだとみずから叫んで笑いこけた。実を言えば、彼をナポレオン崇拜者たらしめてるものは、その愛国心よりもむしろ、活動にたいする小説的な興味と精神的な愛好とであった。と言つても、彼はりっぱな愛国者であつて、生粋きつすいのフランス人の多くよりもいつそう深くフランスに愛着していたのである。いったいフランスの反ユダヤ主義者らはフランスに住んでるユダヤ人らのフランス感情を、不当な猜疑心さいぎでくじきながら、よからぬ馬鹿げたことをなしている。けれども、あらゆる家族は一、二代の後になると、定住した土地にかならず執着するものである、という理由をほかにしても、ユダヤ人らは、知性の自由についてもつとも進歩した観念を西欧において代表してこのフランス民衆を愛すべき、特殊な理由をもっている。彼らは百年来、フランス民族を今日のごとくあらし

むるのに貢献し、その自由はある点まで彼らの手になされたものであるだけに、ますます彼らはフランス民族を愛している。なんで彼らが、あらゆる封建的・反動的の威嚇いかくに対抗してその自由を守らないことがあるうぞ。この養い児のフランス人とも言うべきユダヤ人らをフランスに結びつけてる糸を——一群の有害な馬鹿者どもが望んでるように——断ち切つてしまおうとするのは、敵に加担することである。

フランスの浅慮な愛国者らは、フランスに移住して他国人はすべて隠れたる敵だという新聞紙の説に脅かされて、生まれつき歓待的な精神をもっていながらも、諸民族の会流たるユダヤ民族の豊かな運命を疑い憎み否定せざるを得ないのであるが、シャブラン少佐もその一人だった。それで彼は、二階の借家人と近づきになつてもよかつたのであるが、やはり未知のままにいるほうがよいと思つていた。ヴェール氏のほうでは、少佐と話を交えることを好んでいたけれど、少佐の国民主義を知つていて、軽い軽侮の念をいだいていた。

クリストフは、ヴェール氏に同情を寄せることについては、少佐ほどの理由ももってはいなかつた。しかし彼は不正を看過することができなかつた。シャブランがヴェール氏を非難するときには、いつも弁護の勞をとつていた。

ある日、例によつて少佐が種々の事態をのしりだすと、クリストフは言った。

「それはあなたがたのほうが悪いんです。あなたがたはみな隠退しています。フランスで万事が自分の思いどおりにいつていないとなると、ぶつきら棒に職を辞してしまふじゃありませんか。あたかも敗北を宣言するのを名誉とでもしてゐるがようです。それほど失敗に意気込む者が他にあるでしょうか。あなたは戦争をされたのですが、そんなのが戦いの仕方ですか？」

「何も戦いの問題じゃない。」と少佐は答えた。「フランスと戦う奴があるものですか。君が言うようなその争鬪では、口をきいたり議論したり投票したり、多くの無頼漢ならずものと不快な接触をしなければならぬ。そんなことは僕には不向きです。」

「たいへん厭気いやけがさしていられますね。しかしアフリカでは、あなたはやはり無頼漢らと接していられたじやありませんか。」

「いやそのことなら、僕はそれほど厭いやではなかつた。それにいつでもやつつけてやれた。そのうえ、戦うには兵士どもが必要だ。あちらでは僕は部下の狙撃兵そげきをもつていた。しかしこちらでは一人きりです。」

「それでも善良な人に乏しかありません。」

「ではどこにいるんです?」

「どこにでもあります。」

「そんなら、その連中は何をしてるんです?」

「あなたと同様に、何にもしていませんし、しかたがないと言っています。」

「とにかく一人だけでも名ざしてごらんなさい。」

「お望みなら三人ほど名ざしましょうか。しかもあなたと同じ家にですよ。」

クリストフはヴェールを名ざした——(少佐は声をたてた)——つぎにエルスベルゼ兄弟を名ざした——(少佐は飛び上がった。)

「あのユダヤ人が、あのドレフユース派どもが?」

「ドレフユース派ですって?」とクリストフは言った。「それがどうしたんですか。」

「奴らこそフランスを害したのだ。」

「しかし彼らはあなたと同じくフランスを愛しています。」

「それじゃ狂人だ、有害な狂人だ。」

「敵をも正当に批判してやれないものでしょうか。」

「公然たる武器をもって戦う公正な敵となら、僕は完全に理解し合える。その証拠にはド

イツ人たる君と僕はこのとおりに話し合っています。われわれが受けた打撃に利子をつけて他日返報してやろうと思ってるから、僕はドイツ人を大事にしている。しかし他の敵は、内部の敵は、同じわけにはゆかない。彼らは不正な武器を、不健全な理屈を、毒のある人道主義を、使用している……。」

「なるほどあなたは、初めて火薬に出会った中世の騎士たちと、同じ精神状態にいるんですね。やむを得ないことではないですか。戦争は進化してゆくものです。」

「よろしい。それじや直截ちよくせつに言つて、戦争だということにしよう。」

「それでもし共通の敵がヨーロッパを脅かすとしたら、あなたがたはドイツと同盟しませんか。」

「僕たちはシナでそれをやった。」

「ではあなたの周囲を見てごらん下さい。あなたの国は、わがヨーロッパの各国は、その民族の勇壮な理想主義を、現在脅かされてはしないでしょうか。みな多少とも政治や思想の山師どもの餌食えじきとなつてはしないでしょうか。その共通の敵に反抗してあなたは、ある精神力をもつて敵と協力すべきではないでしょうか。あなたのような人が、どうしてそんなに現実の問題を軽視されるのですか。あなたがたに対抗して異なった理想を主張して

る人たちもいます。ところが理想は一つの力であつて、あなたがたもその力を否定することはできません。あなたがたが最近なされた戦いにおいては、敵の理想からあなたがたは打ち敗られたのです。けれども、その敵の理想に対抗して自分を疲らすよりも、あらゆる理想の敵に対抗して、祖国を利用する奴らに対抗して、ヨーロッパ文明を腐敗させる奴らに対抗して、なぜあなたがたは自分の理想と敵の理想とを併^{あわ}せ用いないのですか。」

「だれのためにです？　まず事情を明らかにしておかなければならない。われわれの敵に勝利を得させるためにですか。」

「あなたがたがアフリカにおられたときには、戦つてるのは国王のためにだかもしくはフランス共和国のためにだか、それを知ろうと懸念されはしなかつたでしょう。私の想像するところでは、あなたがたの多くはフランス共和国のことをほとんど考えてもいられなかつたでしょう。」

「そんなことは気にもかけていなかった。」

「そうです！　そしてそれがフランスのためになつたのです。あなたがたは、フランスのために、そしてまたあなたがた自身のために、征服なすつたのです。そこで、この国内でも、同様になさい。戦いの範囲をお広げなさい。政治や宗教などの些^さ事^じのために指弾し合

つてはいけません。それは取るに足らぬ事柄です。あなたがたの民族が、教会の嫡流ちやくりゆうであろうと理性の嫡流であろうと、それは大したことではありません。生きることが必要です。生をさかんならしむるものはすべていいものです。世にあるただ一つの敵は、生の泉を涸らし汚す享樂的な利己主義です。力をさかんにし、光明をさかんにし、豊かな愛を、犠牲の喜びを、さかんになさい。他人から代わって活動してもらってはいけません。活動なさい、活動なさい、団結なさい、さあ！……」

そして彼は、合唱付交響曲の変口長調行進曲の初め数小節を、ピアノでやたらにたたき出した。

「いいですか、」と彼はひきやめながら言った、「僕がもしフランスの音楽家だったら、シャルパンティエかブリュノー……（どいつも駄目だ）——僕なら、合唱交響曲のうちに、あなたがたを皆いっしょにしてみせます、市民よ武器執れも、万国労働歌も、アンリー四世万歳も、神はフランスを護るも——ありったけのものを——（そら、こういう種類のうちに……）——口を焼けただらすほどのごった煮をこしらえてみせます。それは少しもまらないかもありません——（がとにかく彼らが作ってるものほど悪いものではない。）——しかし僕は保証しますが、それはあなたがたの腹を温めるあたたでしょう、そしてあなたがた

は歩き出さざるを得なくなるでしょう。」彼は心から笑っていた。

少佐も彼と同じく笑った。

「クラフト君、君はまったく元気な男だ。君がわれわれの仲間でないのは残念なことだ。」
「いや僕はあなたがたの仲間ですとも。どこへ行ったって同じ戦いです。列を固めようじやないですか。」

少佐は賛成した。しかし事情は以前のとおりだった。そこでクリストフはあくまで固執して、ヴェール氏やエルスベルゼ兄弟の上に話をもどした。すると少佐も同じく固執して、ユダヤ人やドレフユース派にたいする持論を繰り返した。

クリストフはそれを寂しがった。オリヴィエは彼に言った。

「くよくよするなよ。一人で社会の精神状態を一挙に変えることができるものか。それはあまりによすぎる事なんだ。しかし君は自分で知らずにもう多くのことをしている。」

「何を僕がしてるんだい？」とクリストフは言った。

「君は一個のクリストフとなってる。」

「それがなんで他人のためになるのか。」

「大いになるさ。だがクリストフ、君はただ君自身でありたまえ。僕たちのことに

気をもまないようにしたまえ。」

しかしクリストフはあきらめられなかった。彼はなおシャブラン少佐と議論をつづけ、時には猛烈に言い合うこともあった。セリーヌはそれを面白がっていた。彼女は黙って仕事をしながら二人の話を聞いていた。議論には加わらなかった。けれど以前よりも快活になったように見えた。以前よりも多くの輝きを眼つきに帯びていた。前よりも広い空間が彼女のまわりにできたようだった。彼女は読書を始め、外出することがやや多くなり、興味をもつ事柄が多くなった。そしてある日少佐は、エルスベルゼ兄弟のことでクリストフと論争するとき、彼女が微笑ほほえんでるのを認めた。彼は彼女にどう思うかと尋ねた。彼女は平然と答えた。

「クラフトさんのほうが道理もつともだと思えますわ。」

少佐はまごついて言った。

「そりゃひどい！……だが結局、道理であろうがあるまいが、われわれは今のままで満足だ。あんな人たちに会う必要はない。ねえお前、そうじゃないか。」

「いいえ、お父様とう、」と彼女は答えた。「お会いしたほうが私はうれしゅうございますわ。」

少佐は口をつぐんで、聞こえなかったようなふうをした。が彼自身でも、様子にはそれと見せたくなかったが、クリストフの影響をかなり感じていた。彼は批判の偏狭さと気質の猛烈さにもかかわらず、正しい精神と寛大な心をそなえていた。彼はクリストフが好きで、その率直さと精神の健全さとを好んでいて、クリストフがドイツ人であるのがしばしば遺憾でたまらなかった。彼はクリストフとの議論中によく憤激したが、それでもなおそういう議論を求めていた。そしてクリストフの理論は彼に働きかけずにはいなかった。彼はそのことを承認すまいと用心していた。ところがある日クリストフは、彼が一冊の書物に読みふけつてのを見出した。彼はその書物をどうしても見せなかった。するとセリ―又は、クリストフを送り出してきて二人きりになると言った。

「お父様とうが何を読んでいられたか御存じですか。あれはヴェールさんの書物ですよ。」
クリストフはうれしくなった。

「そしてなんとおっしゃっていましたか。」

「この畜生め！……と言っていていらしたわ。でもそれを手放しかねていらつしやるのよ。」
クリストフはそのことについては、少佐に会ってもなんとも言わなかった。少佐のほうから彼に尋ねてきた。

「あのユダヤ人のことで僕をいじめなくなつたのは、どうしたわけですか。」

「もうそれに及ばないからです。」とクリストフは言った。

「なぜ？」と少佐はむきになつて尋ねた。

クリストフは答えないで、笑いながら帰つていった。

オリヴィエが言ったことは道理だつた。人が他人に働きかけるのは、言葉によつてではない。その存在によつてである。眼つきや身振りや清朗な魂の無音の接触によつて、自分のまわりに慰撫いぶ的な空気を光被くわしてゐる人たちが世にはある。クリストフは生命の気を光被くわしてゐた。それはこの麻痺まひした家の古い壁や閉め切られた窓を通して、春の暖気のようにごく徐か々にさし込んでいった。そして、悲しみや弱さや孤独のために、数年来腐食され涸こ渴かつされて死滅しめつに委ねゆたられてゐる人々の心を、またよみがえらせていった。魂が魂に及ぼす力よ！ しかもそれを受くる魂も及ぼす魂も共にそのことを知らないでゐる。それでも世の生活は、この神秘的な引力に支配されてゐる干潮と満潮とでなつてゐるのである。

クリストフとオリヴィエの部屋から二階ほど下に、前に述べたとおりジェルマン夫人という三十五歳の若い女が住んでゐた。二年前に夫を失ひ、また前年に七、八歳の娘を失つ

たのだった。そして姑しゅうとめといっしよに暮らしていた。彼女らはだれにも会わなかった。その家の借主たちのうちで、クリストフともつとも交渉の少ない人たちだった。ほとんど出会うこともなかったし、言葉をかけ合うこともかつてなかった。

彼女は背が高く瘦やせたかなり姿のいい女だった。褐かつしよく色の曇かった美しい眼は、やや表情に乏ほしかったが、時とすると、陰気なきつい炎が輝きだした。蠟ろうのような黄色っぽい顔平ほたい頬、引きしまった口をもっていた。ジェルマン老夫人のほうは信心家でいつも教会堂にばかり行っていた。若夫人は一人でしつこく喪にこもっていた。彼女は何物にも興味をもたなかった。娘の遺物や面影にとり囲まれていた。そしてそれらをあまり見つめてるために、娘の姿がもう浮かばなくなった。死んだ面影は生きた面影を殺してしまった。もう娘の姿が見えなくなった。そして彼女はなお固執した。ただ娘のことばかり考えたがった。そのためについては、もう娘のことも考えられなくなった。死の仕事を完成さしてしまった。そこで彼女は、心は化石し、涙はなくなり、生命の泉は涸かれはてて、凍りついたようになった。彼女には宗教も助けとならなかった。宗教上の務めを行なうてはいたが、それも好んで行なうのではなく、したがって生きた信仰をもって行なうてはなかった。ミサのために金を出してはいたが、その仕事に少しも進んで加わりはしなかった。彼女の

全宗教は、も一度娘を見たいというただ一つの考えの上に立っていた。その他のことはどうでもよかった。神は？ 神も何になろう。も一度娘を見ること……。そして彼女はそこをもなかなか信じられなかった。それを信じたがり、堅く必死にそれを望んではいたが、果たしてできるかを疑っていた。彼女は他の子供たちを見るに堪えられなかった。彼女は思った。

「どうしてあの子供たちは死ななかつたのだろうか？」

その町内に、身長から物腰から彼女の娘そっくりの少女が一人いた。その小さな垂髪おさげをしてる後ろ姿を見たとき、彼女は震え上がった。彼女は娘のあとを追っかけた。そして、娘が振り向いて、あの子でないことがわかると、彼女はその娘を絞め殺してでもやりたかった。それからまた、エルスベルゼの娘たちは、ごく静かだったし教育によってよく躡けしっけられていたけれど、それにもかかわらず彼女は、その娘たちが上の階で騒々しい音をたてると不平言っていた。娘たちが室の中をあちこち歩きだすと、彼女は女中をやって静かにしてほしいと申し込んだ。クリストフはあるとき、その娘たちといっしょに帰ってきて彼女に出会ったが、彼女からきびしい眼つきでじろりと見られたのにびっくりした。

夏のある晩、この生きながら死んでるとも言える夫人は、暗がりのなかに窓ぎわにすわ

つて、むなしくぼんやりしていたが、クリストフのひくピアノの音が聞こえてきた。クリストフはいつもその時刻になると、ピアノをひいて夢にふけるのが常だった。ところがその音楽は、彼女がうつとりして空寂の境地を乱して、彼女をいらだたせた。彼女は怒って窓を閉めた。音楽は室の奥までも追っかけてきた。彼女はそれに対して一種の憎悪を覚えた。クリストフに演奏をやめさせたかった。しかし彼女にその権利はなかった。やがて毎日同じ時刻に、ピアノが始まるのをいらいらしながら待つようになった。始まるのがおそいと、いらだちはますます強くなった。彼女はその音楽を最後まで厭でも聴かせられた。そして音楽が終わってしまうときには、いつもの無情無感の境地にはなかなかはいれなくなっていた。——そしてある晩、暗い室の隅に縮こまつてる彼女のもとまで、遠い音楽が、壁や閉め切った窓越しに響いてきたとき、彼女はぞっと身震いを感じて、涙の泉が新たにほとばしってきた。彼女は窓を開いた。それから涙を流しながら耳を傾けた。音楽は雨に似ていて、彼女の涸渇した心に一滴ずつしみ込み、その心をよみがえらせた。彼女はふたたび、空を星を夏の夜をながめた。生にたいする興味が、人間的な同感が、まだ蒼白い曙光のように現われてくる心地がした。そしてその夜、幾月目かに初めて、娘の面影が彼女の夢のうちに現われてきた。——われわれを故人に近づけるもつとも確か

な道は、故人と同様に死ぬことにあるのではなくて、生きることにあるのである。故人はわれわれの生によって生き上がり、われわれの死によって死んでゆく。

彼女はクリストフに会おうとは求めなかった。しかし彼が娘たちと階段を通る足音を聞いていた。そして扉とびらの後ろに隠れて子供たちの饒舌おしゃべりをうかがっていた。それを聞き取ると胸をどきつかせた。

ある日彼女が出かけようとしていたとき、階段を降りてくる小さな刻み足の音が聞こえた。いつもより少し騒々しかった。子供の声が妹に向かつて言っていた。

「リュセツト、そんなに騒々しくしちやいけないわよ。ねえ、クリストフさんが言ったじゃないの、奥さんが悲しがつていらつしやるからつて。」

すると小さいほうは足音を忍ばせ小声で話した。ジェルマン夫人はもう堪えられなかった。扉を開き、娘たちをとらえ、荒々しく抱擁してやった。娘たちは恐こわがった。一人は泣き出した。夫人は二人を放して、室にはいった。

それ以来、彼女はその娘たちに出会おうと、強しいて笑顔を見せた。ひきつった微笑だった。——（彼女は微笑ほほえむ習慣を失ってしまっていた。）——彼女は娘たちにだしぬけのやさしい言葉をかけた。娘たちは怖おずおずしていて、気圧けおされた囁ささやきで答えるばかりだった。娘

たちはやはり夫人を恐がっていた。前よりいつそう恐がっていた。その扉の前を通るときには、つかまりはすまいかと気づかかって駆け出すようになった。彼女の方では、身を隠して二人を見ていた。恥ずかしい思いをしていた。亡くなった娘に全部独占の権利がある愛情を、少しばかり盗み取ることのような気がした。彼女はひざまずいて娘に許しを求めた。しかし生きそして愛する本能が眼覚めた今となつては、彼女はどうすることもできなかつた。その本能のほう彼女より強かつた。

ある晩——クリストフが外から帰つてきたある晩——家の中がいつになくごたつていた。ヴァトレー氏が胸の痛みで頓死したところであることを、彼は知つた。あとに一人残された娘のことを考えて、彼はしみじみと同情を覚えた。ヴァトレー氏の親戚は一人もわかつていなかった。そして娘はほとんど無一文の状態で残されたらしかつた。クリストフは大勝おおまたに階段を上がつていつて、扉とびらが開け放してある四階の部屋には入り込んだ。見ると、コルネイユ師が死者のそばについており、小さな娘が涙にくれて父を呼んでいた。門番の女が彼女に向かつてへまな慰め方をしていた。クリストフは娘を両腕に抱き取つて、やさしい言葉をかけてやつた。娘は絶望的に彼にすがりついてきた。彼は娘をその部屋から連れ出そうとした。しかし彼女は出たがらなかつた。で彼もいつしよに居残つた。かけ

つてゆく明るみの中で、窓ぎわにすわつて、彼はなお両腕に娘をゆすつてやった。娘は少しづつ落ち着いてきた。すすり泣きのうちに眠つた。彼はそれを寢台の上におろして、無器用な手つきで小さな靴の紐を解いてやつたりした。夜になりかかっていた。部屋の扉は開いたままになっていた。一つの人影が衣裳の衣擦れの音をたててはいつて来た。名残りの夕映えの光でクリストフは、喪服をつけた婦人の熱っぽい眼を認めた。彼女は室の入口に立つたまま、喉をつまらした声で言つた。

「私が参りましたのは……あの……私にその子を任せてくださいませんか。」

クリストフは彼女の手をとつた。ジェルマン夫人は涙を流していた。それから彼女は寢台の枕頭にすわつた。ちよつと間を置いてから彼女は言つた。

「私が今晚この子をみてやりましょう……。」

クリストフはコルネイユ師とともに、自分の階へ上がつていった。牧師は少しきまり悪げに、やつて来た弁解をした。やつて来たことを死者からとがめられなければよいがと、卑下した言い方をしていた。牧師として来たのではなくて、友人として来たのだと言つていた。

翌朝、クリストフがふたたび行つてみると、自分の氣に入つた人へすぐに身を託する子

供特有の率直な信頼さで娘はジェルマン夫人の首に抱きついていて、娘は新しい味方に引き取られることを承知した……。ああ彼女は早くもその養父を忘れていた。新しい養母へ同じような愛情を示していた。それはあまり安心できる事柄ではなかった。ジェルマン夫人の利己的な愛はこのことに気づいていたであろうか……。おそらく気づいたであろう。しかしそれは大したことではない。愛することが肝要だ。幸福はそこにある……。

葬式の数週間後にジェルマン夫人はその娘をパリから遠い田舎へ連れていった。クリストフとオリヴィエとはその出発を見送った。若い夫人はかつて彼らが見かけなかったよな、ひそかな喜びの表情を浮かべていた。彼女は彼らになんらの注意も向けなかった。けれども出かけるさいに、彼女はクリストフを見かけて、手を差し出して言った。

「あなたのおかげで救われました。」

「どうしたというんだらう、あんな変な真似まねをして？」とクリストフは階段を上がって行きながら、びつくりした様子でオリヴィエに尋ねた。

それから数日たつと、彼は一枚の写真を郵送された。写真には、一人の見知らぬ娘が、腰掛にすわって、小さな手を膝ひざの上に行儀よく組み合わせ、清らかな愁うれわしい眼で彼をながめていた。その下に、つぎのような文句が書いてあった。

——亡くなった私の娘があなたに御礼を申し上げます。

かくてそれらの人の間に、新しい生の息吹いぶが通っていった。上のほうに、六階の屋根裏に、力強い人間性の炉が燃えていて、その光が徐々に家の中へさし込んでいった。

しかしクリストフは少しもそれに気づかなかつた。彼にとってはそれはあまりに緩慢だつた。

「ああ、」と彼は嘆息した、「各種の信仰をもち各種の階級に属して、たがいに知り合うことさえ望んでいないあのりっぱな人たちを、みんな親密にならせることができたらなあ！ どうにもしかたがないのかしら。」

「君はどうしようというのか？」とオリヴィエは言った。「君が言うとおりにするには、相互の寛容と同情の力が必要だろう。そしてそれらが生まれ出てくる唯一の源は、内心の喜びである——健全な順当なごやかな生活の喜びである——自分の活動力を有益に使つたという喜び、何かある偉大なもののために役だつたと感ずる喜びである。そしてそのためには、偉大な時期もしくは——（このほうがなおいいのだが）——偉大へ向かいつつある時期にある、一つの国が必要だろう。それからまた——（これは前者と両立し得るも

のだが）——あらゆる人々の精力を働かせるすべを心得てる一つの力が、各党派の上に立つべき賢く強い一つの力が、必要だろう。ところが、各党派の上に立つ力と云っては、ただ一つきりない。それは、群集からではなく自分自身から力を引き出すところの力だ。無政府的な多衆に頼ろうとすることなく、おのれの功績によって万人にのしかかってくる力、常勝將軍、公衆の安危の独裁者、知力の最上者……そういう種類のものだ。しかるに、そういうものはわれわれの関知するところではない。必要なのは、機会が生ずることであり、機会をとらえ得る人々が現われることである。必要なのは幸運と天才とである。待ちそして希望をかけようじゃないか。力はあるのだ。古いフランスと新しいフランスとの、もつとも大なるフランスの、信仰と学問と仕事との種々の力が……。いざとなつたら、それらの力をことごとく結合して突進させる謎の言葉なぞが発せられたら、いかに大なる進展力となることだろうか！ もとよりその言葉を発し得る者は、君でも僕でもない。だれがそれを発するだろうか？ 勝利だろうか、光榮だろうか？……いや、忍耐なのだ！ もつとも肝要なことは、民族のうちにあるすべての力強いものが、積もり重なってゆき、みずからおのれを破壊せず、時期が来ない前に意氣沮喪そそろうしないことだ。幸運と天才とは、多年の堅忍と勉励と信念とによつてそれに催し得る民衆にしか、やって来るものではない。」

「どうだか？」とクリストフは言った。「幸運と天才とは、思ったよりも早く——思いもかけないときに、往々やって来るものだ。君たちは長い年月をあまり頭に置きすぎてる。用意しておきたまえ。帯を締め直したまえ。常に靴を足につけ棒を手にしていたまえ……。今夜、天主が門前を通られないともかぎらないのだ。」

その夜、天主はごく近くを通りたもうた。その翼の影は家の敷居に触れた。

外観上はつまらないいろんな事件の結果、フランスとドイツとの関係が突然険悪になっていた。そして二、三日のうちに、近隣の誼よじみによるふだんの関係から、戦争に先立つ挑ち発ようはつ的な調子に変わっていった。この状況に驚く者は、理性が世界を統べるといふ幻のうちうちに生きてる人々ばかりだった。しかしそういう人はフランスにたくさんいた。そして多くの人は、ライン彼岸の新聞紙の反フランス的暴ぼうれい戻ぼさが、日に日に盛んとなるのを見て、呆ぼうぜん然たるばかりだった。そのうちのある新聞などは、日ごろ両国における愛国心をわが物顔に取り扱い、国民の名によって論説し、あるいは独断であるいは国家とひそかに結託して、取るべき政策を国家に指定していたが、それがみな、侮辱的な最後通つうちよう牒ていを

フランスに送っていた。前からドイツとイギリスとの間にある紛議が起こっていた。そしてドイツは、それに関係しない権利をさえフランスに与えなかった。傲慢無礼な新聞紙は、ドイツに加担の宣言をすることをフランスに迫り、もしそうしない場合には、戦争の惨禍をまつ先に見さしてやると脅かしていた。威嚇いかくによつて味方につけるつもりでいた。打ち負かされて甘んじてる臣下としてフランスを前もつて取り扱っていた——要するに、オーストリアと同じ取り扱いをしていた。そこに、戦争に酔つてるドイツ帝国主義の傲慢ごうまんな狂気沙汰ざたが認められ、また、ドイツの為政家らが他民族をまったく理解し得ないことが認められた。なぜなら彼らは、彼らが法則としての普通の尺度を、力は最上の道理なりとの説を、あらゆる民族に適用していたのである。ところが、ドイツがかつて知らない光榮とヨーロッパの最上権とを、数世紀の間得ていた古い国民にたいしては、そういう暴戾うれいな警告が、ドイツの期待する結果と反対の結果を生じたのは、当然のことである。それはこの国民の眠つてる自尊心を躍おどりたさせた。フランスは全身おののいた。もつとも冷淡な人々でさえ怒りの叫びを発した。

ドイツ国民の多数は、そういう挑戦ちようせんに少しも関係するところがなかった。いずれの国においても善良な人々は、平和に暮らすことしか求めない。ことにドイツの善良な人々

は、穏和であり懇篤であつて、すべての人と仲よくしたがつており、他国人を攻撃するよりもむしろ、他国人を賞賛し模倣しがちである。しかし彼らはその意見を求めらるることもなく、また意見を述べるほど大胆でもない。世間の活動の雄々しい習慣をもつていない人々は、かならずや世間の活動の玩具がんぐとなされてしまう。彼らはりっぱなしかも愚かな反響となつて、新聞紙の荒々しい叫声や首領の挑発を響き返し、それをもつてマルセイエーズやラインの守りを作り出すのである。

それはクリストフとオリヴィエとにとつては恐ろしい打撃だつた。二人は愛し合うことに馴なれきつていたので、なぜ両国も同様に愛し合わなかが考えられなくなつていた。長く残存していて今突然眼覚めざめてきたその敵意の理由が、彼らにはわからなかつたし、ことにクリストフにはわからなかつた。クリストフはドイツ人として、自国民が打ち負かした民族を恨む理由を少しももたなかつた。同国人のある者らのたまらない傲ごうまん慢さをみずから不快に感じながらも、また、ブルンスウィック的なその強要にたいするフランス人の憤慨にある程度まで賛同しながらも、彼はフランスがどうしてドイツの同盟者にならうとしないかを、よく理解することができなかつた。結合すべき理由の多くを、共通な思想の多くを、また共に完成すべき大なる仕事の多くを、両国はもつてるように彼には思えたので、

両国が無益な怨恨えんこんに固執してゐるのを見ると、不満を感じさせられた。すべてのドイツ人と同じく彼も、その不和についておもに罪があるのはフランスだと見なしていた。なぜなら、彼の考えによれば、敗北の思い出がいつまでも拭ぬぐわれないのは、フランスにとつてつらいことであると認められはするものの、それは単に自尊心の事柄にすぎなくて、文化とフランス自身とのより高き利害の前には、当然消散すべきものであった。かつて彼はアルザス・ローレンの問題に考慮を向けたことがなかった。両州の併合は、数世紀間外国に付属した後にドイツの土地をドイツ祖国内に取りもどしたという、正当行為として考えるように、学校で教わってきたのだった。それで、自分の友がそれを罪悪だと見なしてゐるのを発見すると、彼はびつくりさせられた。彼はまだその事柄を友と語り合つたことがなかった。それほど彼は二人とも同意見であると思ひ込んでいた。ところが今や、その誠実と自由な知力とは彼にもよくわかつてるオリヴィエが、偉大な民衆はかかる罪悪にたいする復讐くしゅうを思い切ることもできるけれど、それでは体面を傷つけるわけになるのだということ、熱情もなく憤激もなくただ深い悲しみをもって、彼に言うのであった。

二人は理解し合うのになかなか困難だった。オリヴィエは、ラテンの土地としてアルザスを要求するフランスの権利について、歴史上の理由をもち出したが、それはクリストフ

になんの印象も与えなかった。その反対を証明する同じくらいに有力な理由も存在していた。およそ歴史というものは、勝手な主張のために必要なあらゆる理論を政治に供給してくれるのである。——けれど、この問題の単にフランス的方面ではなく人間の方面については、クリストフははるかに多く心を打たれた。アルザスの人々はドイツ人であったか、なかったか、それは問題とならなかった。彼らはドイツ人たることを欲していなかった。そしてそれこそ重きをなす唯一の事柄だった。「この民衆は俺おれのものだ、なぜなら俺の兄弟だから、」と言う権利をだれがもつてるものぞ。もしその兄弟がそのことを否認するならば、たとい非常に不当な否認であろうとも、その不当さはみな、自分を愛させることができなかつた者の上に、したがって自分の運命に彼らを結びつけるなんらの権利もない者の上に、落ちかかってくるのである。アルザスの人々は、四十年の間、種々の暴虐を受け、あるいは苛酷かしくにあるいは隠密にいじめつけられ、また、ドイツの正確な賢い統治によって、実際利するところさえあつたがなお、ドイツ人となることを望んでいなかった。そして、彼らの意志が疲れてついに譲歩するに及んでも、数時代の人々の苦しみ——生まれた土地から亡命することを余儀なくされ、もしくは、さらに痛ましいことには、その土地から離れることができずに、そこで忌まわしい羈絆きはんを、国が奪われ人民が隷属させられることを、

甘受しなければならなかった、数時代の人々の苦しみ、それは何物にも消されることができなかつた。

クリストフは、問題のそういう方面をかつて考えてもみなかつたことを、率直にうち明けて言った。彼はそのことから心を動かされていた。正直なドイツ人は、いかに真摯しんしなラテン人といえどもその熱烈な自尊心のためにもち合わせていないある誠実さを、議論に差し入れてくるものである。クリストフは、歴史の各時代に各国民がなしている同様な罪惡の実例を、あえてもち出そうとは考えなかつた。そういう恥ずかしい弁解をなすにはあまりに傲慢ごうまんだつた。人類が向上すればするほど、その罪惡はますます光明に照らされるゆえにますます嫌惡けんおすべきものとなることを、彼は知っていた。しかしながら、もしフランスのほうで勝利を得た暁には、フランスはドイツと同様に勝利のうちに自制することなく、罪惡の鎖になお一個の環を加えるであろうということをも、彼は知っていた。かくて、悲しむべき争鬪は永久につづいて、ヨーロッパ文明の最善のものが破滅し終わる恐れがあるだろう。

この問題はクリストフにとって苦しいものではあつたが、オリヴィエにとってにはさらにいつそう苦しいものだつた。それは、もつとも結合しやすい両国民間の兄弟相鬪そうげき的な争

闘の悲しみ、というだけではまだ十分でなかった。フランス自身のうちにおいて、国民の一部は他の一部と戦いの用意をしていた。数年来、平和主義的な反軍国主義的な理論が、国民のもつとも高尚な分子ともつとも卑賤ひせんな分子とによつて宣伝されて、しだいに広がっていた。国家はそれを長い間放任していた。およそ政治家らの利害に直接関係のない事柄はみな、懶惰らんだな道楽趣味から放任しておいたのである。そして、もつとも危険な理論が国民の血脈中に流れ込んで、準備されてる戦争をそこで根絶やそうとしてるのを、打ち捨てておくことよりも、その理論を直ちよくせつ截せつに支持することのほうが、危険の度は少ないだろうということをも、少しも考えてはいなかった。その理論は、いつそう正しいいつそう人間的な世界を目ざして協力しながら、親睦しんぼくなヨーロッパを打ち建てんと夢想してる、自由な知力の人々に話しかけていた。それからまた、だれのためにもなんのためにもわずかな危険さえ冒したからならぬ、下劣な人々の卑怯ひきょうな利己心へも話しかけていた。——その思想は、オリヴィエや多くの友だちにも伝わっていた。クリストフは家の中で、一、二度、人々の会談を聞いて呆然ぼうぜんとしてしまった。人のよいモークは、人道主義的な空想でいっぱいになっていて、戦争を防がなければならぬことや、それには兵士らを煽動せんどうし反抗させ場合によつては指揮官をも銃殺させるのが上策で、きつとうまくゆくに違いないとい

うようなことを、眼を輝かし落ち着き払って言っていた。技師のエリー・エルスベルゼは、もし戦いが始まったら、自分や自分の友人らは、国内の敵を片付けたあとでなければ国境へ進発しないと、冷やかな勢いで答え返していた。アンドレ・エルスベルゼは、モークの味方をしていた。クリストフはある日、二人の兄弟の恐ろしい喧嘩けんかに行き合わせた。二人はたがいに射殺してやるとおどかしていた。それらの殺害的な言葉は冗談の調子で発せられてはいたが、しかし二人が言っていることはみな実行の決心があることばかりらしかった。クリストフはこの馬鹿げた国民に驚きの眼を見張った。彼らは常に思想のためには殺害し合うことをも辞せない……。まるで狂人だ。合理的な狂人だ。各人が自分の思想だけを見つめて、一步も乱さずに最後まで進もうとしている。そしておのずからたがいに絶滅し合っている。人道主義者は愛国主義者と戦っている。愛国主義者は人道主義者と戦っている。その間に敵はやつて来て、祖国と人道とを一度に粉碎してしまうだろう。

「いったい君たちは、」とクリストフはアンドレ・エルスベルゼに尋ねた、「他の民衆の無産者らと了解がついているのですか。」

「なあに、だれかが始めなければなりません。そのだれかは、われわれであるべきです。われわれはいつもまつ先でした。合図を与えるのはわれわれの役目です。」

「そしてもし他の人々が歩き出さなかつたら？」

「いや歩き出します。」

「君たちには契約とか予定の計画とかいうようなものがあるのですか。」

「なんで契約なんかの必要がありません。われわれの力はあらゆる外交術よりもまさっています。」

「いやこれは観念上の問題ではなくて、戦略の問題です。もし君たちが戦争を絶やそうと望むならば、戦争からその方法を借りてくるがいいです。両国内での作戦計画をたてるべきです。一定の日にフランスとドイツとで、君たちの連合軍が其々の行動をすると、きめてかかるべきです。その時々のおまぐれな行動ばかりしては、なんでもりつぱな結果が得られよう。こちらにはただ偶然があるきりで、向こうには組織だった巨大な力が存している——その結果はわかりきっています。君たちはやつつけられるばかりです。」

アンドレ・エルスベルゼはよく聞いていなかった。彼は肩をそびやかして、ばくぜん漠然たる威嚇いかくだけで満足していた。一握りの砂でも歯車仕掛けの急所に投ぜらるれば、機械全部をこわすことができる、と彼は言っていた。

しかしながら、理論的な方法でゆつくり論ずることと、思想を実行に移すこととは、こ

とにそれを即座に決行しなければならぬ場合には、まったく別事である……。人の心の底を大きな波濤はとうが過ぎる時こそ、痛烈な時期である。人は自分を自由だと思い、自分の思想の主人だと思っている。ところがもう否応なしに引きずり込まれるのを感じる。ある隠れた意志が人の意志に反対してくる。そのときになって未知の主長を、人類の大洋を支配する法則の主体たる不可見の力を、人は初めて発見する……。

自分の信念にもつとも堅固でありもつとも確信してる知力ある人々も、その信念が消え去るのを見、決意するのを躊躇ちゆうちよし恐れ、そして往々、思いもかけなかった方向へ決意しては、みずからいたく驚いていた。戦争を攻撃するのにもつとも熱烈だったある人々も、祖国にたいする自負心と熱情とが、突然の激しきで眼覚めざめてくるのを感じていた。クリストフが見た多くの社会主義者らは、また急激な産業革命主義者らまでが、この相反する熱情と義務との間に板ばさみとなっていた。クリストフは、両国の紛議が始まったばかりで、まだ事態の重大さに思い及ばなかったころ、アンドレ・エルスベルゼに、もしドイツからフランスを取られたくなければ、今がちょうど彼の理論を実行すべき時期だということを、ドイツ人流の鈍馬さで言ってみた。すると彼は飛び上がって、憤然として答えた。

「やってごらんなさい！……いわゆる神聖なる社会党が、四十万の黨員と三百万の選挙人

とを有して控えていながら、あなたたちは、皇帝に口輪をはめて束縛を脱するだけの力もない馬鹿者ばかりだ……。僕たちがそれを引き受けてやりましょう。フランスを取ってみなざるがいい。僕たちはドイツを取ってみせますから……。」

待つ時期が長引くに從つて、すべての人のうちに熱が出てきた。アンドレは悩んでいた。自分の信念が真のものであるとわかつていながら、それを擁護することができないのもわかつていた。それから、團結的思想の力強い熱狂と戦争の息吹きとを、民衆のうちに伝播してゐる精神的伝染病に、自分も感染してゐるのが感ぜられた。その伝染病は、クリストフの周囲のすべての人々に、またクリストフ自身にも、働きかけていた。彼らはもうたがいに口をきかなかつた。別々に離れていた。

しかし、長くそういう不確定な状態のままではできなかつた。行動の風が不決断な人々を、否でも応でもいずれかの一派に投げ込んだ。そして、最後通牒の前日だと思われたある日——両国において行動の全弾力が緊張して殺害の用意をしてゐるある日、すべての人々が心を決してゐるのにクリストフは気づいた。相反するあらゆる党派の人々が、今まで憎み蔑視してゐた力のまわりに、フランスを代表してゐる力のまわりに、本能的に集まつていた。耽美家らも、腐敗芸術の大家らも、その放逸な作品のうちの所々に、愛国的

信念を発表していた。ユダヤ人らも父祖が住んでいた神聖な土地を防御しようと語っていた。軍旗の名を聞いただけで、臆病者も眼に涙を浮かべた。そして皆が真面目だった。皆が感染していた。アンドレ・エルスベルゼやその仲間の産業革命主義者らも、他の人々と同じだった——むしろより上だった。事情の必然性に圧倒され、軽蔑していた一派に加担せざるを得なくなり、陰鬱な狂猛さをもって、悲観的な憤激をもって、彼らはそれに意を決したために、殺戮のための狂暴な道具となっていた。労働者のオーベルは、学び知った人道主義と本能的な排外主義との間に引張り綱となつて、気も狂わんばかりだった。幾晩も眠らずに考えた後、ついにすべてを片付ける一つの方式を見出した。それは、フランスは人類の権化であるということだった。それ以来、彼はもうクリストフと口をきかなかつた。家の中のほとんどすべての人々が、クリストフにたいして扉を閉ざしていた。あのりっぱなアルノー夫妻でさえ、もう彼を招待しなかつた。彼らはなお音楽をやり芸術に取り囲まれ、皆と共通の懸念事を忘れようとつとめていた。しかしやはりそれをいつも考えていた。一人きりでクリストフに出会うときには、やさしく握手を与えはしたが、それも人目を避けて大急ぎでやるのだった。その同じ日にクリストフが二人いっしょのところへ出会うと、彼らはちよつと会釈をしながら、当惑そうな様子で立ち止まりもしないで

通り過ぎた。それに反して、幾年となく口もきき合わなかった人たちが、突然接近し合っていた。ある夕方、オリヴィエはクリストフを窓ぎわに呼んで、黙って下の庭をさし示した。そこには、エルスベルゼ兄弟がシャブラン少佐と話していた。

クリストフは、人々の精神の中に起こった革命に驚くだけの余裕がなかった。彼は自分のことではいっばいになっていた。彼は心が転倒して、自分でも押え得なかった。クリストフよりいっそう心乱れるはずのオリヴィエのほうが、いっそう落ち着いていた。オリヴィエ一人だけが感染を受けていないらしかった。近く起こるべき戦争にたいする期待と、予想せずにはいられない国内の分裂にたいする恐れとに、彼はすっかり気圧けおされてはいたけれど、早晩戦いを始めようとする二つの相反する信念が、共に偉大なものであることを知っていた。そしてまた、人類の進歩のための経験場となるのはフランスの役目であること、すべて新しい観念が花を開くためには、血で注がなければならないこと、なごをも知っていた。が彼自身としては、その白兵戦に加わることを拒んでいた。この文明の格闘のなかで彼は、「私は愛のために生まれました、憎みのために生まれたものではありません、」というアンチゴーンの銘言を繰り返したがっていた。——愛のために、そして、愛の別形である叡智えいちのために、生まれたのだった。クリストフにたいする情愛からだけで

も、彼はおのれの義務を明らかに示された。幾百万の人々が憎み合おうとしてるときにさ
 いして彼は、自分とクリストフとのような二つの魂の義務ならびに幸福は、この 擾乱じょうらん
 のうちにおいてたがいに愛し合い完全な理性を保持することだと、感じていた。一八一三
 年にドイツをフランスへ飛びかからしめたあの解放的憎悪ぞうおの運動に、加わることを拒んだ
 ゲーテのことを、彼は思い起こしていた。

クリストフはそれらのことを感じてはいたが、少しも落ち着けなかつた。彼はドイツか
 ら言わば脱走してきて、ドイツへ帰れない身であり、老友シュルツがあこがれてるあの十
 八世紀の偉大なドイツ人らもつていたヨーロッパ的思想に育てられ、軍国的で營利的な
 新しいドイツの精神を軽蔑けいべつしていたけれど、それでもなお、熱情の突風が心中に起る
 のを感じた。その突風からどの方面へ吹きやられるか自分でもわからなかつた。彼はその
 ことをオリヴィエに言いはしなかつた。しかし諸種の報道に気を配りながら苦悩のうちに
 日々を過ごした。ひそかに仕事を取りまとめ行李こくりを整えていた。もう理屈を言わなかつた。
 今は彼の力に及ばないことだつた。オリヴィエは友の心中の戦いを察して、不安の念でそ
 の様子をうかがっていた。あえて尋ねかねていた。二人は平素よりなおいっそう親しくな
 りたかつたし、今までより以上に愛し合っていた。しかし話をし合うことが恐れられた。

二人を引き離すような思想の違いを見出しはすまいかと、びくびくしていた。しばしば二人は視線を合わせては、やがて永久に別れんとする者のように、気づかない情愛を浮かべながら見合わせた。そして胸迫る思いで口をつぐんでいた。

それでも、中庭の向こうに建てられてる家の屋根の上では、この悲しむべき日々の間、驟雨しゅううの下で、職人どもが最後の金槌かなづちを打ち納めていた。クリストフと知り合いの饒舌じょうぜつな屋根職人は、遠くから笑いながら彼に叫んでいた。

「そら、また家ができ上がりましたぜ。」

暴風雨は、幸いにも、襲ってきたときと同じく速やかに過ぎ去った。官房の非公式な報道は、晴雨計のように、天気の回復を告げた。新聞紙の荒犬は、また犬小屋の中に潜んだ。暫時ざんじのうちには人々の魂の張りはゆるんだ。夏の晩だった。クリストフは息を切らして、吉報をオリヴィエにもたらしてきた。彼はうれしそうに大きく呼吸をしていた。オリヴィエは微笑ほほえみながらもやや悲しげに彼をながめた。そして心にかかっている一事をあえて尋ねかねた。彼はただ言った。

「どうだい、意見の合わなかった人たちが皆団結したのを、君は見たじゃないか。」

「ああ見たよ。」とクリストフは上機嫌きげんで言った。「君たちは道化役者だ。たがいに怒鳴り合いながら、心の底では皆一致してる。」

「君はそれを喜んでるようだね。」とオリヴィエは言った。

「どうして喜ばずにおれるものか。僕に対抗してなされた団結ではあっても……。なあに、僕のほうにも十分力はある……。それにまた、僕たちを巻き込む流れ、心のうちに眼覚めめざてくる悪魔、それを感じるのはいれしいことだ。」

「僕にはそれが恐ろしいのだ。」とオリヴィエは言った。「僕には永久の孤立のほう望ましい、わが民衆の団結があんな代価を要するのなら。」

二人は口をつぐんだ。そしてどちらも、心を乱してる問題に触れかねた。がついにオリヴィエは思い切って、喉のどをつまらしながら言った。

「うち明けて言ってくれたまえ、クリストフ、君は帰国するつもりだったのか。」

クリストフは答えた。

「そうだ。」

オリヴィエはその返辞を予期していた。それでもやはり心に打撃を受けた。彼は言った。

「クリストフ、そんなことが君に……。」

クリストフは額ひたいに手をやった。そして言った。

「もうそのことを話すのはよそう。もう僕はそのことを考えたくないのだ。」

オリヴィエは悲しげに繰り返した。

「君は僕たちと戦うつもりだったのか。」

「それは僕にもわからない。そんなことは考えたことがない。」

「しかし君は心の中で決心していたじゃないか。」

クリストフは言った。

「そうだ。」

「僕を敵として？」

「君をではけつしてない。君は僕の味方だ。僕がどこに行こうと、君は僕といっしょなんだ。」

「しかし僕の国を敵としてだろうか？」

「自分の国のためだ。」

「それは恐ろしいことだ。」とオリヴィエは言った。「僕も君と同じに、自分の国を愛し

ている。わが親愛なるフランスを愛している。しかしそのフランスのために、自分の魂を殺し得ようか？ フランスのために自分の本心にそむき得ようか？ それはフランスにそむくことと同じなのだ。憎悪ぞうおの念なしに憎んだり、憎悪の狂言を本気で演じたりすることが、どうして僕にできよう？ 近世の国家は、理解し愛するのを本質とする精神上の自由な教会を、その青銅の掟おきてに結びつけたと称することにおいて、忌むべき罪悪——やがてみずからを倒すべき罪悪——を犯したのだ。シーザーはシーザーたるべきであつて、神たらんとしてはいけない。われわれの金や生命を奪うことはできようが、われわれの魂にたいしては権利をもつてはしない。われわれの魂に血を塗るの権利はない。われわれが生まれ出たのは、光明を広めるためであつて、光明を消すためにではない。人は各自に義務をもつてゐるのだ。もしシーザーが戦争を欲するならば、戦争をするための軍隊を、戦争を職務とする昔どおりの軍隊を、もつがよい。僕は何も、武力にたいするいたずらな愚痴をこぼして時間を空費するほど馬鹿ではない。しかし僕は武力の軍隊に属してゐる者ではないのだ。僕は精神の軍隊に属してゐるのだ。幾千の同胞とともにそこでフランスを代表してゐるのだ。シーザーが土地を征服したければするがよい。われわれは真理を征服するのだ。」

「征服するためには、」とクリストフは言った。「打ち克かたなければいけない、生きなけ

ればいけない。真理というものは、洞窟どうくつの壁から分泌ぶんびつされる鍾乳石しょうにゅうせきのように、頭脳から分泌される堅い独断説ではない。真理とは生にほかならない。それを自分の頭の中に求むべきではない。他人の心の中に求むべきだ。他人と結合したまえ。自分の欲することをなんでも考えるのはいいが、しかし毎日人類の湯につかりたまえ。他人の生に生きてその運命を堪え愛することが、必要なのだ。」

「われわれの運命は、われわれが本来あるべきものになるということだ。たとい危険が伴おうとも、われわれが何か考えたり考えなかつたりするのは、われわれ自身の力でどうにでもなることではない。われわれは文明のある段階に達してるので、もうあとに引き返すことはできない。」

「そうだ、君たちは文明の高台の先端に達している。そこまで達した民衆はみな下に身を投じたくてたまらなくなる、危険な場所なのだ。宗教と本能とが君たちのうちでは衰えてしまつてる。君たちは知力だけになつている。危あぶない瀬戸ぎわだ。死が来かかっているのだ。」

「死はどの民衆にもやってくる。それはただ世紀の問題だ。」

「君は世紀を馬鹿にするつもりなのか。生全体が時日の問題じゃないか。過ぎ去る各瞬間

を抱きしめないで、絶対的なものうちにはいり込むとは、君たちもよほど馬鹿げた抽象家なんだ。」

「しかたないさ。炎は松明^{たいまつ}を燃やし去つてゆく。人は現在と過去とに共に存在することはできないからね、クリストフ。」

「現在に存在しなければいけない。」

「過去にある偉大なものであつたということも、りつぱなことだ。」

「それは現在にもなお生きた偉大な人々があつてそのことを鑑賞するという条件でこそ、りつぱなのだ。」

「それでも、今日つまらなく生きてる多くの民衆のようであるよりも、死んだギリシヤ人であることのほうを、君は好みはしないのか。」

「僕は生きてるクリストフでありたい。」

オリヴィエは議論するのをやめた。答え返すべきことが少ないからではなかつた。議論に興味がないからだつた。その議論の間彼はただクリストフのことばかり考えていた。彼は溜息^{ためいき}をつきながら言った。

「君は僕が君を愛してるほどには僕を愛してくれないんだね。」

クリストフはやさしく彼の手をとった。

「オリヴィエ、」と彼は言った、「僕は君を自分の生以上に愛してるのだ。しかし許してくれたまえ、生以上には、両民族の太陽以上には、君を愛していかないのだ。君たちの誤つた進歩に引きずられて闇夜やみよの中に陥るのが、僕は恐ろしいのだ。君たちのあらゆる思い諦あきらめの言葉の下には、深淵しんえんが潜んでいる。しかし行動のみが、たとい殺害的行動でさえ、唯一の生きてるものだ。われわれはこの世において、焼きつくす炎かあるいは闇夜か、その一つを選ぶばかりである。薄暮に先立つ夢想にはいかに愁うれわしい甘さがあるとも、僕は死の先駆者たるその平穩を望まない。無窮な空間の静けさを僕は恐れる。火の上に新たな薪まきたば束を投じたまえ。もつと、もつと、投じたまえ。必要なら僕をもいっしょに投ずるがいい……。僕は火が消えることを望まない。もし火が消えたら、われわれはもうおしまいだ、現存するすべてのものはもうおしまいだ。」

「僕は君のそういう声を知ってる、」とオリヴィエは言った、「それは過去の野蛮の底から来る声だ。」

彼は柵たなからインド詩人の書物の一つ取って、クリシュナ神の崇厳な激語を読み上げた。

奮たい起たてよ、しかして決然と戦えよ。快樂をも苦痛をも、利得をも損失をも、勝利をも敗北をも、すべて意に介せずして、全力をもつて戦えよ……。

クリストフは彼の手からその書を奪い取つて読んだ。

……およそ何物も予に活動を強しうるものなく、何物も予に属せざるものなけれども、予はなお活動を捨てざるなり。もし予にして、不断不撓ふたうなる活動もて、人間にその則のつとるべき実例を与うることなくば、人間はみな滅び失うせん。もし予にして、たとい一瞬たりとも活動を止めなば、世界は混沌こんとんのうちに陥りて、予は人生を滅ぼすものとならん……。

「人生、」とオリヴィエは繰り返した、「人生とはなんだろう？」

「一つの悲劇だ。」とクリストフは言った。「悲劇を歓呼せんかな！」

大波は消えていった。すべての人々がひそかな恐れをいだいて急いで忘れようとした。

だれももう先ほどからの出来事を覚えていないようなふうだった。それでもなおそのことを考えてるのが認められた。なぜなら、彼らは皆喜ばしい様子で、ふたたび生活に、脅かされたときに初めて全価値がわかる日常の善良な生に、心を寄せていた。ちやうど危険が一つ過ぎ去ったかのように、以前に倍加した執着を示していた。

クリストフは以前に数倍した熱心さで、また制作に身を投じた。オリヴィエをもいっしょにそれへ引き込んだ。二人は陰鬱いんうつな思想にたいする反動から、ラブレール風の叙事詩をいっしょに制作し始めた。その叙事詩は精神的圧迫の時期の後に来る強健な唯物主義の色を帯びていた。その伝説的な主人公——ガルガンチュア、法師ジャン、パニユルジュ——にオリヴィエは、クリストフの感化で、新しい人物を一人加えた。それはパシアンズという百姓であつて、素朴そぼくな、小賢こせいかしい、ずるい男で、打たれ、奪われ、勝手なことをされ——妻を愛され、畑を荒らされ、人からされるままになり——それでいて飽かず、自分の土地を耕し——戦争にやらされ、あらゆる打擲ちやうちやくを受け、人からされるままになり——主人たちの功績や自分が受ける打擲を、期待し面白がり、「このままでいつまでつづくものか」と考え、最後の蹉跌さてつを予見し、それを横目でじろじろ待ち受け、無言の口を大きく開いてすでに前もつて嘲笑あざわらつていた。果たしてある日、ガルガンチュアと法師ジャンと

は、十字軍に行つて行くえ不明になった。パシアンズは彼らの死を正直に惜しみ、快活にみずから慰め、おぼれかかったパニユルジュを救い、そして言った。「お前さんがわしにまだいろんな悪戯わるさをすることは、よくわかつてる。だけどわしはお前さんを捨てることのできない。お前さんはわしの腹の役にたつ、わしを笑わしてくれるから。」

そういう詩に基づいて、クリストフは作曲した。合唱付の交響曲的大画幅で、勇壮滑こっけ稽いな戦争、放埒ほうらつな祭礼、道化た奇声、大袈裟おおげさな子供じみた喜びをもつてるジャヌカン的な恋歌、海上の暴風雨、鳴り響く島とその鐘が含まれていて、最後の牧歌的な交響曲シンフォニーには、牧場の空気がいっぱい満ちていて、朗らかなフルートとオーボエの喜悦や、民謡などを含んでいた。——二人の友はたえず愉快に仕事をした。頬ほおの蒼あおい瘦やせぎすのオリヴィエも、力のうちに浸つていた。彼らの屋根裏の室には喜悦の竜たつまき巻が吹き過ぎていた……。自分の心と友の心とをもつてする創作！二人の恋人の抱擁も、この親しい二つの魂の和合に比べては、楽しさも熱烈さも劣るであろう。二つの魂はついにすっかり融とけ合つてしまつて、同時に同じ思想の閃ひらめきをもつほどになった。あるいはまた、クリストフがある場面の音楽を書いてると、オリヴィエはやがてその言葉を見出していた。クリストフはオリヴィエを自分の否応なしの航路中に引き入れていた。彼の精神はオリヴィエを包み込み、

オリヴィエを豊饒ほうじょうならしめていた。

創造の喜びに勝利の愉快さも加わってきた。ヘヒトは思い切ってダヴィデを出版したのだった。その総譜は時機に投じて、外国でたちまち名声を博した。ヘヒトの友人でイギリスに住んでいるワグナー派の有名な楽長が、その作品に感激した。彼は多くの音楽会にそれを演奏して、非常な成功を収め、それが彼の感激とともに、ドイツへ反響して、ドイツでも演奏された。楽長の方ではクリストフと文通を始め、他の作品を求め、尽力を申し越し、熱心な宣伝をしてくれた。ドイツでは、昔排斥されたイフィゲニアがふたたび取り上げられた。人々は天才だと叫んだ。クリストフの経歴の小説的な事情は、少なからず人の注意をひく助けとなった。フランクフルト新聞が初めて、反響の大きな記事を掲げた。他の新聞もそれにならった。するとフランスにおいてもある人々は、フランスに大音楽家がいることに思いついた。パリーの音楽会長の一人はクリストフに、そのラブラー風の叙事詩曲がまだでき上がらない前から演奏を申し込んだ。グージャールはクリストフの来たるべき名声を予感して、自分が発見した天才たる友人のことを、意味深げな言葉で語り始めた。そして素敵なダヴィデを記事で賞賛した——前年ある記事で二、三行悪罵あくばを加えたことなんかは、もうきれいに忘れはてていた。彼の周囲の者も一人として、もうそれを覚え

てはいなかった。パリーでは、ワグナーやフランクも昔はひどくけなされたものであるが、今日では新しい芸術家らを排斥するために賞賛されており、その新しい芸術家らとて、明日は賞賛されるようになるだろう。

クリストフはこういう成功をほとんど予期していなかった。いつかは勝利を得ると知ってはいたけれど、それがこんなに早かろうとは思っていなかった。そしてあまりに急な成果を信じかねた。彼は肩をそびやかして、構わないでおいてくれと言っていた。前年ダヴィデを書いた当時に喝采かつさいされたのなら、訳がわかっていた。しかし今ではもうそれから遠くに来ていて、幾段もの進歩をしてるのだった。昔の作品のことを喋々ちようちようしてくれる人々に、彼は好んでこう言いたかった。

「そんなつまらないものは構わないでくれ。僕はその作がいやだ。君たちも嫌だ。」
 そして彼は、気持を乱されたことを多少いらだちながら、新しい仕事に没頭した。それでもひそかな満足を感じていた。光栄の最初の光はきわめて楽しいものである。打ち克つかのは愉快的健全なものである。それは、開けゆく窓であり、家の中に入り来る初春の気である。——クリストフは、自分の昔の譜作を、そしてことにイフィゲニアを、いくら軽蔑けいべしてみても駄目だめだった。先年あれほど彼に屈辱を与えたその惨めな作イフィゲニアが、

ドイツの批評家らから賞賛され劇場から求められてるのを見るのは、彼にとってはやはり一つの腹癒せだった。ちやうど今もドレスデンから手紙が来て、つぎの季節にその作の上演を許してもらえれば幸いだと……彼へ言つてきた。

多年の艱難かんなんの後ついに、より平安な前途と遠くに勝利とを瞥見べっけんさせる右の報知が、クリストフのもとへ届いた同じ日に、他の一通の手紙が、また彼のもとへ到着した。

それは午後のことだった。隣室のオリヴィエへ快活に話しかけながら、顔を洗つてるところへ、門番の女が一对の手紙を扉とびらの下から差し入れていった。母の筆跡……ちやうど彼も母へ手紙を書くつもりだった。自分の成功を知らせるのがうれしかった……。彼は手紙を開いた。わずか数行だった。ひどく震えた筆跡だった……。

いとしき子よ、私は身体があまりよくありません。もしあなたが来られるものなら、も一度会いたくてなりません。あなたに接吻せつぶんします。

母より

クリストフは呻き声^{うめ}をたてた。オリヴィエはびっくりして駆けてきた。クリストフは口がきけなくて、テーブルの上の手紙をさし示した。彼はなお呻き声をつづけて、オリヴィエが言っていることを耳にも入れなかった。オリヴィエは一目で手紙を読み取って、彼を落ち着かせようとした。彼は上衣を置いてる寝台へ駆け寄って、大急ぎでそれを引つ掛け、略式カラーもつけないで——（指があまり震えてつけられなかった）——外へ出かけた。オリヴィエは階段の上で彼に追いついた。彼は何をするつもりなのか。手当たりしだいの汽車で出発するつもりなのか。でも晩にならなければ汽車はない。停車場で待つより家で待つほうがましだ。第一必要な金さえもつてるのか。——二人はポケットを捜した。そして二人がもつてる全部を集めても、三十フランばかりにしかならなかった。九月のことだったから、ヘイトもアルノー夫妻もすべての友人らが、パリーの外に出かけていた。便りの者は一人もいなかった。クリストフは夢中になって、一部分は歩いてゆくと言った。オリヴィエは一時間待つてくれと頼み、必要な金高を見つけてくると約束した。クリストフは言われるままに任せた。自分でなんの考えもつかなかった。オリヴィエは質屋へ駆けて行った。質屋へ行くのは初めてだった。もしそれが自分のことだったら、どれも皆何か

の大事な思い出を帯びてる品物を一つ入質するよりは、欠乏を我慢するほうが好ましかった。しかし今はクリストフのことであり、少しも猶予しておれなかった。彼は懐中時計を入質した。思つてたよりはるかに少ない金高を渡された。で彼は余儀なく、また自分の室にもどり、数冊の書物を取り、それを古本屋へもっていった。それは切ないことだった。しかし今の場合そんなことはほとんど頭になかった。クリストフの悲痛にすっかり心を奪われていた。もどつてきてみると、クリストフは前どおりの場所にいて、がっかりしぬいてる様子だった。所持の三十フランにオリヴィエが得てきた金を加えると、必要以上の金高になった。クリストフはすっかり力を落としていたので、友人がどうしてその金を手に入れたか、また自分の不在中の生活費を取りのけているかどうかを、尋ねようともしなかった。オリヴィエもそんなことは念頭になかった。もつてるだけのものをすべてクリストフに渡した。そしてまるで子供のめんどうをでもみるように、クリストフの世話をやかなければならなかった。クリストフを停車場まで連れてゆき、汽車が動き出すまでそのそばを離れなかった。

クリストフは夜の闇やみの中に包まれてゆきながら、眼を大きく見開いて前方を見守り、そして考えていた。

「間に合うだろうかしら？」

母が来てくれと書いてよこした以上は、母はもう待つておれないに違いないことが、明らかにならわかつていた。彼はいらだちながら特急列車の疾駆をもどかしがった。ルイザのもとを離れたことを苦々^{にがにが}しく自責するとともにまた、その自責がいかに無駄^{むだ}なものであるかを感じていた。事の成り行きを変えるのは彼の力には及ばなかったのである。

そのうちに、客車の車輪と弾機^{ばね}との単調な動揺は、しだいに彼を落ち着かせ、あたかも音楽から起こされる波が力強い律動^{リズム}にせきとめられるように、彼の精神を支配していった。彼は遠い幼年時代の夢から現在までの全過去を、ふたたび眼の前に浮かべた。恋愛、希望、失意、悲哀、または、苦しみ楽しみ創造する、かの晴れやかな力、かの陶酔、または、自分の魂の魂であり隠れたる神である、輝かしい生とその崇高な影とを抱きしめる、かの愉悅。それらのすべてのものが今や彼のために遠くに輝き出してきた。欲望の騒乱、思想の混乱、過失、錯誤、激しい戦い、それらのものが、洋々たる流れによつて永遠の目的のほうへ運ばれてゆく逆巻きや渦巻き^{うず}のように、彼の眼には映った。彼は艱難^{かんなん}な年月の深い意義を見出した。しだいに大きくなる河流は、各艱難^{かんなん}ごとに、一つの障害を打ち破つて、狭い谷間からより広い谷間へ出で、やがてその谷間を満たしてしまうのだった。そしてそ

のたびごとに、限界はさらに広がり、空気はさらに自由なものとなった。フランスの丘陵とドイツの平野との間で、その河流は牧場の上まであふれ、丘の麓を蚕食し、両国から来る水を集め取り入れながら、努力して自分の通路を開いていった。かくてそれは両国の間を流れたが、両国を分離せんがためにではなく、両国を結合せんがためであつた。両国はこの河流のうちで縁を結んでいた。そしてクリストフは初めて、自分の天命を自覚した。それは、相敵対せる両民衆の間を通じて、兩岸の生の力をことごとく、動脈のように担いゆくことであつた。——異常な清朗さが、突然の静明さが、もつとも陰暗な時期において彼に現われた……。それから、幻影は消え失せた。そして、老母の悲しいやさしい面影だけがまた現われた。

ようやく曙の光が見えそめたころ、彼はドイツの小さな町に到着した。まだやはり逮捕令状のもとにある身分だったから、人に気づかれないように用心しなければならなかつた。けれど停車場ではだれも彼に注意を向けなかつた。町中は眠っていた。人家は戸が閉まつており、街路は寂然としていた。ちょうど、夜の燈火が消えてゆき昼の光がまだささない灰色の時刻——眠りがもつとも楽しくて夢が東の灰白い明るみに照らされる時刻であつた。一人の小さな女中が店の雨戸を開きながら、古い民謡を歌っていた。クリストフは感動の

あまり息もつけないほどだった。おう祖国よ！いとしきものよ！……彼はその地面くちびるに唇をつけたかった。その素朴そぼくな唄うたを聞くと、しみじみとした気持になって、祖国を離れていかに不幸だったか、いかに祖国を愛していたかを、感ぜさせられた……。彼は息を凝らしながら歩いていった。自分の家が眼にはいつたときには、叫びの声を押え止めるために、立ち止まって口に手をあてなければならなかった。そこに住んでる人は、彼から一人残されてる人は、今どういう状態にあるだろうか？……彼は息について、ほとんど駆けるようにして戸口まで行った。戸は半ば開いていた。押しあけて中にはいると、だれの姿も見えなかった……木の古い階段が一足ごとにきしかった。彼は上の階へ上がった。家じゆうに人がいないかと思われた。母の室の扉とびらは閉とまっていた。

クリストフは胸むねを躍おどらせながら、扉の把手とってに手をかけた。そして開くだけの力もなかった……。

ルイザは一人ぼっちで床についていて、もうこれが最後だと感じていた。他の二人の息む子のうち、商人のロドルフはハンブルグに移っていたし、も一人のエルンストはアメリカへ行って消息不明になっていた。彼女の世話をしてくれる者と言っては、ただ隣の女が一

人いるきりで、その女が日に二度ずつやって来ては、ルイザの用をしてくれ、しばらく居残つていて、それからまた自分の仕事をしに帰つていった。彼女は時間があまり正確でなくて、往々来るのも遅れがちのことがあつた。ルイザは自分の病気を当然のこととしていたが、それとともにまた、人から忘れられるのも当然のこととしていた。彼女は苦しむのに馴なれきつていて、天使のような忍耐をもつていた。常に心臓が悪くて、ときどき息づまりがし、その間は死ぬような思いをした。眼はぼーつとうち開いて、両手はひきつり、汗が顔に流れた。でも彼女は愚痴をこぼさなかつた。当然の容態だと心得ていた。もう死の覚悟をしていた。臨終の秘サクラメント蹟跡をも受けてしまつていた。気がかりなことはただ一つきりだつた。すなわち天国にはいるにふさわしい者でないと神から思われはすまいかということだつた。その他のことはみな辛棒強く甘受していた。

その侘わびしい室の薄暗い片隅かたすみに、寢所の枕頭ちんとうの壁面に、彼女は思い出の聖殿をこしらえていた。三人の息子むすこ、夫——彼女は夫の思い出にたいしてはなお初婚時代の愛情を失わないでいた——老祖父、兄のゴットフリートなど、すべて親愛な人たちの面影をいっしよに集めていた。また少しでも自分に親切を尽くしてくれた人たちにたいしては、いじらしい愛着の念をいだいていた。敷布の、顔に近いところには、クリストフから送つてきた

最近の写真を針で留めていた。またクリストフの新しい手紙を枕の下に置いていた。彼女はりっばに片付けて細かなところまできれいにしておくのが好きだった。室の中がすっかり整っていないと気持が悪かった。彼女は一日のいろんな時刻を示してくれる戸外のかすかな物音に興味をもっていた。もう長い前からそれを聞きなれていたのである。彼女の一生はその狭い場所の中で過ごされたのだ……。彼女はよく大事なクリストフのことを考えていた。今自分のそばに彼がいたらと彼女はどんなに望んでいたろう！ けれども彼が今自分のそばにいないということをも、彼女はもうあきらめていた。天で彼に会えると信じていた。眼をつぶりさえすればもう彼の姿が浮かんできた。彼女はうつらうつらと過去の思い出のなかに日々を過ごした……。

彼女はライン河畔の昔の家にいるところを思い浮かべた……。ある祝日……。ある美わしい夏の日、窓は開いていた。白い大道の上に太陽の光が輝いていた。小鳥のさえさえる声が聞こえていた。メルキオルと祖父とが扉の前に腰をおろして、大声に談笑しながら煙草を吹かしていた。ルイザにはその二人の姿は見えなかった。けれど、その日夫が家にいることや、祖父が上機嫌であることなどが、非常にうれしかった。彼女自身は下の室にいて、食事の支度をしていた。りっばな御馳走だった。彼女はそれを自分の眼の玉ほど大事に見

守っていた。びつくりするようなものがあつた。大栗の菓子があつた。子供がさぞ喜びの声をたてるだろうと、聞かないうちから楽しんでいた……。子供、彼はどこにいるのかしら？ 階上うへえにいるのだった。その音が聞こえていた。ピアノを稽古けいこしていた。何をひいてるのか彼女にはわからなかつた。けれど、そのいつもの小さな妙音を耳にしたり、子供がそこにごくおとなしくすわつてるのがわかつたりするのが、彼女にはうれしかつた……。なんとという美うるわしい日だろう！ 馬車の陽気な鈴音が道を通っていた……。ああ実にいい！ そして焼き肉は？ 窓から外を見る間に焦げやしなかつたかしら。ごく好きではあるがまた恐こわくもある祖父から、怒られ叱しかられはすまいかと、彼女はびくびくしていた……。が仕合わせにも焼き肉は無事だつた。そら、すっかりでき上がったし、食卓も整つた。彼女はメルキオルと祖父とを呼んだ。彼らは威勢よく返辞をした。それから子供は？……。もうひいていなかつた。先刻からピアノの音はやんでいたが、彼女は気がつかないでいた……。「クリストフ！」……。どうしてるのだろう？ なんの音も聞こえなかつた。いつも彼は食事に降りてくるのを忘れがちだつた。父がまた怒鳴りつけるかもしれない。彼女はは大急ぎで階段を上がつていった……。「クリストフ！」……。返辞がなかつた。彼女は彼の勉強室とびらの扉を開いてみた。だれもいなかつた。室は空からだつた。ピアノには蓋ふたがしてあつ

た……。彼女は心配になった。彼はどうなったのかしら？ 窓が開いていた。あ、落ちたのじゃないかしら！……彼女はつとした。身を乗り出してながめてみる……。「クリストフ！」……どこにもいない。彼女は方々の室を見て回る。下から祖父が大声に言っている。「おいでよ、心配することはない。きつとあとから出て来る。」彼女は降りて行きたくない。彼がその辺にいることはわかっている。冗談に姿を隠して、母を心配させようとしているのだ。ほんとに悪戯いたずらつ兎うしだこと！……そうだ、もうそれにきまっている。床板がきしった。扉とびらの向こうにいるのだ。けれど鍵かぎがない。鍵！ 彼女は引き出しの中のたくさんの鍵のうちから、大急ぎでそれを捜そうとする。これかしら、こちらかしら……いや、これではない……ああとうとう見つかった！……だが錠前の中に差し込めない。手が震えている。彼女はあせる。急がなければならない。なぜ？ それは彼女にもわからない。ただ急がなければならないことだけわかってる。急がなければ間に合わないだろう。扉の向こうにクリストフの息が聞こえてる……。ああこの鍵が！……ついに扉が開く。うれしい叫び声。彼だ。彼は彼女の首に抱きつく……。ああこの、悪戯いたずらな、よい、かわいい兎！……

彼女は眼を開いた。彼がすぐ前にそこに立っていた。

先ほどから彼は、変わりはてた彼女をながめていた。瘦せはてかつ脹れぼつたその顔、諦めの微笑をさらに痛ましくなしてその無言の苦惱、それから、静けさ、周囲の寂寞さ……。彼は心を刺し通される心地がした……。

彼女は彼を見た。別に驚きはしなかった。えも言えぬ微笑を浮かべた。彼女は腕を差し出すことも言葉をかけることもできなかった。彼は彼女の首に抱きついた。彼は彼女を抱擁し、彼女も彼を抱擁した。太い涙が彼の頬に流れた。彼女はごく低く言った。

「ちよつと待つて……。」

彼は彼女が息づまつてるのを見てとつた。

二人は身動きもしなかった。彼女は両手で彼の頭を撫でていた。彼の涙はなお流れつづけた。彼は顔を蒲団に埋めてすすり泣きながら、彼女の手に接吻した。

苦しみが過ぎ去ると、彼女は口をきこうとした。しかし言葉が見つからなかった。彼女は思い違いをしていた。そして彼にはよく訳がわからなかった。しかしそれがなんだろう？ 二人は愛し合っており、たがいに見合っており、たがいに触れ合っているのだった。それこそ肝要なことだった。——彼女はどうして一人ぼっちにされてるのか、彼は憤慨し

て尋ねた。彼女は世話をしてくれてる女を弁護した。

「あの人はいつもここに来てるわけにはゆきません。自分の仕事があるんですから……。」
 すべての音をはつきり出せない切れ切れの弱い声で、彼女は急いで、墓のことについて少し注文をした。それから、母を忘れてる他の二人の息子へも、自分の愛情を伝えてくれとクリストフに頼んだ。オリヴィエのことについても一言いい残した。彼女はクリストフにたいするオリヴィエの愛情を知っていた。オリヴィエへ祝福を送る——（彼女はすぐにおずおず言い直してもつと謙遜な言葉を用いて）——「敬意をこめた愛情」を送る旨を、伝えてほしいとクリストフに頼んだ……。

彼女はまた息が詰まった。彼は彼女をささえて寢床の上にすわらせた。汗が顔に流れていた。彼女は微笑もうとつとめていた。息子に手をとられてる今ではもう世に望みのこともないと、心に思っていた。

クリストフは突然、自分の手の中で母の手が痙攣するのを感じた。ルイザは口を開いた。彼女は限らないやさしさで息子をながめた。——そしてこの世を去った。

その日の夕方、オリヴィエがやって来た。彼は自分がしばしば経験したことのあるそう

いう悲痛なおりに、クリストフを一人きりにしておくことが、考えても堪えられなかった。それにまた、友がドイツにもどると危険な身の上であることを、非常に気づかった。彼は友の身を警戒しに行きたがった。しかしそこまで行くだけの金がなかった。クリストフを送っていった停車場から帰ってきて、彼は家に伝わってる多少の宝石を金に代えようと決心した。もう質屋はしまってる時刻だし、つぎの汽車で出発したくはあったので、町の骨董屋こっとうへ行こうとした。すると階段でモークに出会った。モークは彼の考えを聞くと、なぜ自分に話してはくれなかったかと心からの恨みを示した。必要な金高を無理に受け取らした。自分が喜んで二人の世話をしたがつてるのに、オリヴィエは時計を入質し書物を売ってクリストフの旅費をこしらえたと考えると、うらめしかった。そして二人の助けになりたい熱心のあまりに、自分をもクリストフのもとへ連れて行ってくれと言い出した。それを思い切らせるのにオリヴィエはたいへん骨が折れた。

オリヴィエが来たことは、クリストフのためによかった。クリストフはその一日を、永眠してる母と二人きりで失望落胆のうちに過ごした。世話をしてくれてた隣の女が来て、多少のめんどうをみてくれ、それから帰って行って、もうふたたび姿を見せなかった。事もない痛ましい静寂のうちに、時が過ぎていった。クリストフも死者と同様に身動きをし

なかつた。死者から眼を放さなかつた。涙も流さず、考えもせず、彼自身が死者だつた。——オリヴィエによつてなされた友情の奇跡がふたたび彼のうちに涙と生命とをもたらした。

「勇気をもてよ！ 生は苦しむの価値あり、

共に泣く忠実なる眼の存する限りは。」

二人は長く抱擁し合つた。それからルイザのそばにすわつて、低い声で話した……。夜となつていた。クリストフは寢台の裾すそのほうに肱ひじをついて、幼年時代のことを思い出すまに語つた。その思い出の中にはたえず母の面影が現われてきた。彼はときどき口をつぐんで、それからまた話を始めた。しまいには、疲労に圧倒され顔を両手に隠して、すっかり黙つてしまつた。オリヴィエが近寄つてのぞき込んでみると、彼はもう眠つていた。そこでオリヴィエは一人で通夜した。けれど彼もまた、寢台の倚木よりぎに額を押しあてて眠つてしまつた。ルイザはやさしく微笑ほほえんでいた。二人の子供の番をして夜を明かすのがうれしいようなふうだつた。

朝になりかかったころ、二人は扉をたたき音に眼を覚ました。クリストフは立っていつて開いた。それは隣の指物屋だった。クリストフの来ることが告訴されたから、逮捕されまいと思うなら出発しなければいけないと、知らせに来てくれたのだった。クリストフは逃げるのを承知しなかった。母を今や永久に休らうべき場所へ送り届けないうちは、そのそばを離れたくなかった。しかしオリヴィエは、汽車に乗ってくれと彼に嘆願し、彼の代わりに忠実に母の見送りをすると誓った。そして無理やりに家から出かせた。彼が決心を翻えさないようにと、停車場までついて行った。クリストフはなお我を張って、せめて河を見ないうちは出発しないと誓った。その河のそばで、彼の幼年時代は過ぎられたのであり、その高く鳴り響く反響を、彼の魂は法螺貝のように、永久に保有してるのであった。町なかに姿を見せるのは危険ではあったけれど、彼の意志に従って町を通らなければならなかった。二人はライン河の岸に沿って行った。河は力強い平安の様子で、低い兩岸の間を流れ、北海の砂浜の中に没しようとして急いでいた。大きな鉄橋が霧に包まれながら、巨大な車の車輪の半分のようなその二つの橋弧を、灰色の水の中に没していた。遠くには船が霧の中に隠れて、牧場の間の屈曲した水路をさかのぼっていた。クリストフはそ

の夢景色の中にうつとりと我を忘れた。オリヴィエはそれを引きもぎって、腕を取りながら停車場へ連れていった。クリストフはなされるままに任した。夢遊病者のようになっていた。オリヴィエは彼を発車しかけてる汽車に乗せた。そして、翌日フランスの第一の停車場で落ち合つて、クリストフ一人でパリに帰らないようにと、二人は約束した。

汽車は出た。オリヴィエは家に帰った。入り口に二人の憲兵が、クリストフの帰りを待ち受けていた。彼らはオリヴィエをクリストフだと間違えた。クリストフの逃走にはそれがかえつて便利だったから、オリヴィエは急いで誤解をとこうとはしなかった。そのうえ官憲のほうでも、この間違いに失望の様子を示しはしなかった。逃走者を捜索するのに大した熱心を見せてはいなかった。クリストフの出発を内心では別に怒っていないことが、オリヴィエにさえ感ぜられた。

オリヴィエは翌朝まで居残つて、ルイザの葬式を済ました。クリストフの弟である商人のロドルフが汽車の間の時間だけ葬式に列した。この尊大な男は、ごく几帳面きちょうめんに葬式の列に加わつたが、そのあとですぐに出発してしまつて、オリヴィエへ向かつて一言も、兄の消息も尋ねなければ、母のために尽くしてくれた礼も言わなかった。オリヴィエはなお数時間町で過ごした。町には、生きてる者で彼の知人は一人もいなかったが、多くの親し

い故人の影が宿っていた。少年クリストフ、クリストフが愛してた人々、クリストフを苦しめた人々——それから、なつかしいアントアネット……。この土地に生きてたそれらの人々から、今はもうなくなつてゐるクラフト家の一家から、何が残っていたか？ 一外国人の魂の中にある彼らにたいする生きた愛情、そればかりであつた。

その午後、待ち合わせる約束の国境の停車場で、オリヴィエはクリストフに出会つた。それは木立深い丘の間の小村だつた。二人はパリ―行きつぎの汽車をそこで待たないで、道中の一部をつぎの町まで徒歩で行くことにきめた。彼らは二人きりになりたがつていた。遠くに斧おのの鈍い音が響いてゐる黙々たる森の中を、彼らは歩きだした。丘の頂の空地に達した。眼下には、なおドイツ領である狭い谷間に、森番人の家の赤い屋根、森中の緑の湖水のような小さな牧場。周囲には、靄もみに包まれた青黒い森林の大洋。霧が樅もみの枝葉の茂みの中にすべり込んでいた。透き通つた霧の帷しほりが、物の線を柔らげ色を柔らげていた。すべてがじつとして動かなかつた。人の足音も声も聞こえなかつた。秋に熟した榎ぶなの金銅色の葉の上に、雨の雫しずくが音をたてていた。石の間には、小さな流れの水が鳴っていた。クリストフとオリヴィエは立ち止まつて、もう身を動かさなかつた。各自に自分の喪の悲しみに思

いをはせていた。オリヴィエは考えていた。

「アントアネット、あなたはどこに居るのか？」

クリストフは考えていた。

「母がない今となつては、成功も何になろう？」

しかし二人ともおのおの、死者の慰藉いしやの言葉を耳にした。

「かわいいお前、私たちのことを嘆いてはいけません。私たちのことを考えてはいけません。彼のことをお考えなさい……。」

二人は顔を見合わせた。そしてどちらも、もう自分の苦しみを感ぜないで、友の苦しみを感ぜた。二人は手をとり合つた。朗らかな愁うれいが二人を包んだ。そよとの風もないのに、霧の帷が静かに消えていった。青空がまた晴れ晴れと現われてきた。雨あがりの地面のしめやかな心地よさ……。それは情けある美しい微笑を浮かべて、両腕で胸の上に人を抱き取ってくれる、そして言ってくれる。

「休息なさい。すべてよいのだ……。」

クリストフの心は和らいできた。二日以前から彼は、なつかしい母の思い出のなかに、母の魂のなかに、すっかり生きてきたのだった。その微々たる生活——子供のいない家の

沈黙のなかに、自分を打ち捨てた子供たちのことを考えながら、過ごされてきた単調な寂しい日々——安らかな信仰と、やさしい親切な気質と、微笑める忍従と、利己心の皆無とをそなえてる、病身でいながら元氣である憐れな老母……それを彼はありありと思ひ浮かべた。それから彼はまた、自分の知つてゐる微賤な魂の人たちのことをも考えた。そして今や、それらの人たちにいかに自分を近く感じたことだったろう！ 幻影に駆られてゐる諸民族をたがいに衝突せしむる、あの殺害的狂乱の風が吹き過ぎる危急な時期のすぐあとで、あらゆる思想と人々とが猛然と取り組み合つてゐる火宅のようなパリーにおける、長年の困難な奮闘からのがれ出て、今やクリストフは、その逆上せる不毛な世界にたいして、その利己主義の戦いにたいして、また、自分こそ世界の理性だと自惚れながら実はその悪い夢にすぎない選良者、野心家、虚栄者、などにたいして、ある嫌厭の情を覚えたのだった。そして、温良と信仰と献身との純な炎に黙々と燃えてゐる、各民族のうちの無数の素朴な魂の人たち——世界の心とも言うべき人たち——のほうへ彼の愛はすべて向いていった。

「そうだ、私はあなたたちを知つてゐる。私はついにあなたたちにめぐりあつた。あなたたちは私と同じ血であり、私と同胞である。私は放蕩息子のようにあなたたちのもとを去つて、通りがかりの人影について行つた。けれどまたもどつて来た。私を迎えてほしい。

私たちは死者も生者も皆一体である。私がどこへ行こうと、あなたたちはいつも私といっしよにいる。私を負おぶつてくれたお母かあさん、私は今あなたを自分のうちに担になっている。それからあなたがた、ゴットフリート、シユルツ、ザビーネ、アントアネットあなたがたも皆私のうちにいる。あなたたちは私の富である。私たちはいっしよに歩こう。私はもうあなたたちを離れまい。私はあなたたちの声となろう。皆力を合わせて、私たちは目的地に達するだろう……。」

一条の光線が、静しずくかに雪をたらしめる木々の濡ぬれた枝葉の間から、すべり込んできた。下のほうの小さな牧場から、幼い声が聞こえていた。三人の少女が、森の家のまわりでいっしよにロンドを踊りながら、無邪気な古いドイツの歌曲リートを歌っているのだった。そして遠くから西風が薔薇ばらの香かほりのように、フランスの鐘の音をもたらしていた……。

「おう、平和、崇高な諧かい調ちょう、解放された魂の音楽！ 汝なんじのうちには、悲しみも喜びも死も生も、敵同志の民族も味方同志の民族も、みないっしよに融とけ合っている。私は汝を愛する、汝を求める、汝を自分のものとしよう……。」

夜の帷とばりが落ちてきた。クリストフは夢想から覚さめて、オリヴィエの信実な顔を自分のそ

ばに見出した。彼はそれに微笑ほほえみかけて抱擁した。それからまた二人は、無音のまま森の中を歩きだした。そしてクリストフは、オリヴィエの先に立って道を開いて進んだ。

黙々として、ただ二人、連れもなく、

われらは前後に相並びて進みゆきぬ、

あたかもフランシスコ修道士らのごとくに……。

青空文庫情報

底本：「ジャン・クリストフ（三）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年8月18日改版第1刷発行

入力：tatsuki

校正：伊藤時也

2008年1月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ジャン・クリストフ

JEAN-CHRISTOPHE

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 第七巻 家の中

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>